公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第71集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(43)

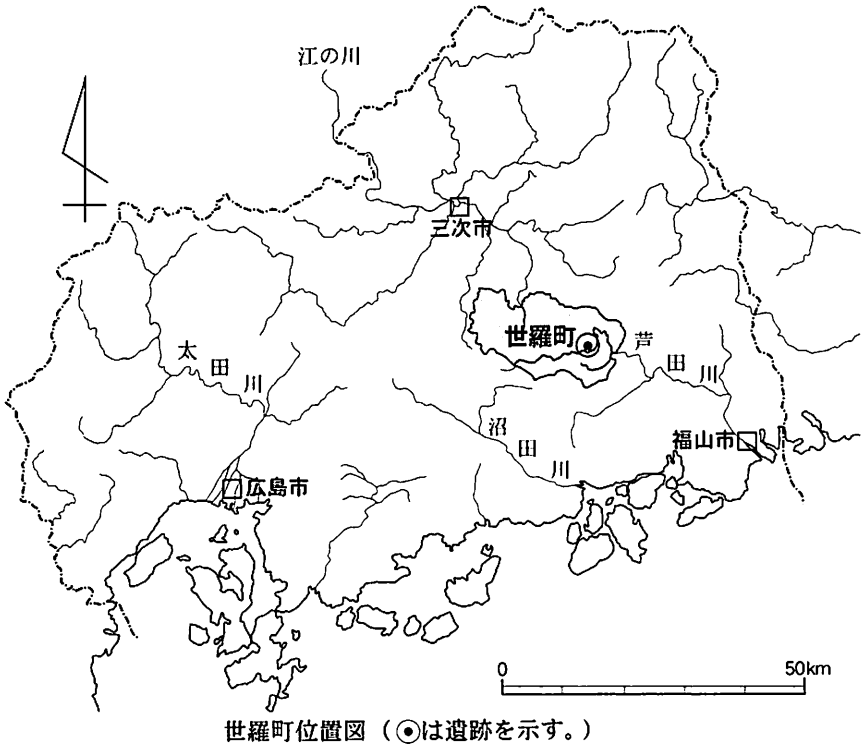
大柳遺跡

2015

公益財団法人　広島県教育事業団

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（43）

大柳遺跡



世羅町位置図（⊙は遺跡を示す。）

２０１５

公益財団法人　広島県教育事業団

例　　言

1　本書は，平成 23（2011）年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う大柳遺跡（世羅郡世羅町大字川尻字大柳山 1141-2）の発掘調査報告である。

2　発掘調査及び整理作業・報告書作成は，国土交通省中国地方整備局福山河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団（現･公益財団法人広島県教育事業団）が実施した。

3　発掘調査は，河村靖宏（現・広島県教育委員会）・山澤直樹・梅本健治・青山透（退職）が担当した。

4　出土遺物の整理・復元は梅本・河村と賃金職員の西山梨香・木村和美が，実測・図面の整理・写真撮影は梅本が中心となって行った。

5　本書は，梅本が執筆・編集した。

6　図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。

7　本書に使用した北方位はすべて旧日本測地系平面直角座標第Ⅲ座標系北である。

8　第２図は国土交通省国土地理院発行の１：25,000 の地形図（本郷・甲山）を使用した。

9　第９図（基壇状遺構ｂ），第 11 図（基壇状遺構ｃ～ｅ），第 12 図（基壇状遺構ｆ）の平面図の原図は復建調査設計株式会社（広島県広島市）に写真測量（測量･図化業務）を委託した。

10　第 36・37 図の石仏４体（137 ～ 140）の実測図の原図は，株式会社計測リサーチコンサルタント（広島県広島市）の写真測量（三次元計測・図化業務）による。

11　出土古銭の銭種等については，宮澤知之（佛教大学教授）・吉田昭二（京都古泉会代表）の両氏によるご教示を参考にした。

12　出土五輪塔部材・石仏の石材は，広島考古研究所　柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。

13　遺跡の名称については，当初「大柳古墓」（広島県教育委員会『広島県遺跡地図』Ⅴ（御調郡・世羅郡）1998 年）として周知され，その後試掘調査の結果をもとに，平成 21・23 年に「大柳第１～５号墓」の名称で周知したが，発掘調査の結果，石積墓と考えられたものの大半は基壇状遺構と考えられるため，「大柳遺跡」とした。また，同じく大柳第５号墓は「大柳遺跡（南調査区）」とした。

14　記録類及び出土品は，すべて広島県立埋蔵文化財センター（広島市西区観音新町四丁目８番 49 号）において保管している。 石仏・五輪塔部材は現地付近に移設・保管している。

目　次

Ⅰ　はじめに……（1）

Ⅱ　位置と環境 ……（9）

Ⅲ　調査の概要……(15)

Ⅳ　遺構と遺物……(17)

Ⅴ　まとめ……(81)

挿図目次

第 1 図　中国横断自動車道尾道松江線路線図と調査した遺跡の位置図 ……（2）
第 2 図　大柳遺跡周辺遺跡分布図（1：25,000）……(11)
第 3 図　周辺地形図（1：2,000）……(16)
第 4 図　調査前地形測量図（1：200）……折込み
第 5 図　遺構配置図（1：200）……折込み
第 6 図　土層断面実測図（1：80）……折込み
第 7 図　基壇状遺構 a 土坑実測図（1：20）……(18)
第 8 図　基壇状遺構 a 実測図（1：20）……折込み
第 9 図　基壇状遺構 b 実測図（1：40）……(19)
第10図　基壇状遺構 c ～ e 実測図（1）（1：40）……(20)
第11図　基壇状遺構 c ～ e 実測図（2）（1：40）……折込み
第12図　基壇状遺構 f 実測図（1：40）……折込み
第13図　瓦溜実測図（1：20）……(23)
第14図　中段五輪塔部材群出土状況実測図（1：30）……(26)
第15図　南調査区石仏・地表面五輪塔部材群出土状況実測図（1：20，1：30）……折込み
第16図　出土遺物実測図（1）（1：3）　土師質土器・陶器……(28)
第17図　出土遺物実測図（2）（1：4）　土師質土器……(29)

第18図　出土遺物実測図（3）（1：4）　土師質土器・瓦質土器……(30)
第19図　出土遺物実測図（4）（1：4）　軒丸瓦①……(32)
第20図　出土遺物実測図（5）（1：4）　軒丸瓦②……(33)
第21図　出土遺物実測図（6）（1：4）　軒丸瓦③……(35)
第22図　出土遺物実測図（7）（1：4）　軒丸瓦④・軒平瓦①……(36)
第23図　出土遺物実測図（8）（1：4）　軒平瓦②……(37)
第24図　出土遺物実測図（9）（1：4）　軒平瓦③……(39)
第25図　出土遺物実測図（10）（1：4）　軒平瓦④・丸瓦①　……(40)
第26図　出土遺物実測図（11）（1：4）　丸瓦②　……(41)
第27図　出土遺物実測図（12）（1：4）　丸瓦③　……(42)
第28図　出土遺物実測図（13）（1：4）　丸瓦④　……(44)
第29図　出土遺物実測図（14）（1：4）　丸瓦⑤　……(45)
第30図　出土遺物実測図（15）（1：4）　丸瓦⑥　……(46)
第31図　出土遺物実測図（16）（1：4）　平瓦①　……(49)
第32図　出土遺物実測図（17）（1：4）　平瓦②　……(50)
第33図　出土遺物実測図（18）（1：4）　平瓦③・雁振瓦　……(51)
第34図　出土遺物実測図（19）（1：4）　鬼瓦　……(52)
第35図　出土遺物実測図（20）（1：8）　石仏①　……(54)
第36図　出土遺物実測図（21）（1：10）　石仏②　……(55)
第37図　出土遺物実測図（22）（1：10）　石仏③　……(56)
第38図　出土遺物実測図（23）（1：8）　空風輪　……(57)
第39図　出土遺物実測図（24）（1：8）　火輪　……(59)
第40図　出土遺物実測図（25）（1：8）　水輪　……(61)
第41図　出土遺物実測図（26）（1：8）　地輪　……(62)
第42図　出土遺物拓影（2：3）　古銭　……(64)
第43図　出土遺物実測図（27）（1：2）　鉄製品　……(66)

表目次

第 1 表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧　……(3)
第 2 表　遺構の方位と規模　……(15)
第 3 表　出土位置別古銭一覧　……(67)
第 4 表　出土遺物一覧表　……(70)

図版目次

図版 1　a　大柳遺跡遠景（空中写真，南から）
　　b　調査後全景（空中写真，南東から）
　　c　調査前近景（南西から）
図版 2　a　石仏 137（南西から）
　　b　石仏 138（南から）
　　c　石仏 139（左），140（南から）
図版 3　a　南調査区石仏群（南から）
　　b　同 上（南西から）
　　c　同 上（南東から）
図版 4　a　基壇状遺構 a（南東から）
　　b　同 上（南から）
　　c　同 上（西から）
図版 5　a　基壇状遺構 a 遺物出土状況（西から）
　　b　同 上（南から）
　　c　基壇状遺構 a 土坑内皿・擂鉢出土状況（西から）
図版 6　a　基壇状遺構 b（北西から）
　　b　基壇状遺構 c（北西から）
　　c　基壇状遺構 d・e（北西から）
図版 7　a　五輪塔部材Ａ群（南東から）
　　b　五輪塔部材Ｂ群（南東から）
　　c　五輪塔部材Ｄ群（北東から）
図版 8　a　下段瓦溜検出状況（北西から）
　　b　同 上（北西から）
　　c　瓦溜・通路（北東から）
図版 9　a　瓦溜（東から）
　　b　同 上（南東から）
　　c　基壇状遺構 f 古銭出土状況（南東から）
図版 10　a　基壇状遺構 f（北西から）
　　b　同 上（北から）
　　c　基壇状遺構 f 中央長方形石組（東から）
図版 11　出土遺物 1　土器　　図版 12　出土遺物 2　瓦①
図版 13　出土遺物 3　瓦②　　図版 14　出土遺物 4　瓦③
図版 15　出土遺物 5　瓦④　　図版 16　出土遺物 6　瓦⑤，石仏・五輪塔部材①（空風輪）
図版 17　出土遺物 7　五輪塔部材②（火輪・水輪）
図版 18　出土遺物 8　五輪塔部材③（水輪・地輪），古銭①
図版 19　出土遺物 9　古銭②　　図版 20　出土遺物 10　鉄製品

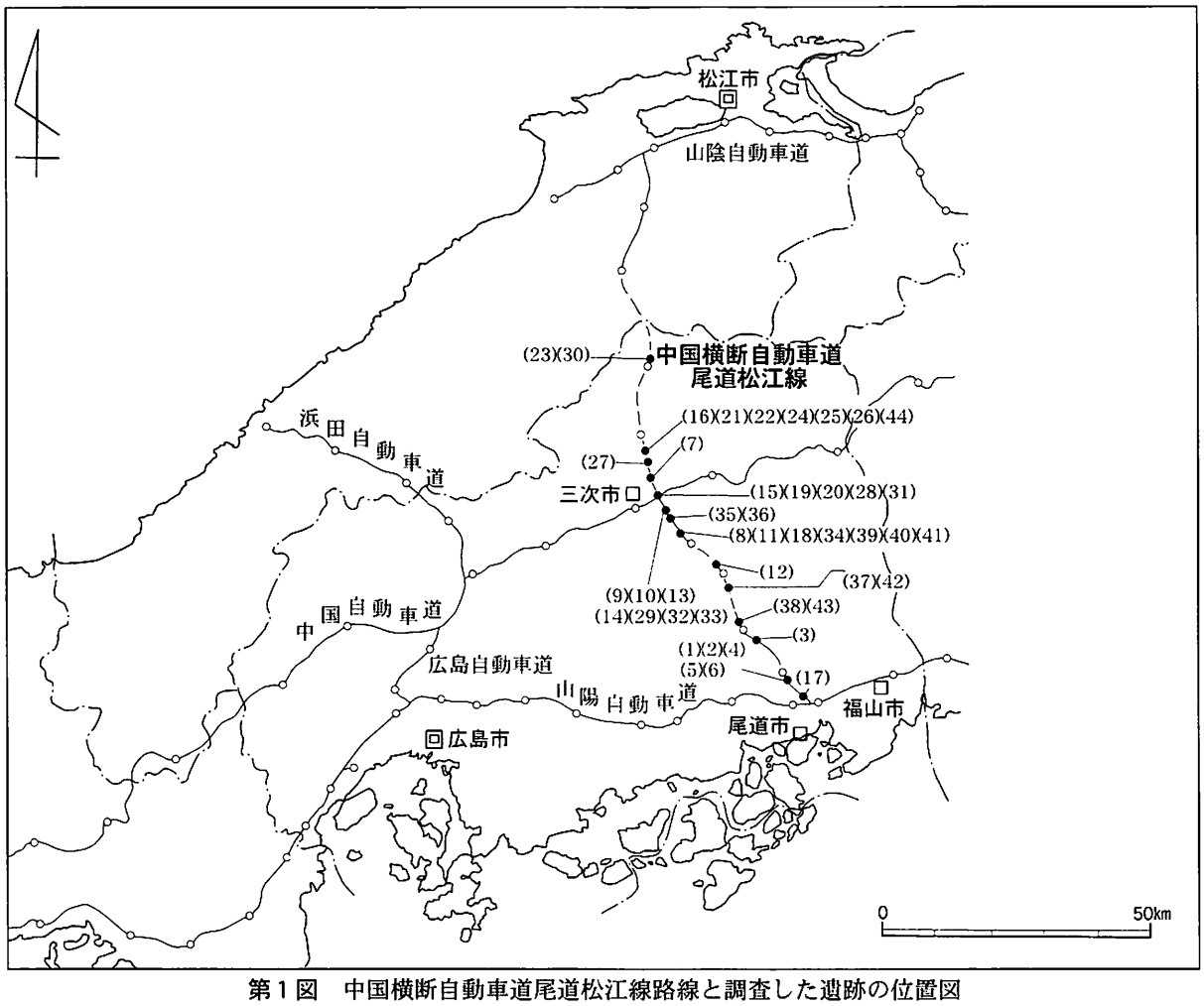
Ⅰ はじめに

大柳遺跡の発掘調査は中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係るものである。本事業は，本州四国連絡道路尾道今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって，山陰，山陽及び四国地方を南北に結ぶ地域連帯構想を推進し，本圏域の産業，経済及び文化の発展と沿線地域の生活向上に寄与しようとするものである。

日本道路公団中国支社尾道工事事務所（以下，「道路公団」という。）は，平成13（2001）年２月７日付けで，当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて，広島県教育委員会（以下，「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い，大柳遺跡所在地については平成14年３月27日付けで事業地内に試掘調査が必要な箇所１か所（要試掘地点甲山№12）が存在する旨を回答した。その後，中国横断自動車道尾道松江線建設事業は，平成17年10月１日の日本道路公団の解散に伴って西日本高速道路株式会社に引き継がれ，さらに平成18年度からは国土交通省に承継された。県教委は，平成21年８～11月に当該箇所の試掘調査を実施し，大柳第１～４号墓の存在を確認した旨を同年12月22日に国土交通省中国地方整備局福山河川道路事務所（以下，「国交省」という。）に回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と国交省は協議を重ねたが，設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。国交省は，平成22年12月22日付けで世羅町教育委員会（以下，「町教委」という。）宛て文化財保護法第94条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し，町教委は平成23年２月15日付けで国交省宛て工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。国交省はこれを受けて，同年２月25日付けで財団法人広島県教育事業団（現・公益財団法人広島県教育事業団。以下，「教育事業団」という。）に大柳第１～４号墓の調査依頼を行なった。国交省と教育事業団は同年４月１日付けで委託契約を結び，教育事業団は平成23年４月８日付けで文化財保護法第92条第１項に基づく大柳第１～４号墓の発掘調査届を町教委宛て提出した。同年４月18日付けで町教委から法の趣旨を尊重し，慎重に発掘調査を実施するよう指示を受けた。教育事業団は同年５月９日から８月26日までの３か月半発掘調査を行った。さらに，発掘調査期間中に別途確認された大柳第５号墓（調査面積４㎡）を追加調査することになり，国交省は同年７月４日付けで町教委宛て文化財保護法第94条第１項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し，町教委は同年７月４日付けで国交省宛て工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。国交省はこれを受けて，同年７月７日付けで教育事業団に大柳第５号墓の調査依頼を行なった。教育事業団は同年７月７日付けで国交省宛て大柳第５号墓の調査承諾を回答し，同年７月12日付けで町教委宛て文化財保護法第92条第１項に基づく発掘調査届を提出した。調査面積は大柳第１～４号墓（500㎡）と大柳第５号墓（４㎡）を合わせて504㎡である。７月２日には，世羅町教育委員会と共催で遺跡見学会を開催し，約110名の参加があった。

本報告書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，また当地域の歴史を知る手がかりとして寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては，教育事業団埋蔵文化財調査指導委員の松下正司氏・古瀬清秀氏・小都隆氏・藤野次史氏から現地指導を受けた。また，国土交通省中国地方整備局福山河川道路事務所，西日本高速道路株式会社中国支社尾道工事事務所，世羅町教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただきました。記して感謝の意を表します。



第１図　中国横断自動車道尾道松江線路線と調査した遺跡の位置図

(1) 牛の皮城跡（第１～３次）
曽川２号遺跡
(2) 曽川１号遺跡（A～D地区）
(3) 池ノ奥古墳
(4) 城根遺跡
牛の皮城跡（第４次）
曽川１号遺跡（E地区）
(5) 曽川１号遺跡（G～J地区）
(6) 曽川１号遺跡（K地区）
(7) 札場古墳
大平遺跡
後山大平古墳
(8) 北野山遺跡
(9) 向江田中山遺跡
(10) 極現第１～３号古墳
(11) 大番奥池第１～３・７号古墳
(12) 茶臼古墳
(13) 瀬戸越南古墳
(14) 上陣遺跡
(15) 和知白鳥遺跡（第２次）
(16) 曲第２～５号古墳
(17) 家ノ城跡（第１～５次）
(18) 片野中山第９～12号古墳
右谷遺跡
(19) 和知白鳥遺跡（第１次）
(20) 段遺跡（第１・２次）
(21) 川平第１号古墳
常定川平１号遺跡
常定川平２号遺跡
(22) 稲干場第２～４・９号古墳
(23) 只野原１号遺跡
只野原２号遺跡
只野原３号遺跡（第１・２次）
(24) 番久遺跡
原畑遺跡（第１次調査）
(25) 向泉川平１号遺跡
向泉川平２号遺跡
(26) 石谷２号遺跡（第１・２次）
石谷３号遺跡
(27) 馬ヶ段遺跡
馬ヶ段第１・２号横穴墓
皇塩遺跡
(28) 三重１号遺跡（第１・２次）
(29) 宮の本第20～26・31・32号古墳
(30) 岡東第１～７号古墳
岡１号遺跡
岡２号遺跡
半戸１号遺跡
岡東第１号横穴墓
(31) 風呂谷遺跡
風呂谷古墳
(32) 宮の本遺跡
宮の本第11・33～35号古墳
(33) 箱山第３～６号古墳
(34) 下矢井南第３～５号古墳
(35) 若見迫遺跡
畑尻遺跡
(36) 三隅山遺跡
(37) 頼藤城跡
(38) 杉谷遺跡
(39) 海田原第24～27号古墳
(40) 殿平古墳
長畑山古墳
(41) 長畑山北第１～６号古墳
(42) 善正平１号遺跡
善正平２号遺跡
(43) 大柳遺跡
(44) 原畑遺跡（第２次調査）

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
（1）	牛の皮城跡（北郭群）	第１次	畝状竪堀群	平成15年１月20日～３月14日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
		第２次	１～４郭	平成15年７月７日～10月31日			
		第３次	西竪堀	平成15年11月10日～11月28日			
	曽川２号遺跡			平成15年１月20日～３月７日	尾道市御調町大町字西川	古代末～中世	集落跡
（2）	曽川１号遺跡	Ａ地区	旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～平成15年１月17日	尾道市御調町大町字曽川	弥生時代～中世	集落跡
		Ｂ地区	旧・Ｐ２第一調査区	平成15年４月７日～５月23日			
		Ｃ地区	旧・Ｐ２第二調査区				
		Ｄ地区	旧・Ｐ１	平成16年１月６日～２月５日			
（3）	池ノ奥古墳			平成16年８月23日～10月28日	世羅郡世羅町字津戸字天神	古墳時代後期	古墳
（4）	城根遺跡			平成15年１月27日～３月７日	尾道市御調町大町字城根	弥生時代終末～古墳時代前半	箱式石棺
	牛の皮城跡（北郭群）	第４次	５郭	平成18年１月30日～２月24日	尾道市御調町大町字二の丸	中世	城跡
	曽川１号遺跡	Ｅ地区	旧・Ｐ４	平成15年12月１日～12月19日	尾道市御調町大町字米田	縄文時代後期～中世	遺物包含層
（5）	曽川１号遺跡	Ｇ地区	旧・Ｐ３	平成16年６月７日～８月６日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
		Ｈ地区	旧・Ｐ３側道				
		Ｉ地区	旧・Ｐ４側道				
		Ｊ地区	旧・Ｐ２	平成17年１月11日～３月４日			
（6）	曽川１号遺跡	Ｋ地区		平成17年４月11日～７月１日	尾道市御調町大町字曽川・米田	弥生時代～中世	集落跡
（7）	札場古墳			平成17年11月21日～平成18年１月27日	三次市後山町字札場	古墳時代後期	古墳
	大平遺跡			平成19年６月25日～10月５日	三次市後山町字大平	弥生時代後期～古代	集落跡
	後山大平古墳			平成19年６月25日～10月５日	三次市後山町字大平	古墳時代後期	古墳
（8）	北野山遺跡			平成18年７月３日～８月４日	三次市吉舎町敷地	平安時代	仏教関連の施設跡
（9）	向江田中山遺跡			平成18年４月17日～６月23日	三次市向江田町字中山	古墳時代末～古代	集落跡
(10)	権現第１～３号古墳			平成17年７月11日～11月11日	三次市向江田町権現	古墳時代中期	古墳
(11)	大番奥池第１～３・７号古墳			平成18年４月17日～８月４日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代後期	古墳
(12)	茶臼古墳			平成20年７月７日～９月５日	三次市甲奴町大字宇賀	古墳時代中期	古墳
(13)	瀬戸越南古墳			平成19年６月25日～８月10日	三次市向江田町字瀬戸越	古墳時代中期	古墳
(14)	上陣遺跡			平成19年７月９日～８月31日	三次市向江田町字上陣	古墳時代中期	集落跡
(15)	和知白鳥遺跡（第２次）			平成19年９月25日～12月21日	三次市和知町字白鳥	後期旧石器時代	集落跡
(16)	曲第２～５号古墳			平成19年７月２日～９月21日	庄原市口和町金田字本谷	古墳時代中期	古墳
				平成19年12月３日～12月７日		縄文時代前期・晩期	包含地

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(17)	家ノ城跡	第1次	南東郭群	平成15年9月16日～10月31日	尾道市木之庄町木梨字家城東平	中世	城跡
		第2次	南東郭群	平成16年5月17日～6月11日			
		第3次	1郭周辺	平成17年10月17日～11月11日			
		第4次	1郭・北尾根	平成18年4月17日～7月21日			
		第5次	1郭・北西尾根	平成19年4月16日～6月15日			
(18)	片野中山第9～12号古墳			平成19年4月16日～8月8日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代中期	古墳
	右谷遺跡			平成19年4月16日～8月8日	三次市吉舎町敷地字中山	古墳時代後期～古代	集落跡 墓地
(19)	和知白鳥遺跡（第1次）			平成18年4月17日～12月22日	三次市和知町字白鳥・四拾貫町字三重	古墳時代中期～古代	集落跡・古墳
(20)	段遺跡	第1次		平成18年9月19日～12月15日	三次市四拾貫町字段	古墳時代中期～後期	集落跡
		第2次		平成19年9月25日～12月21日		後期旧石器時代	集落跡
(21)	川平第1号古墳			平成20年4月21日～6月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古墳
	常定川平1号遺跡					古墳時代中期	集落跡
	常定川平2号遺跡					縄文時代	落し穴
(22)	稲干場第2～4・9号古墳			平成19年10月9日～12月21日	庄原市口和町大月字稲干場	古墳時代後期	古墳
(23)	只野原1号遺跡			平成20年9月8日～9月26日	庄原市高野町下門田字只野原	古墳時代	箱式石棺
	只野原2号遺跡			平成22年4月19日～11月19日	庄原市高野町下門田字只野原	弥生時代～古墳時代	自然流路
	只野原3号遺跡	第1次		平成21年5月18日～8月28日	庄原市高野町下門田字登立	旧石器時代～古墳時代	包含層 集落跡
		第2次		平成22年4月19日～11月19日			
(24)	番久遺跡			平成20年7月28日～12月25日	庄原市口和町大月字番久	縄文時代～古墳時代	集落跡 落し穴
	原畑遺跡（第1次調査）				庄原市口和町大月字原畑	弥生時代～古墳時代	集落跡
(25)	向泉川平1号遺跡			平成20年4月21日～7月11日	庄原市口和町向泉字川平	旧石器時代～縄文時代	包含層
	向泉川平2号遺跡					弥生時代～古墳時代	集落跡
(26)	石谷2号遺跡	第1次		平成21年4月13日～6月12日	庄原市口和町金田字塩谷	縄文時代	落し穴
		第2次		平成22年4月12日～6月23日			
	石谷3号遺跡			平成21年4月13日～6月12日	庄原市口和町金田字塩谷	古墳時代後期	集落跡
(27)	馬ヶ段遺跡 馬ヶ段第1号横穴墓 馬ヶ段第2号横穴墓			平成20年4月21日～7月11日	庄原市水越町字馬ヶ段	古墳時代～平安時代	集落跡 横穴墓
	皇塩遺跡				庄原市水越町字皇塩	平安時代	炭窯跡
(28)	三重1号遺跡	第1次		平成20年11月4日～12月19日	三次市四拾貫町字三重	古墳時代～古代	集落跡
		第2次		平成21年4月13日～9月25日		古墳時代中期	集落跡
(29)	宮の本第20～26・31・32号古墳			平成19年4月16日～12月25日	三次市向江田町字宮本・天神	古墳時代前期～後期	古墳

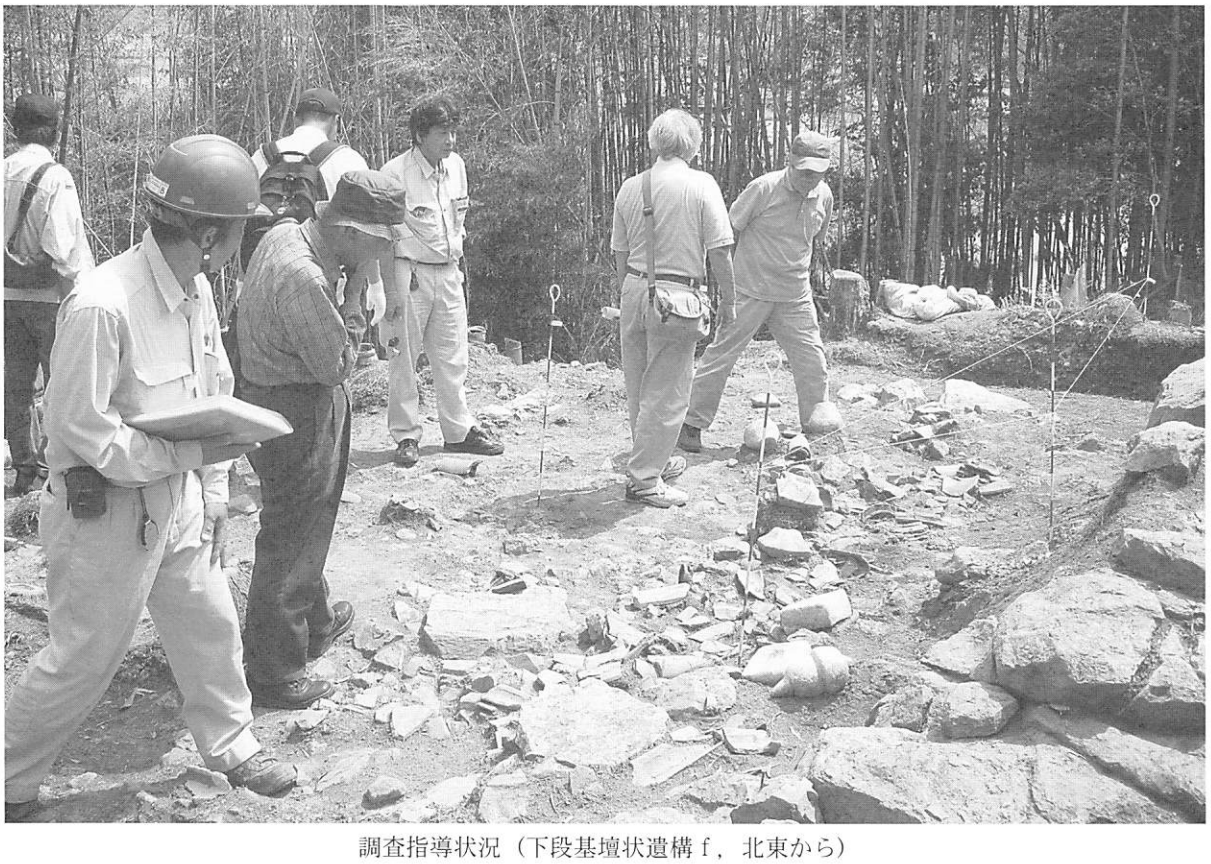
報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(30)	岡東第１～７号古墳		平成20年５月７日～９月26日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代中期	古墳
	岡１号遺跡				縄文時代	落し穴
	岡２号遺跡		平成21年４月13日～５月15日		古墳時代後期	集落跡
	半戸１号遺跡		平成22年４月12日～５月14日	庄原市高野町岡大内字半戸	縄文時代	落し穴
	岡東第１号横穴墓		平成24年９月３日～９月21日	庄原市高野町岡大内字岡	古墳時代後期	横穴墓
(31)	風呂谷遺跡		平成21年４月13日～11月20日	三次市四拾貫町	旧石器～縄文時代・古墳時代～古代	包含地集落跡
	風呂谷古墳				古墳時代後期	古墳
(32)	宮の本遺跡		平成20年４月21日～10月31日	三次市向江田町字宮本	古代	集落跡
	宮の本第11・33～35号古墳				古墳時代後期～古代	古墳
(33)	箱山第３～６号古墳		平成18年８月21日～12月８日	三次市向江田町字箱山	古墳時代前～後期	古墳
(34)	下矢井南第３～５号古墳		平成19年10月９日～12月21日	三次市吉舎町矢井字西見山，敷地字北野山	古墳時代前・中期	古墳
(35)	若見迫遺跡		平成19年４月16日～５月25日	三次市三良坂町岡田字若見迫	古代	集落跡
	畑尻遺跡		平成21年４月13日～６月５日	三次市三良坂町岡田字畑尻	旧石器～縄文時代・近世	落し穴・集落跡
(36)	三隅山遺跡		平成24年４月９日～８月10日	三次市三良坂町長田字三隅山，字堂面	中世～近世	墓地
(37)	頼藤城跡		平成20年４月21日～７月31日	三次市甲奴町小童字塚ヶ迫，字小豆山	中世	城跡
(38)	杉谷遺跡		平成21年９月７日～10月16日	世羅郡世羅町東上原字杉谷	古墳時代後期・中近世	墓・集落跡
(39)	海田原第24～27号古墳		平成22年９月27日～12月17日	三次市吉舎町海田原字殿平	古墳時代中期～後期	古墳
(40)	殿平古墳		平成20年９月24日～12月26日	三次市吉舎町海田原字殿平	古墳時代中期	古墳
	長畑山古墳		平成20年９月24日～12月26日	三次市吉舎町海田原字長畑山	古墳時代後期	古墳
(41)	長畑山北第１～６号古墳		平成21年６月29日～12月22日	三次市吉舎町海田原字長畑山	古墳時代後期	古墳
(42)	善正平１号遺跡・善正平２号遺跡		平成21年４月13日～９月25日	三次市甲奴町宇賀字善正平	古墳時代後期～古代	集落跡
(43)本書	**大柳遺跡**		**平成23年５月９日～８月26日**	**世羅郡世羅町大字川尻字大柳山**	**中世**	**仏教関連遺跡**
(44)	原畑遺跡（第２次調査）		平成26年４月７日～５月23日	庄原市口和町大月字原畑	古墳時代・中近世	集落跡

（報告書）

(1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川２号遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（１）』 2005年
(2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（２）曽川１号遺跡（Ａ～Ｄ地区）』 2006年
(3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（３）池ノ奥古墳』 2007年
(4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（４）城根遺跡　曽川１号遺跡（Ｅ地区）　牛の皮城跡（第４次）』 2008年
(5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（５）曽川１号遺跡（Ｇ～Ｊ地区）』 2008年
(6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（６）曽川１号遺跡（Ｋ地区）　』 2008年
(7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（７）札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年
(8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（８）北野山遺跡』 2009年
(9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（９）向江田中山遺跡』 2010年
(10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）権現第１～３号古墳』 2010年
(11) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（11）大番奥池第１～３・７号古墳』 2010年
(12) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（12）茶臼古墳』 2011年
(13) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（13）瀬戸越南古墳』 2011年
(14) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（14）上陣遺跡』 2011年
(15) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（15）和知白鳥遺跡１（旧石器時代の調査）』 2011年
(16) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（16）曲第２～５号古墳』 2011年
(17) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（17）家ノ城跡（第１～５次）』 2012年
(18) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（18）片野中山第９～12号古墳・右谷遺跡』 2012年
(19) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（19）和知白鳥遺跡２（古墳時代の調査）』 2012年
(20) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（20）段遺跡』 2012年
(21) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（21）川平第１号古墳・常定川平１号遺跡・常定川平２号遺跡』 2012年
(22) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（22）稲干場第２～４・９号古墳』 2012年
(23) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（23）只野原１号遺跡・只野原２号遺跡・只野原３号遺跡』 2013年

(24) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（24）番久遺跡・原畑遺跡』 2013年
(25) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（25）向泉川平１号遺跡・向泉川平２号遺跡』 2013年
(26) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（26）石谷２号遺跡・石谷３号遺跡』 2013年
(27) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（27）馬ヶ段遺跡・皇塩遺跡』 2013年
(28) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（28）三重１号遺跡』 2013年
(29) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（29）宮の本第20～26・31・32号古墳』 2013年
(30) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（30） 岡東第１～７号古墳・岡東第１号横穴墓・岡１号遺跡・岡２号遺跡・半戸１号遺跡』 2014年
(31) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（31） 風呂谷遺跡・風呂谷古墳』 2014年
(32) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（32） 宮の本遺跡，宮の本第11・33～35号古墳』 2014年
(33) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（33） 箱山第３～６号古墳』 2014年
(34) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（34） 下矢井南第３～５号古墳』 2014年
(35) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（35） 若見迫遺跡・畑尻遺跡』 2014年
(36) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（36） 三隅山遺跡』 2014年
(37) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（37） 頼藤城跡』 2014年
(38) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（38） 杉谷遺跡』 2014年
(39) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（39） 海田原第24～27号古墳』 2015年
(40) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（40） 殿平古墳・長畑山古墳』 2015年
(41) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（41） 長畑山北第１～６号古墳』 2015年
(42) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（42） 善正平１号遺跡・善正平２号遺跡』 2015年
(43) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（43） 大柳遺跡』 2015年
(44) 公益財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（44） 原畑遺跡（第２次調査）』 2015年

大柳遺跡調査後全景（空中写真，南から）



調査指導状況（下段基壇状遺構ｆ，北東から）

Ⅱ　位置と環境

大柳遺跡は広島県中央部に位置する世羅郡世羅町に所在する。世羅町は平成16（2004）年に世羅郡の旧世羅町・甲山町・世羅西町の三町が合併してできた町で，東西27km，南北15kmと東西に長い町域である。遺跡はこの世羅町東部の旧甲山町の中央部に存在する。世羅町は中国脊梁山地南側に広がる標高400～600mの世羅台地の中心をなしており，台地の周縁には鷹ノ巣山（標高922.1m）をはじめ，岳山・大士山・カンノ木山など標高700～900m級の山々が連なり，各所に黒川明神山・男鹿山・新山などの標高500～600m台の特徴的な円錐形の玄武岩鐘がみられる。世羅台地は東からやがて南に流れる芦田川をはじめ，北に流れる江の川や南西方向に流下する沼田川など県内主要河川が集まる水源域であり，これらの河川相互の争奪が処々で行われている。さらに，旧世羅町や旧甲山町の大半で台地面を侵食しながら西から東に流れる芦田川水系の小河川の流域には，甲山盆地などの山間盆地が形成されている。

世羅町は中世荘園である高野山領大田荘の故地であり，現在の国道184号は荘域と倉敷地である尾道とを結ぶ往還（出雲街道）とほぼ重なる。町内には康徳寺古墳や康徳寺廃寺を始めとする多くの特徴的な古墳や寺院跡，石仏・石塔群など多くの古代・中世の文化財が残されている。ここでは，遺跡周辺を中心に旧甲山町・旧世羅町域の歴史的環境についてみていくことにする。

縄文時代　単独で調査された縄文時代の遺跡はない。高山（こうやま）1号遺跡[1]（別迫）では晩期後半の土器が谷から出土しており，平底の精製土器（壺・浅鉢・深鉢）と尖底に近い丸底の粗製土器（深鉢）がある。谷奥の緩斜面に立地する頓迫（とんざこ）1～3号遺跡[2]（川尻）では，中期後半～晩期の土器片，石鏃・スクレイパーなどの石器や多量の安山岩製の剥片がみつかっている。弥生時代中期の集落跡である金井原（かねいばら）遺跡[3]（川尻）では，土坑内から晩期後葉の深鉢片が出土している。

弥生時代　前・中期の遺跡の調査例は少なく，大柳遺跡の西1.6kmの芦田川南岸の沖積地に立地する乙川北（おつがわきた）遺跡[4]（小世良）では，前期の貯蔵穴や中期の竪穴住居跡，後期の竪穴住居跡と木棺墓を含む墓坑群などを検出した。同じく芦田川南岸の丘陵頂部に立地する近重山遺跡（東神崎）では中期後半の壺・甕が出土し，石列をもつ墳墓の可能性が考えられている。大柳遺跡の南側至近距離の，芦田川南岸の低丘陵緩斜面に立地する金井原遺跡[5]は中期前葉～中葉の集落跡・墓地である。住居跡からは石鏃の製品や未成品・チップ，土器片紡錘車が集中的に出土し，抉入柱状片刃石斧・磨製石包丁・石錐などが出土している。竪穴住居跡5軒や掘立柱建物跡9棟などから成る居住域に近接して木棺墓10基の墓地が形成されている。2基の木棺墓からは計22本の尖端などに折損がみられる鋸歯縁をもつ特徴的な石鏃が出土しており，注目される。このほか，高山1号遺跡では前期の，高田遺跡（伊尾）・高村遺跡（伊尾）では中期の土器片がみつかっている。

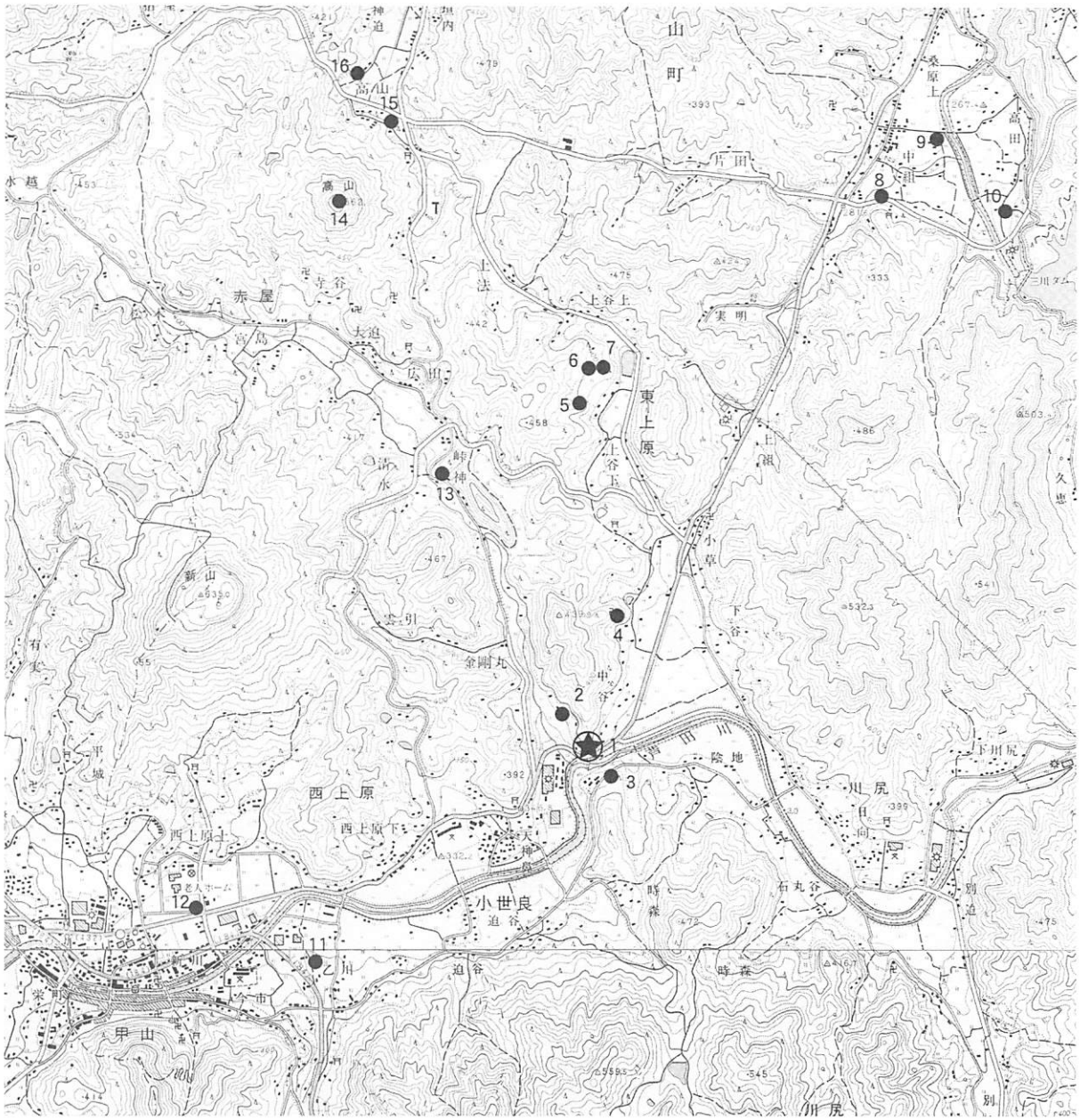
後期の遺跡では，集落跡の田龍（だりゅう）遺跡[6]（本郷），藤鞘（ふじさや）遺跡[7]（本郷），近森遺跡[8]（伊尾），墳墓群の

矢ノ迫遺跡[9]（重永）などがある。田龍遺跡・藤鞘遺跡は盆地の中心部に近接して存在し，田龍遺跡は芦田川北岸の微高地に立地する。後期後半の４軒の竪穴住居跡からなり，２本柱の住居からはガラス製小玉が出土した。藤鞘遺跡の径７ｍの大型住居跡には炉跡から放射状に延びる間仕切りの溝がみられ，ガラス製小玉が出土している。近森遺跡は低丘陵上に立地する後期～終末期の集落跡で，４軒が重複する住居では山陰系の甑形土器や土製勾玉・紡錘車が出土した。芦田川南岸の丘陵鞍部に立地する矢ノ迫遺跡は弥生時代後期～古墳時代初頭頃の墳墓群で，南北に並列する箱式石棺・土坑墓を検出している。また，土居丸遺跡[10]（西神崎）で２点，龍王山２号遺跡[11]（伊尾）で１点の分銅形土製品が出土している。特に，後者の分銅形土製品は全面に刺突痕をもつ方形板状のもので，時期は後期前半と考えられている。

古墳時代　古墳時代の遺跡では古墳と集落跡などがある。

前半期の遺跡では，龍王山２号遺跡（伊尾），土居丸遺跡，青山大迫遺跡[12]（青山）などの調査が行われている。龍王山２号遺跡は丘陵裾の緩斜面に立地する古墳時代初頭の集落跡で，竪穴住居跡１軒，土坑墓７基，貯蔵穴４基，祭祀関連土坑１基などを検出した。鼓形土器や甑形土器をはじめとする山陰系の土器や土製カマドが出土している。土居丸遺跡では竪穴住居跡２軒を検出し，山陰系の甑形土器や土製支脚が出土した。青山大迫遺跡は芦田川南岸の谷奥の丘陵東斜面に立地する墳墓群で，箱式石棺４基を検出した。特にＳＫ１では，南側を頭位とする男性人骨２体が上下に重なった状態で検出された。このほか，竪穴系の埋葬施設をもつ古墳として，箱式石棺を納める龍王山第１・３～５号古墳（伊尾），龍王山南第１号古墳（伊尾），松が鼻第１・２号古墳（宇津戸），竪穴式石室を埋葬施設とする寺上山第５号古墳（賀茂），矢の迫第１号古墳（重永），永安寺第８号古墳（中原）などがある。

後半期の遺跡としては，横穴式石室を埋葬施設とする古墳や製鉄遺跡・祭祀遺跡があるが，集落跡は明確なものはない。古墳は，県史跡康徳寺古墳[13]（寺町），県史跡神田（じんでん）第２号古墳[14]（堀越），近成山第１号古墳[15]（西神崎），亀ノ尾第１号古墳[16]（賀茂），湯船第６号古墳[17]（津口），風呂之元古墳[18]（徳市），池ノ奥古墳[19]（宇津戸）などがある。県史跡康徳寺古墳（６世紀末築造）・県史跡神田第２号古墳（７世紀中葉頃）・近成山第１号古墳（７世紀後半築造）の３基は甲山盆地中心部の芦田川両岸の１～２kmの近距離の範囲に立地しており，６世紀末～７世紀代の比較的近い時期に相次いで築造されている。康徳寺古墳は丘陵端部に立地する径17ｍ，高さ５ｍの円墳で，南に開口する玄室長5.9ｍ，同幅2.5ｍ，同高さ3.2ｍの巨大な石室をもつ。無袖式で，立柱石・楣石が存在する。神田第２号古墳は芦田川北岸の丘陵端部に立地する一辺９ｍ程度の方墳の可能性が高い古墳である。横長の玄室に羨道を取り付けたＴ字形の特異な石室で，玄室の各壁は花崗岩の一枚石を用いている。壁面は切石状に加工して面取りを施す。玄門部には軸受けをもつ片開きの扉石を嵌め込んでいる。近成山第１号古墳は芦田川南岸の丘陵東斜面に立地する径10～15ｍの円墳で，南側に開口する横穴式石室を埋葬施設とする。一枚石の天井の際に１～３段割石を積んでいる。石室内には花崗岩の厚さ49㎝の分厚い板石２枚の上に凝灰岩製の棺材が置かれており，家形石棺が納められていたと考えられている。これら３基の特徴的な古墳は芦田川



第２図　大柳遺跡周辺遺跡分布図（1：25,000）

1　**大柳遺跡**　2　杉谷遺跡　3　金井原遺跡　4　宇根城跡　5　宮地城跡　6　久代谷薬師堂五輪塔群
7　久代城跡　8　近森遺跡　9　大通土居屋敷跡　10　龍王山２号遺跡　11　乙川北遺跡　12　沼城跡
13　槙山古墓　14　高山城跡　15　高山１号遺跡　16　高山２号遺跡

を介して備後南部，さらには畿内の勢力との関わりをもつ在地勢力がつよく関わっているとみられる。亀ノ尾第１号古墳は芦田川北岸の丘陵斜面裾に立地し，南に開口する横穴式石室からは馬具（轡・鐙金具）や耳環が出土しており，築造は６世紀末～７世紀中葉と考えられる。湯船第６号古墳は江の川支流の美波羅川上流の丘陵斜面に立地し，南側に開口する横穴式石室には敷石や棺台石がみられる。羨道からは完形の須恵器（杯蓋・杯身・椀・蓋・坩・平瓶）が出土し，６世紀後半の築造が考えられる。風呂之元古墳は江の川水系黒渕川の谷頭部を望む丘陵斜面に立地し，棺台石の存在や釘の出土状況から横穴式石室内には２基以上の木棺が納められたと考えられる。装飾須恵器の小壺が出土しており，６世紀後半～７世紀初頭の築造とみられる。池ノ奥古墳は芦田川支流宇津戸川北岸の丘陵裾部緩斜面に立地する径10ｍの円墳で，南に開口する長さ6.6ｍの横穴式石室を埋葬施設とする。石室内からは耳環などが出土し，７世紀前半に築造されたとみられる。

古墳以外の遺跡としては，竪穴住居跡を検出した康徳寺廃寺[20]，カナクロ谷製鉄遺跡[21]（黒渕），祭祀遺跡の宇山遺跡[22]（寺町），杉谷遺跡[23]（東上原）などがある。康徳寺廃寺の寺域南東側で検出した竪穴住居跡は平面形方形のもので，多量の土師器（甕・小型壺・小椀など）が出土しており，５世紀中葉～後半に作られたと考えられる。カナクロ谷製鉄遺跡は芦田川上流の丘陵斜面に立地し，製鉄炉２基と鉄滓捨て場を検出している。製鉄炉は箱形炉の祖型的なもので，磁鉄鉱を主とする鉄鉱石と砂鉄の二つを素材に用いたとみられる。６世紀末～７世紀初め頃の操業が考えられる。芦田川北岸の井折谷の谷頭部に立地する宇山遺跡からは祭祀に用いられたと考えられる多くの土製品（勾玉形・丸玉形・短甲形・棒状・鏡形・土馬など）や手づくね土器（鉢・坩など）が出土している。６世紀後半～７世紀前半頃のものと考えられ，遺跡の東方２km の新山山麓に鎮座する式内社和理比売神社との関連が考えられている。宇根山開拓地遺跡（東神崎）は芦田川支流に臨む緩斜面から滑石製子持勾玉が出土し，６世紀後半～７世紀代の祭祀関連遺跡である。大柳遺跡の北西至近距離に位置する杉谷遺跡は，芦田川に注ぐ赤屋川左岸の丘陵裾に立地する。１ｍ大の浅い不整形土坑から完形の須恵器杯蓋４・杯身２が滑石製の臼玉２点と一緒に出土しており，何らかの祭祀行為の所産とみられる。土坑の時期は６世紀前葉とみられている。

古代　「和名抄」によれば，古代の世羅郡には桑原郷・大田郷・津口郷・鞆張郷の４郷があり，桑原郷が旧甲山町，大田郷以下の３郷がほぼ旧世羅町にあたる。世羅郡は古代には製鉄が盛んに行われ，延暦24（805）年12月７日付け太政官符（「類聚三代格」「日本後紀」）によれば，他の備後国７郡とともに租税を鉄で納める（「調糸を鍬鉄に相換える」）ことが許されている。

古代の遺跡としては，康徳寺廃寺[24]，三郎丸瓦窯跡[25]（三郎丸）などがある。康徳寺廃寺は甲山盆地の中心，芦田川北岸の丘陵裾南緩斜面に立地する。北に講堂跡，南に塔跡と想定される２つの基壇が南北に並んでおり，塔跡の西側に金堂が並ぶ法起寺式の伽藍配置をとると考えられている。白鳳末～奈良時代初期に備後北部の寺院の影響下に創建され，奈良時代中期から後期にかけては備後南部の寺院の強い影響下にあったとみられる。軒丸瓦・軒平瓦のほかに，鴟尾や塼仏，塑像の螺髪と推定される土製品などが出土している。三郎丸瓦窯跡は，康徳寺廃寺の南1.3km

の芦田川南岸の細長い谷奥の丘陵斜面に立地する地下式有段構造の登窯で，康徳寺廃寺に丸瓦・平瓦を供給していたと考えられている。

中世　平安時代末期の永万２（1166）年に平重衡が世羅郡東条の大田・桑原の２郷を後白河院に寄進して立券された大田荘は，世羅町を中心に広大な荘域をもつ全国でも有数の中世荘園である。平家滅亡後に高野山（金剛峯寺根本大塔）領となった大田荘は，鎌倉時代を通じて開発領主の系譜を引く下司橘氏や新たに地頭となった幕府の有力御家人三善氏との間で荘務権の内実をめぐる対立・抗争を激化させる。南北朝の動乱以後中世後期にかけて，備後国守護山名氏の勢力の浸透などにより高野山の大田荘支配は形骸化し，山内氏や杉原氏，田総氏，和智氏など周辺諸勢力の荘内への侵攻を許し，押領や違乱が繰り返されるようになる。やがて，応仁の乱を契機に周防大内氏，更には出雲尼子氏の備後国への侵攻がはじまり，世羅台地は抗争の坩堝と化す。16世紀半ばになると，大内氏・尼子氏といった巨大勢力が相次いで安芸国人毛利氏に滅ぼされ，中国一円を手中におさめた毛利氏の支配下に組み込まれてゆく。

中世の遺跡としては，山城跡･居館跡･墓などがある。山城跡としては，今高野山城跡（甲山），沼城跡（西上原）などがあるが，規模の大きなものはなく，城主や築城時期・経緯などは殆ど分かっていない。今高野山城跡は主郭の南北に各２段の小郭を配し，南側には堀切を設けている。沼城跡は変形五角形の居館跡で，北西側が一段高くなっている。発掘調査が実施された大通土居屋敷跡[26]（伊尾）では，室町時代の掘立柱建物跡・溝・土坑などを検出した。宮ヶ森古墓群[27]（重永）は，谷を見下ろす小高い場所に立地する中世末～近世初頭の積石基壇をもつ５基の古墓からなる。第２号古墓は積石基壇の下の二段掘りの墓坑から，土師質土器・杯と紐で繋がれた状態の古銭６枚が出土した。第４号古墓は積石基壇下に３基の墓坑があり，ひとつの墓坑から土師質土器・杯，皿，鉄釘，北宋銭が出土した。

平安時代末から中世にかけて世羅郡は広く高野山領大田荘であったために，郡内には多くの石造物（宝篋印塔・五輪塔・石仏など）が残されている。これらの多くはその由来を明らかにしえないが，年号などの刻銘をもつものをはじめ，有力な歴史資料となるものもある。大柳遺跡の周辺では，久代谷薬師堂（東上原），明覚寺跡墓地（赤屋），堂風呂（赤屋），万福寺跡（堀越），金福寺跡（黒渕）などの宝篋印塔・五輪塔群は数も多く，いずれも地頭などの有力な勢力との関連が考えられる石造物群である。久代谷薬師堂の五輪塔群は久代谷奥にあり，地輪の表面に暦応２（1339）年の年号や人名とみられる刻銘があるものが存在する。この五輪塔群は，近接して存在する久代城跡や城跡に立つ高さ 1.27ｍの結晶質石灰岩（こごめ石）製の宝篋印塔などを含めて，大田荘雑掌（現地代官）を代々務めた久代宮氏との関わりが強いと考えられる。

註

（１）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「高山１号遺跡」『高山１・２号遺跡』 1992年
（２）小都隆「世羅郡甲山町頓迫遺跡について」『芸備』第５集　芸備友の会　1977年
（３）財団法人広島県教育事業団『金井原遺跡発掘調査報告書』 2009年
（４）世羅町教育委員会『乙川北遺跡』 2008年

（５）註（３）に同じ。
（６）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『田龍遺跡』 1997年
（７）河瀬正利「藤鞘遺跡」『日本考古学年報』21・22・23 日本考古学協会 1981年
（８）財団法人広島県教育事業団『近森遺跡』 2008年
（９）世羅町教育委員会『矢ノ迫遺跡』 1997年
（10）世羅町教育委員会『土居丸遺跡Ⅰ』 1993年
世羅町教育委員会『土居丸遺跡Ⅲ』 1999年
（11）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『龍王山２号遺跡』 1997年
（12）世羅町教育委員会「青山大迫遺跡」『土居丸遺跡Ⅱ 青山大迫遺跡』 1996年
（13）世羅町教育委員会『康徳寺古墳』 1997年
（14）是光吉基「扉を有す一古墳について」『広島県文化財ニュース』第60号 広島県文化財協会 1974年
脇坂光彦「神田２号古墳の測量調査」『芸備』第18集 芸備友の会 1987年
小都隆「神田第２号古墳」『広島県文化財ニュース』第116号 広島県文化財協会 1988年
（15）世羅町教育委員会『近成山第１号古墳調査概報』 1991年
（16）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『亀ノ尾第１号古墳発掘調査報告書』 2000年
（17）世羅町教育委員会『湯船第６号古墳』 1995年
（18）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『風呂之元古墳発掘調査報告書』 1999年
（19）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（３）池ノ奥古墳』 2007年
（20）広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺 - 第２次発掘調査概報 -』 1993年
（21）潮見浩「カナクロ谷製鉄遺跡」『広島県文化財ニュース』第116号 広島県文化財協会 1988年
藤野次史・土佐雅彦「カナクロ谷製鉄遺跡」広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』渓水社 1993年
（22）是光吉基「広島県世羅出土の祭祀遺物」『月刊考古学ジャーナル』№５ ニューサイエンス社 1967年
（23）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（38）杉谷遺跡』 2014年
（24）広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺 - 第１次発掘調査概報 -』 1992年
広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺 - 第２次発掘調査概報 -』 1993年
広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺 - 第３次発掘調査概報 -』 1994年
広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺 - 発掘調査報告 -』 1995年
（25）広島県世羅郡世羅町教育委員会「三郎丸瓦窯跡」『備後康徳寺廃寺 - 発掘調査報告 -』 1995年
（26）甲山町教育委員会『大通土居屋敷跡』 1997年
（27）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『宮ヶ森第１～５号古墓』 1998年

参考文献

・是光吉基「世羅郡内の遺跡」『広島県文化財ニュース』第77号 広島県文化財協会 1977年
・広島県『広島県史』中世 通史Ⅱ 1984年
・甲山町史編纂委員会編『甲山町史』資料編Ⅰ 甲山町 2003年
・国立歴史民俗博物館『共同研究「中世荘園の現地調査－太田荘の石造遺物』 1986年
・蔵橋純海夫『広島県の古石塔』 2007年

Ⅲ　調査の概要

大柳遺跡は広島県中央部に位置する世羅郡世羅町の東半に存在する中世の仏教関連遺跡である（調査面積504㎡）。遺跡は丘陵南端の斜面に立地し，周囲の平野部からの比高10数mを測る（標高342～350m）。前面に西から東に流れる芦田川を望み，西側には赤屋川沿いに狭小な谷が，東側には幅750m，奥行き1kmの平野が広がる。この地は中世には高野山領大田荘東半の桑原方に含まれ，遺跡の北東側には，大田荘の現地代官を輩出した久代（宮）氏の拠点である久代谷がある。遺跡は丘陵端部のやや急峻な斜面（傾斜角度20°）を削平して三段の平坦面を設け，中・下段の基壇状遺構6基に石仏や五輪塔を配置していたと考えられる。

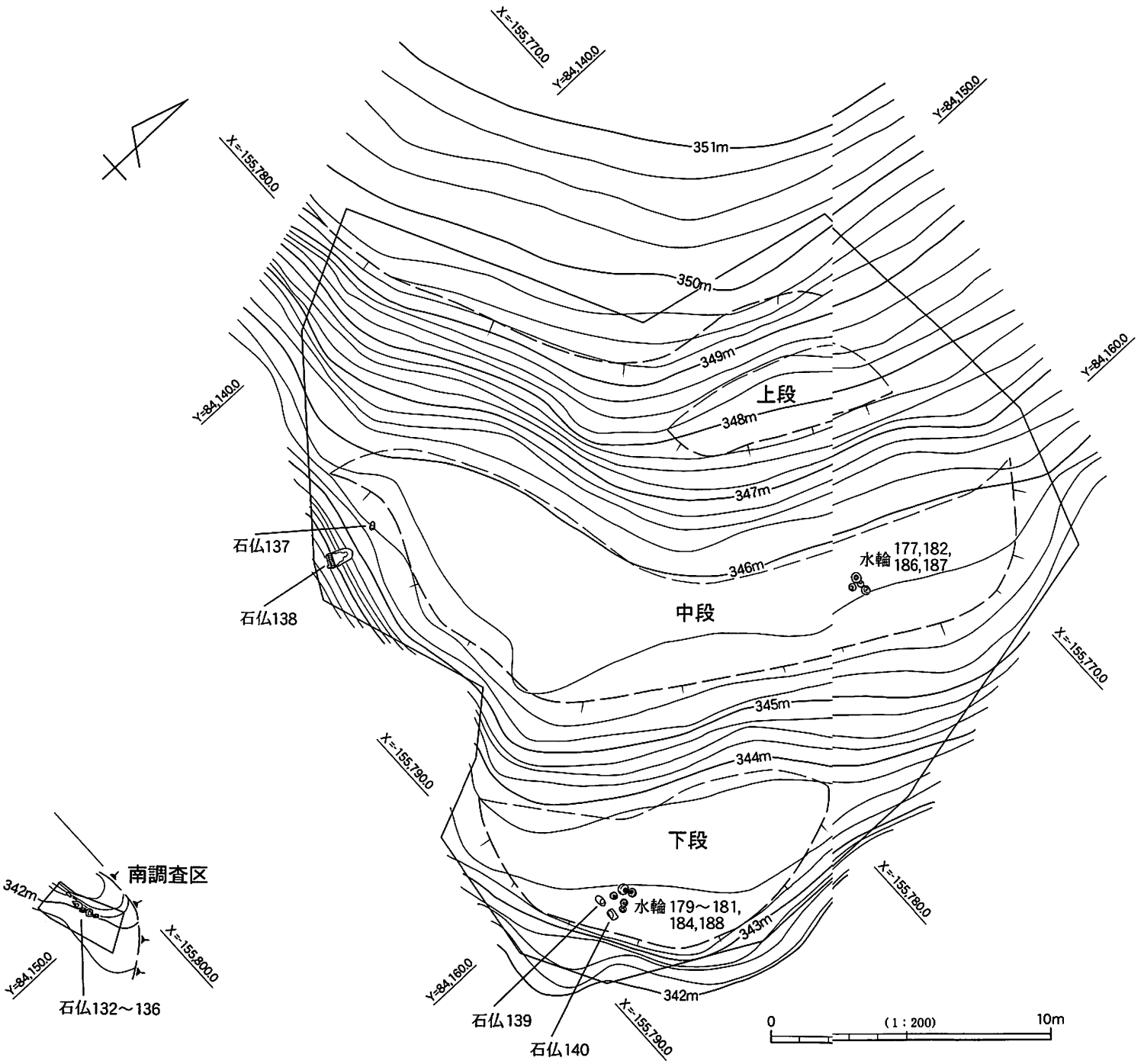
発掘調査は中・下段の平坦面を中心に行った。地形に直交するトレンチを入れて土層観察を行ったのち，全面的に表土除去及び遺構の掘り下げを行った。

遺構は，基壇状遺構6基（a～f），五輪塔部材群4か所（A～D群）を検出した。遺物は，土師質土器（皿・高台付皿・擂鉢・鍋），瓦質土器（鍋），陶器（水滴），瓦（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・雁振瓦・鬼瓦），石仏，五輪塔部材（空風輪・火輪・水輪・地輪），古銭（唐銭・北宋銭・南宋銭・明銭・銭種不明銭），鉄製品（短刀・刀子・鉄釘）が出土した。

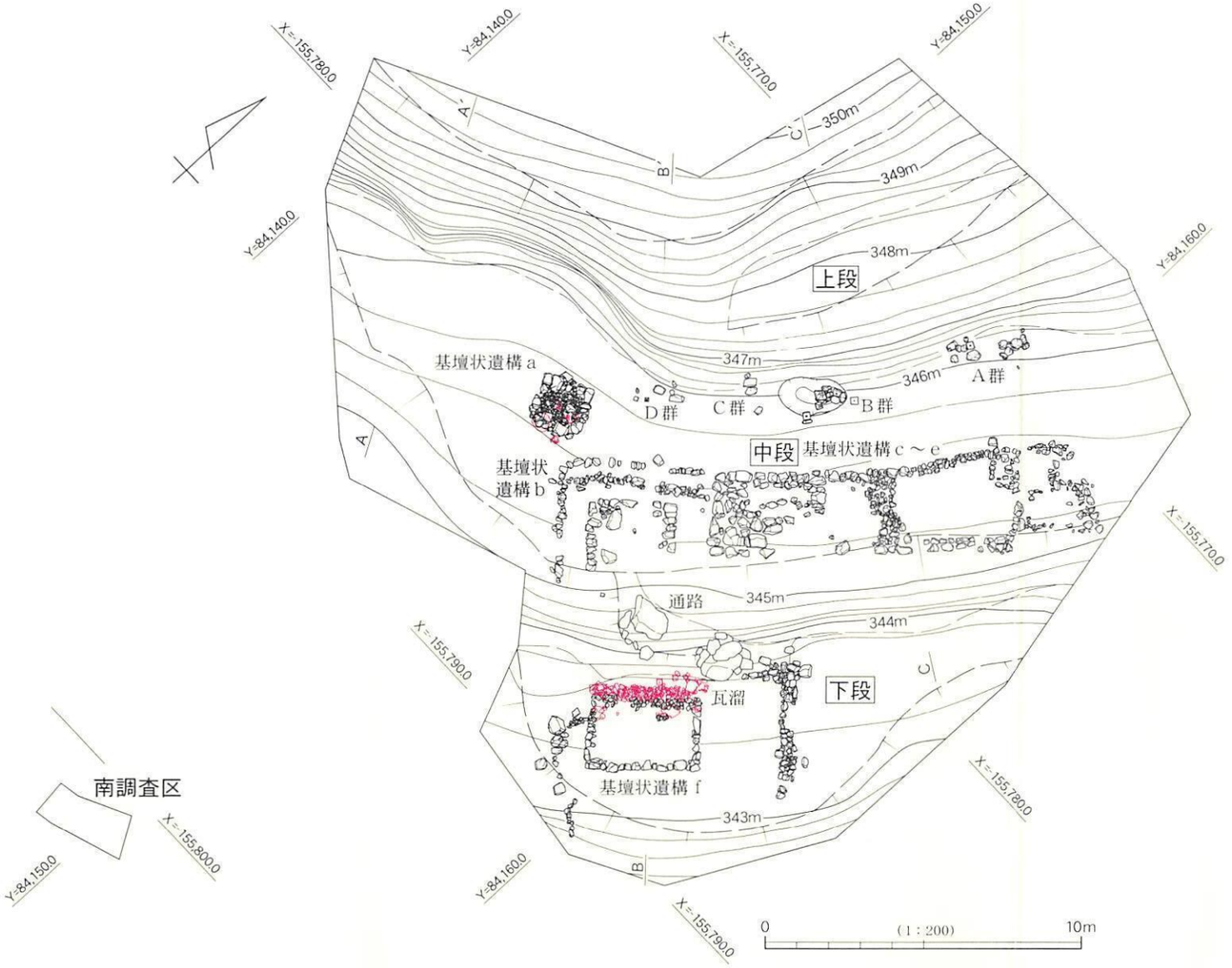
第2表　遺構の方位と規模（括弧付は現存規模）

No.	遺構名		方位			規模（単位m）	面積（単位㎡）
			部位	方位	方向		
1	基壇状遺構a		北西辺	N 69° E	東北東－西南西	1.78 × 1.81	3.22
2	基壇状遺構b	中央石組	北西辺	N 48° E	北東－南西	(1.55～2.2) × 2.8	(5.25)
		外方石列（a石列）	北西辺	N 48° E	北東－南西	(3.34) × (4.58)	－
		外方石列（b石列）	北西辺	N 47° E	北東－南西	(3.92) × (4.58)	－
3	基壇状遺構c		北西辺	N 36° E	北東－南西	2.52～2.72 × (5.66～5.74)	(14.9)
4	基壇状遺構d		北西辺	N 25° E	北北東－南南西	2.7～3.3 × 3.9～4.3	－
5	基壇状遺構e		北西辺	N 25° E	北北東－南南西	2.6～2.7	－
6	基壇状遺構f	中央長方形石組	北西辺	N 46° E	北東－南西	2.36 × 3.52～3.62	8.43
		南石列	北西辺	N 33° E	北北東－南南西	(1.66) × (3.9)	－
			南西辺	N 57° W	西北西－東南東		－
		北石列	北西辺	N 36° E	北東－南西	(2.2) × (4.42)	－
			北東辺	N 42° W	北西－南東		－
7	瓦溜		長軸	N 49° E	北東－南西	－	－

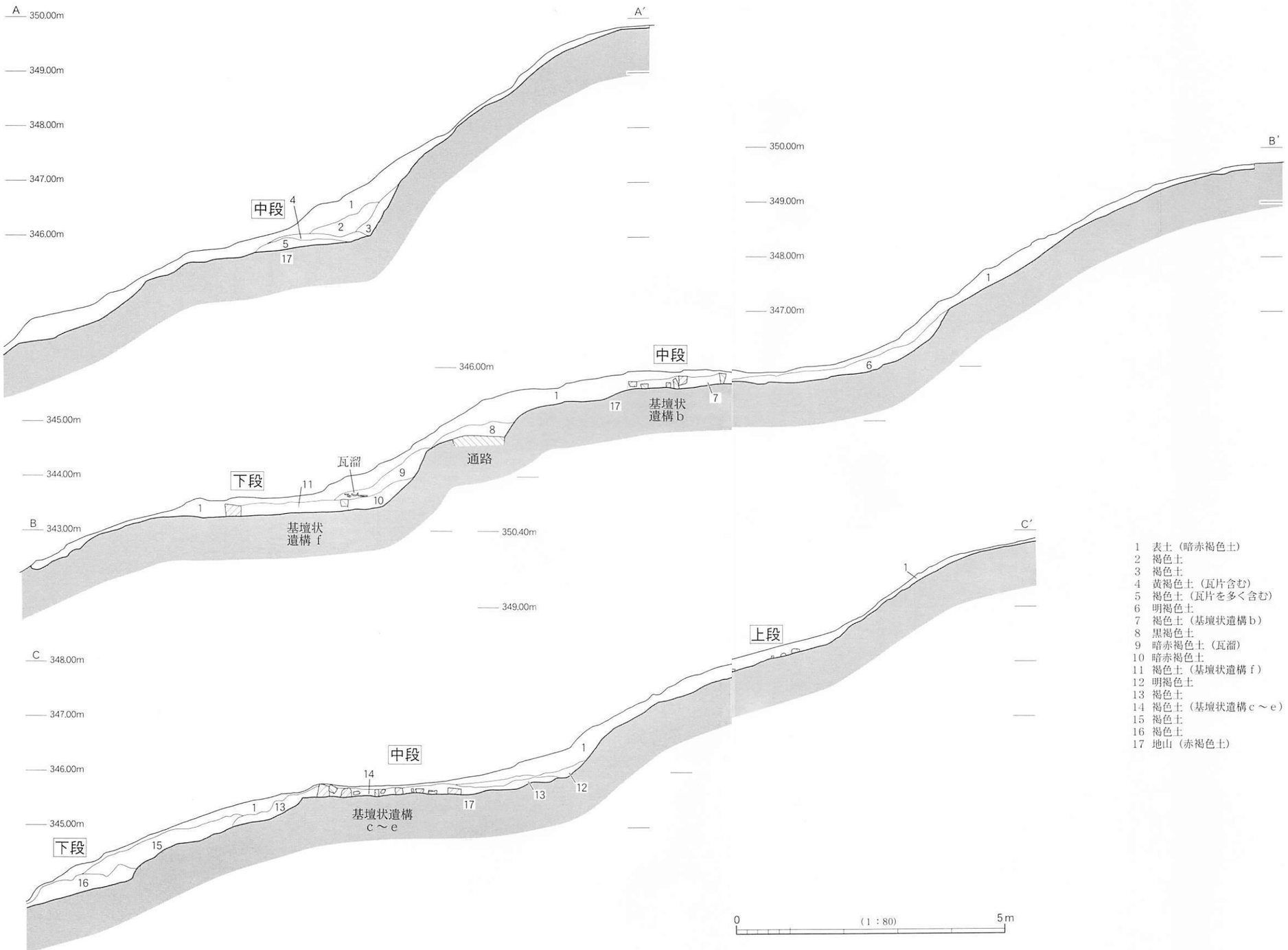
第３図　周辺地形図（1：2,000）　アミ目は調査区を示す。



第４図　調査前地形測量図（1：200）



第５図　遺構配置図（1：200）



1　表土（暗赤褐色土）
2　褐色土
3　褐色土
4　黄褐色土（瓦片含む）
5　褐色土（瓦片を多く含む）
6　明褐色土
7　褐色土（基壇状遺構 b）
8　黒褐色土
9　暗赤褐色土（瓦溜）
10　暗赤褐色土
11　褐色土（基壇状遺構 f）
12　明褐色土
13　褐色土
14　褐色土（基壇状遺構 c ～ e）
15　褐色土
16　褐色土
17　地山（赤褐色土）

第 6 図　土層断面実測図（1：80）

Ⅳ　遺構と遺物

A．遺構（第４・５図，第２表，図版１ｂ）

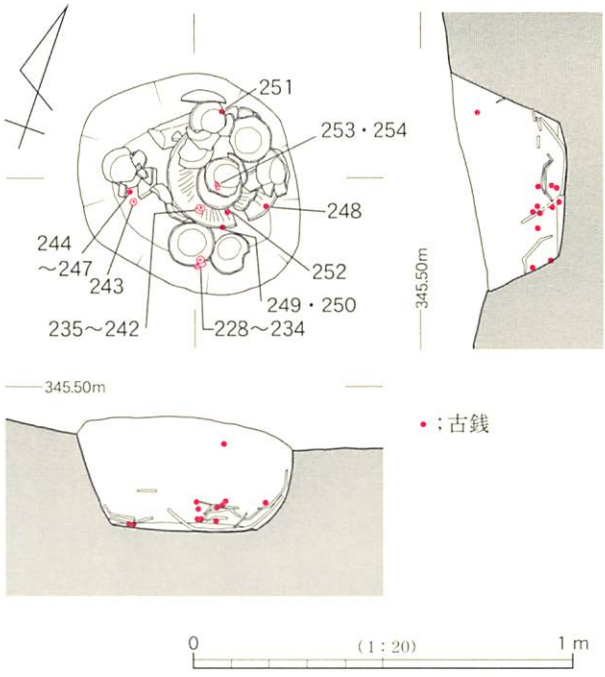
調査区は南北に延びる丘陵南端の南東斜面に立地する。斜面には三段の平坦面が造り出されているが，上段は長さ 10ｍ余り，最大幅1.9ｍの細長い平坦面で，明確な遺構や出土遺物はみられなかった。遺構が存在するのは中・下段２枚の平坦面である。中段は上段から２ｍほど下った長さ 26ｍ，最大幅７ｍのほぼ東西方向に延びる，調査区内で最も規模の大きな平坦面であり，検出遺構の大半はこの段に存在する。西半に基壇状遺構ａがあり，その東側には調査区北東端にかけて４基の方形ないしは長方形の基壇状遺構ｂ～ｅの石列が相接してつくられている。基壇状遺構ｂ～ｅはいずれも平坦面の下段側に寄せてつくられており，北西側の空間には上方からの斜面寄りに４群の東西方向に並ぶ五輪塔部材群（Ａ～Ｄ群）が存在する。中段の南東側には２ｍの高低差で長さ 16ｍ，最大幅4.5ｍの小規模な下段の平坦面が存在しており，その中央では基壇状遺構ｆを検出した。この基壇状遺構ｆは中央の長方形石組の南西側と北東側に２つのＬ字形の石列（南石列・北石列）が付いている。また，中央石組の北西辺の直上では多量の瓦片の堆積（瓦溜）を検出した。この瓦溜の上面には複数の五輪塔部材が点在していた。下段と中段の間の斜面には２つの平坦面を連絡する自然石の露頭を利用した通路が存在している。この通路は，下段の基壇状遺構ｆの北隅から登って，中段中央の基壇状遺構ｂ南東側正面に取り付く。中・下段の基壇状遺構ａ～ｆなどからは，土師質土器（皿･擂鉢･鍋），多量の瓦片，石仏，五輪塔部材，北宋銭を主体とする古銭，鉄製品（短刀・刀子・鉄釘）など多くの遺物が出土した。

（１）基壇状遺構

20 ～ 50㎝大の角礫を一段程度方形・長方形に並べた石組である。中段には基壇状遺構ａ～ｅの５基，下段には基壇状遺構ｆ１基が存在する。中段中央から北東側にかけて存在する基壇状遺構ｂ～ｅの４基のうち，基壇状遺構ｂとｃ～ｅは少し離れているが，ｃ～ｅの３基はそれぞれが接している。ただ，基壇状遺構ｂとｃ，そしてｄ・ｅは基壇の北西側長辺の指す方位が少しずつ異なっており，基壇状遺構ｂとｃ，ｄ・ｅはそれぞれ独立した建物と思われる。また，基壇状遺構ｄとｅは北西辺石列の方位も同じであり，ひとつの建物である可能性が高い。

①基壇状遺構ａ（第８図，図版４・５）　中段西半に少し離れて存在する基壇状遺構で，大型の角礫を方形に組んだなかに小型の角礫を積んでおり，石積下で土坑１基を検出した。石積の北辺は東北東－西南西方向（Ｎ69°Ｅ）を指しており，ほぼ等高線や中段平坦面の長軸に沿っている。南北1.78ｍ，東西1.81ｍ，高さ 15 ～ 35㎝の大きさで，平面形はほぼ正方形である。外回りには 20 ～ 40㎝大の角礫を並べており，その内部に数～ 20㎝大の比較的扁平な小角礫を石組

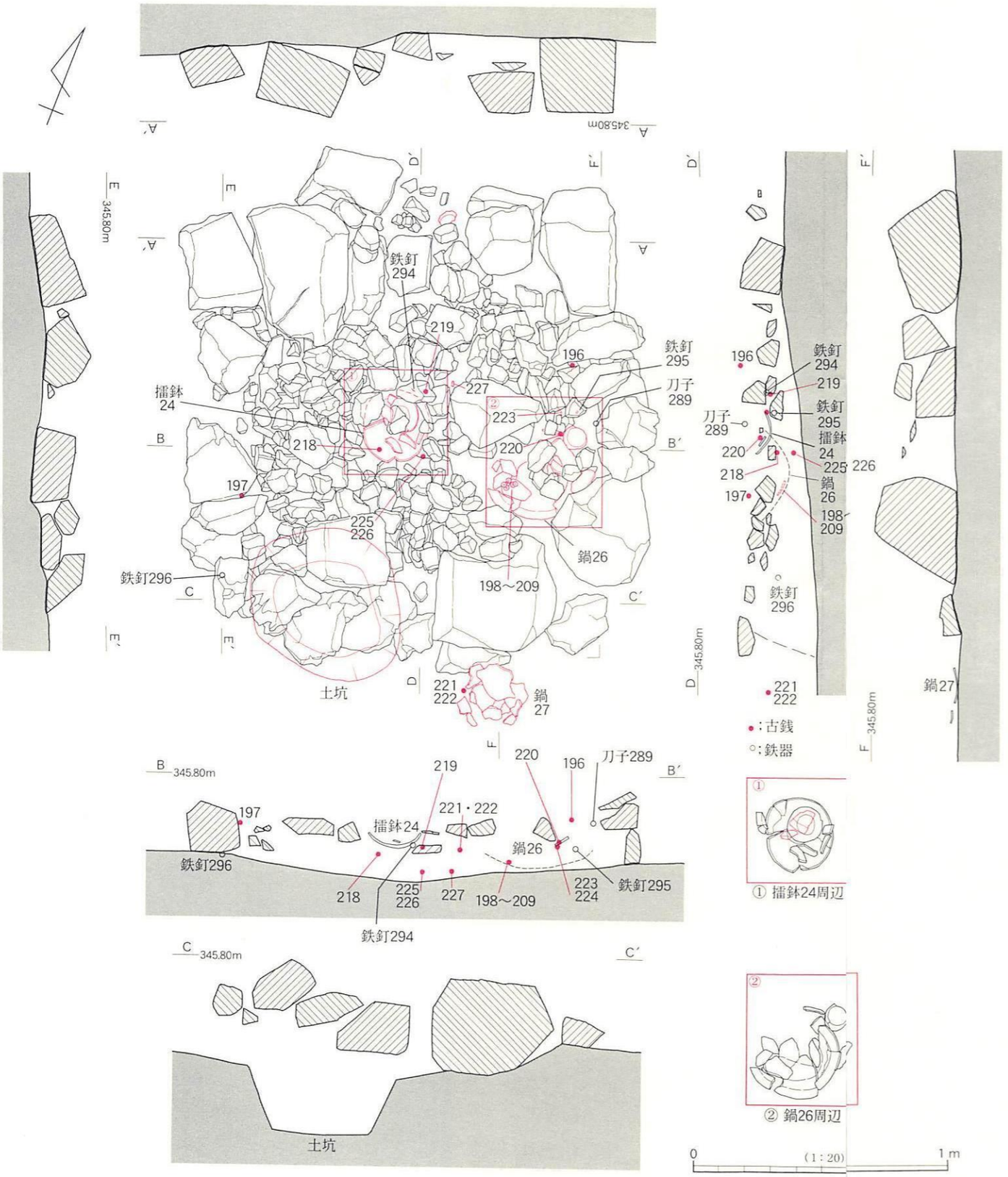
のほぼ上面に高さを揃えて積んでいる。石積内の中央やや西寄りで擂鉢24が，南東隅近くで瓦質の鍋26が，いずれも口縁を上に向けた状態で出土した。石積内からはこのほか，土師質土器・皿４・14・19・21，古銭196～227，刀子289，鉄釘294～296が出土した。皿は擂鉢・鍋の内部から，刀子は石組東辺の上面近くで，鉄釘は上層付近で出土した。古銭は鍋26の内部から一括出土した198～209の一群をはじめ，多くは鍋や擂鉢の周辺の上層から出土しているが，218～227は石積の下面から出土した。鍋26は石積上面で出土した擂鉢24より10㎝ほど下位の石積中～下層で出土した。鍋26内部や下面からまとまって出土した古銭群や皿と擂鉢24周辺から出土した古銭や皿との間には多少の時期差が存在する可能性がある。なお，基壇状遺構ａの南辺外で土師質の鍋27が出土した。また，基壇の周囲からは瓦片が多く出土しており，鉄釘の存在とともに瓦葺きの施設を伴っていた可能性が考えられる。



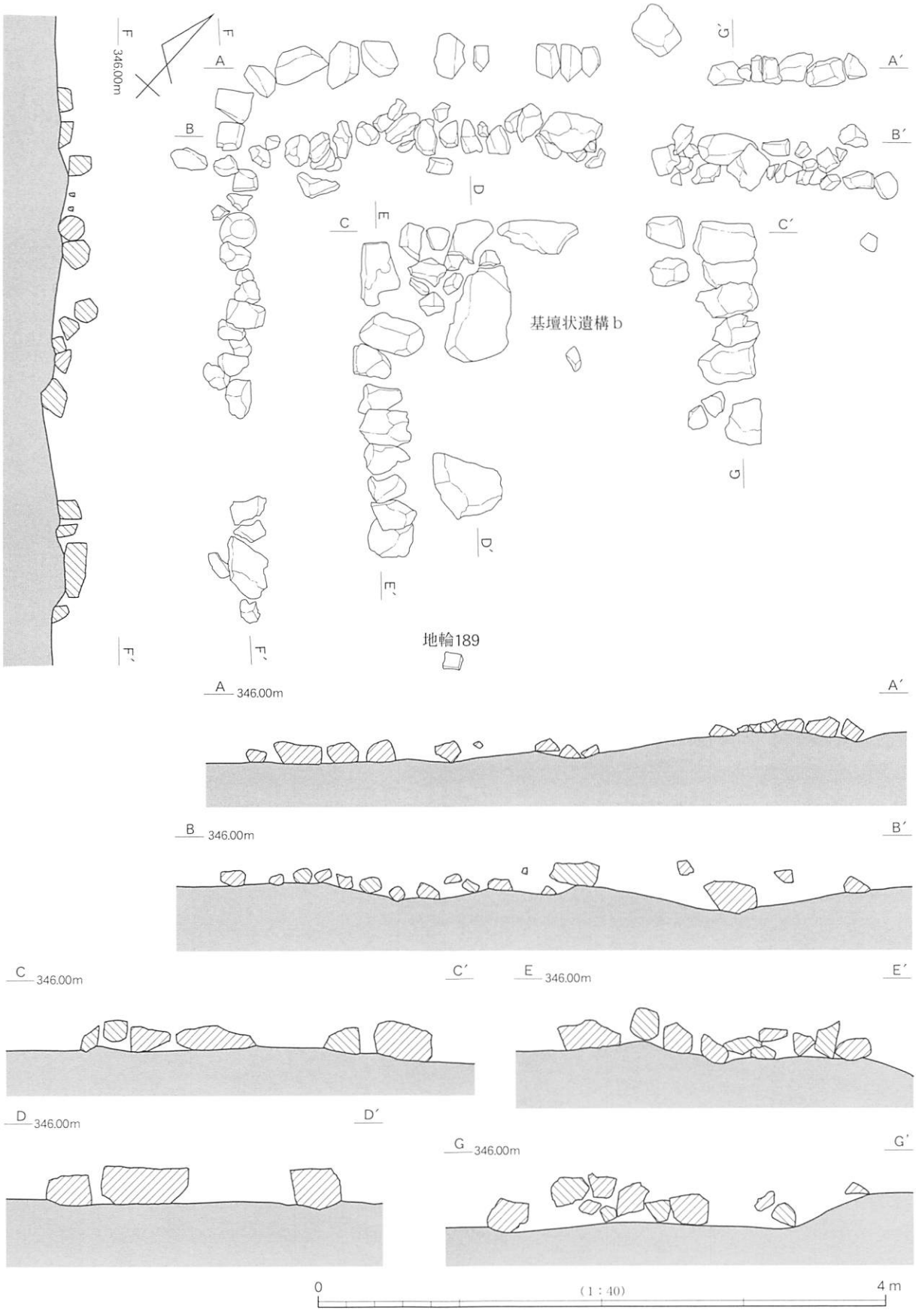
第７図　基壇状遺構ａ土坑実測図（1：20）

石積下で検出した**土坑**（第７図，図版５ｃ）は石積の南西側に偏在しており，土坑の南端は石積の南辺からはみ出ている。土坑は北西－南東方向に長軸をもつ不整楕円形の平面形で，0.66ｍ×0.56ｍ，深さ19～28㎝の大きさである。坑内の底面には擂鉢25が口縁を上に向けて置かれており，その内部や坑底面からは完形に近い土師質土器・皿17個体（１～３・５～13・15～18・20）が上向き，あるいは俯せに重なった状態で出土した。擂鉢内部や下面を中心に計32枚の古銭（228～259）が出土した。洪武通寶及び無文銭の可能性が高いＣ類の古銭が主体で，北宋銭の出土は１枚に留まっており，銭種構成に偏りが大きい。また，土坑上の石積内の北宋銭や明銭の永楽通寶が主体でＣ類が少ないという銭種構成と大きく異なる。土坑内部には人骨や灰，焼土，炭などの埋葬の痕跡を何らみいだすことはできず，墓坑の可能性はそれほど強くないと思われる。むしろ，擂鉢内の皿が重なった状態での出土状況やこれらの上下での古銭の集中的な出土のあり方からは，供養などに際しての何らかの祭祀（まじない）行為に伴うものである可能性が考えられる。

②**基壇状遺構**ｂ（第９図，図版６ａ）　基壇状遺構ａの東側１ｍに築かれた方形の基壇状遺構である。中央に北西辺2.8ｍ，南西辺（現存規模）2.2ｍ，北東辺（現存規模）1.55ｍの中央石組があり，この中央石組の北西側と南西側をＬ字形に画する石列（外方石列）が存在する。外方石列は北西辺が二重になっているが，用いられている角礫の大きさ（内側の石列の角礫は10～20



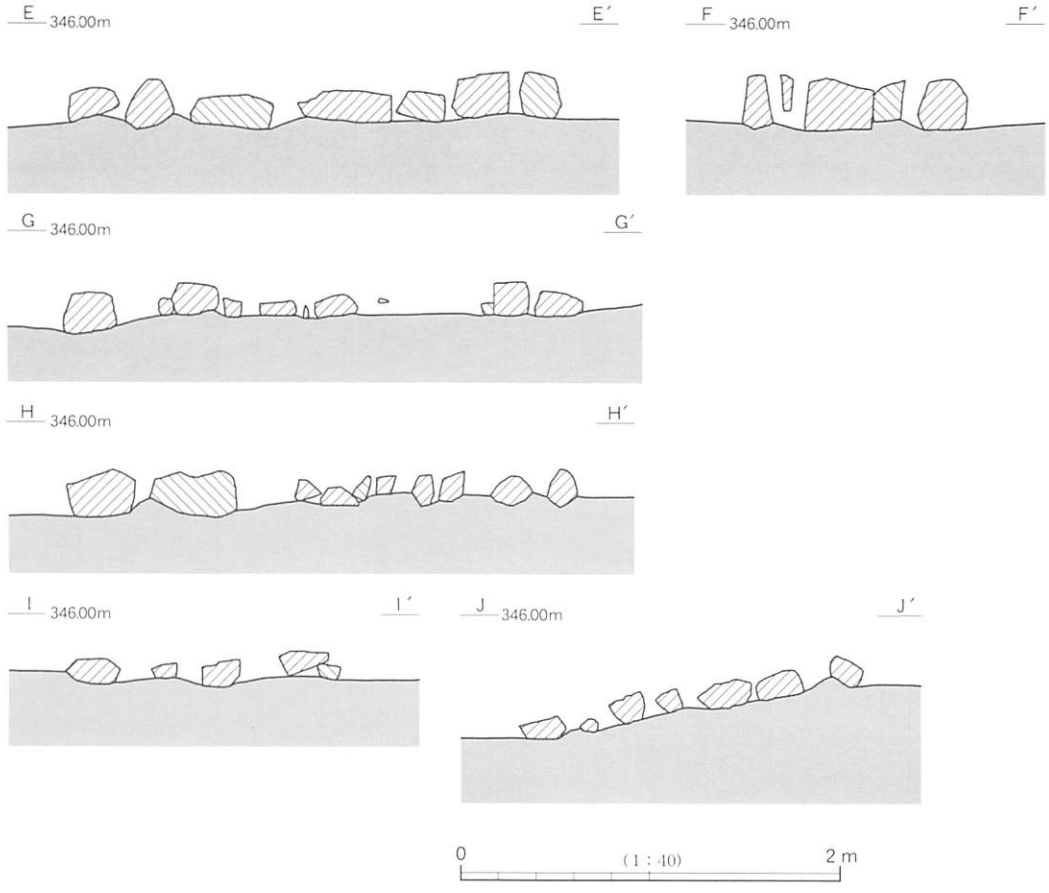
第８図　基壇状遺構ａ実測図（1：20）　断面図の古銭・鉄器は全投影。



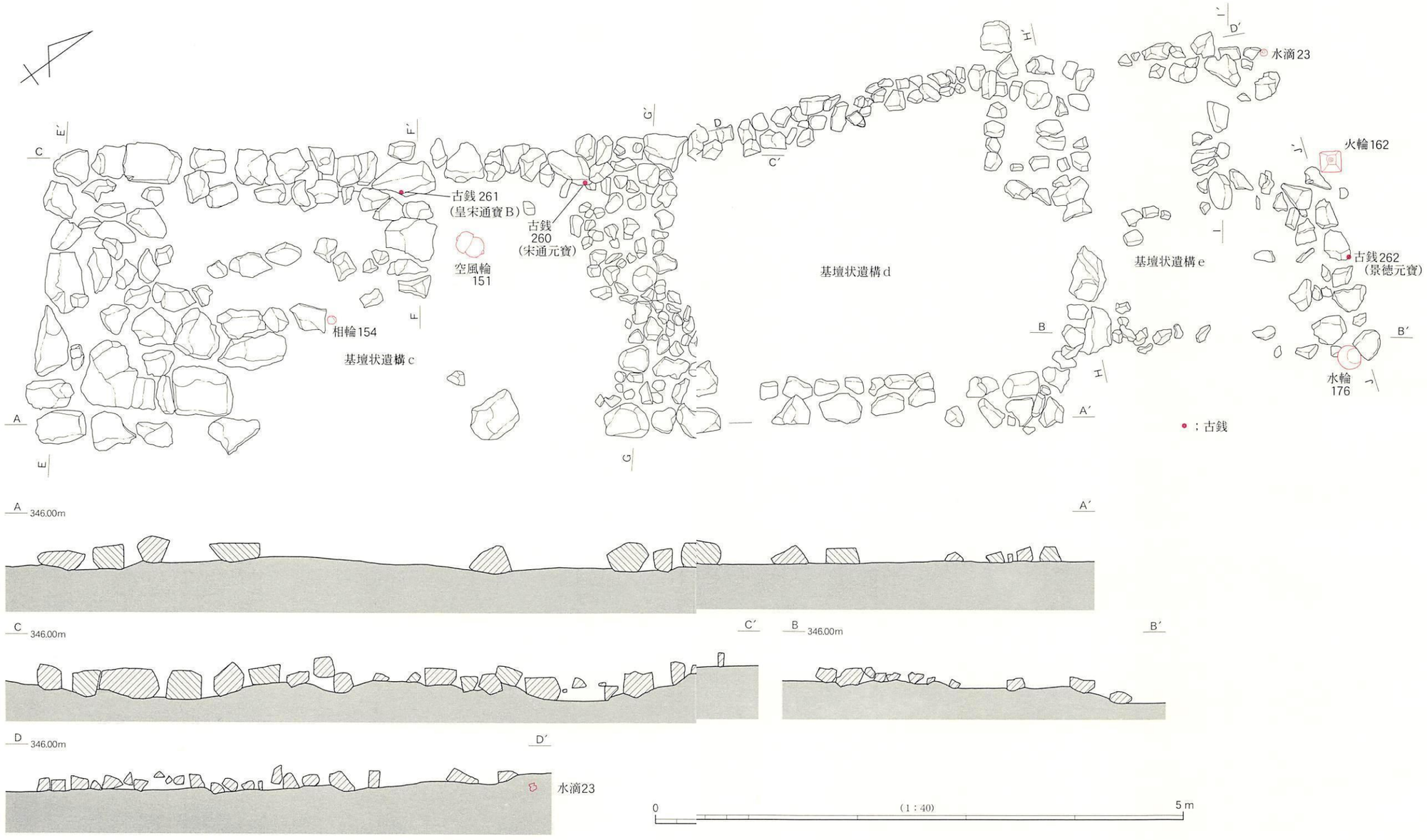
第９図　基壇状遺構ｂ実測図（１：40）

cm大，外側の石列の角礫は20～30cm大）からみて北西辺内側の石列と南西辺の石列は一体のものであり（ａ石列），北西辺外側の石列（ｂ石列）が外側からこのＬ字状のａ石列に取りついたものと考えられ，基壇の拡張に伴う可能性がある。外方石列の規模は，内側（南東側）のａ石列が南西辺（現存規模）3.34ｍ，北西辺（現存規模）4.58ｍ，外側（北西側）のｂ石列は南西辺（現存規模）3.92ｍ，北西辺（現存規模）4.58ｍである。なお，中央石組の南東辺，外方石列の南東辺及び北東辺の石列については不明である。外方石列の北東辺については隣接する基壇状遺構ｃの造成に伴って壊された可能性が，また，中央石組と外方石列の南東辺石列については下段側にずり落ちた可能性も考えられるが，明らかにしえない。中央石組は30～50cm程度の大きさの角礫を並べており，石組内部の南西半には50～70cm大とやや大型の角礫が70cmの間隔（心々で1.2ｍ）で置かれている。その形状や位置関係からは建物の柱の礎石である可能性も考えられる。この基壇状遺構ｂに伴う明確な出土遺物はなく，中央石組の南東側で地輪189が出土したのみである。なお，中央石組及び外方石列（ａ石列）の北西辺が示す方位はＮ48°Ｅ，同じく外方石列（ｂ石列）北西辺が示す方位はＮ47°Ｅと北東－南西方向のほぼ同じ方向を指している。

③基壇状遺構ｃ（第10・11図，図版６ｂ）　基壇状遺構ｂの北西側に接して造られた基壇状遺構で，北東側には接して基壇状遺構ｄ・ｅが存在する。基壇の南東辺は下段平坦面に下る斜面に



第10図　基壇状遺構ｃ～ｅ実測図（１）（１：40）



第11図　基壇状遺構c～e実測図（2）（1：40）

臨む。北西辺の石列は北東－南西方向（N 36° E）を指しており，基壇状遺構d・eのそれとはやや異なる。その北東辺の石列は基壇状遺構dの南西辺の石列と重なっていて，やや明確さを欠いている。また，基壇状遺構cとdの南東辺は石列の残りが悪く，いまひとつはっきりしないものの，ほぼ一列に並んでいる。これらのことから，基壇状遺構cと基壇状遺構d・eがひとつの基壇である可能性も残る。北西辺の石列の長さ（現存規模）は5.74m，南東辺石列（現存規模）が5.66m，南西辺が2.72m，北東辺が2.52mである（現存の基壇面積14.9㎡）。また，石列の角礫は30～50㎝程度の大きさのものが主体的だが，基壇状遺構dと接する北東辺の石列には10㎝大と小型の角礫を多く用いている。基壇の南西側にはやや乱雑ではあるが，30～60㎝大の大型の角礫が並べられており，区画を成していた可能性がある。この南西側の区画状部分の北西側には長さ3.2m，幅0.9mの長方形区画が存在する。

基壇状遺構cの石組の内部では，五輪塔部材2点（空風輪151・相輪片154），古銭（北宋銭）2枚（宋通元寶260・皇宋通寶261）が出土しているが，直接基壇cに伴うものであるかは明確ではない。

④基壇状遺構d・e（第10・11図，図版6c） 中段平坦面の最も北東側にある基壇状遺構で，基壇cの北東辺と基壇dの南西辺は接している。基壇d・eの北西辺の石列は同じ北北東－南南西方向（N 25° E）を指しており，ひとつの基壇である可能性が高い。

基壇d・eの二つの長辺（北西辺・南東辺）は他の基壇状遺構のようには平行ではなく，北西辺の石列が北東側に行くに従って膨らんでいる。よって，基壇dの両短辺は南西辺が2.7m，北東辺が3.3mと北東辺の方が0.6mほど長く，結果として，基壇dの石組の平面形は台形に近い不整長方形となる。長辺の石列の長さは北西辺4.3m，南東辺3.9mである。この基壇状遺構dの北隅には1.2m×0.8mの小区画の長方形石組が存在する。この基壇状遺構dの石列に用いられている角礫は北西辺と南西辺は10㎝大のものが主体で，南東辺と北東辺は20～30㎝大のやや大型の角礫が主体的に使われている。基壇cと接している南西辺は10～20㎝の小角礫を用いた幅0.5～1mの幅広の石敷き状であるが，少し仔細にみてみると，0.8m×1mほどの長方形の石敷きの小区画2つが互い違いに設けられているようにみえる。

基壇状遺構eは基壇dの北東側にその北西辺を揃えて設けられた，北西隅を直角に凹ませたL字形の石組であり，基壇dの付属的な施設の基壇である可能性が高い。規模は北西辺1.4m，南東辺2.7mで，北西－南東方向の長さは2.6mである。用いられている角礫の多くは大きさがやや不揃いで，角礫の並びもあまり整美なものではない。10～30㎝ほどの大きさの比較的小型の角礫を用いている点からも，例えば入口などの簡易的なあるいは付属的な施設の基壇ではないかと考えられる。

いずれにしろ，基壇状遺構d・eの石組に用いられている角礫は基壇b・cのそれに比べてより小型であり，角礫の形状や石列の並びがより整美ではないといえる。

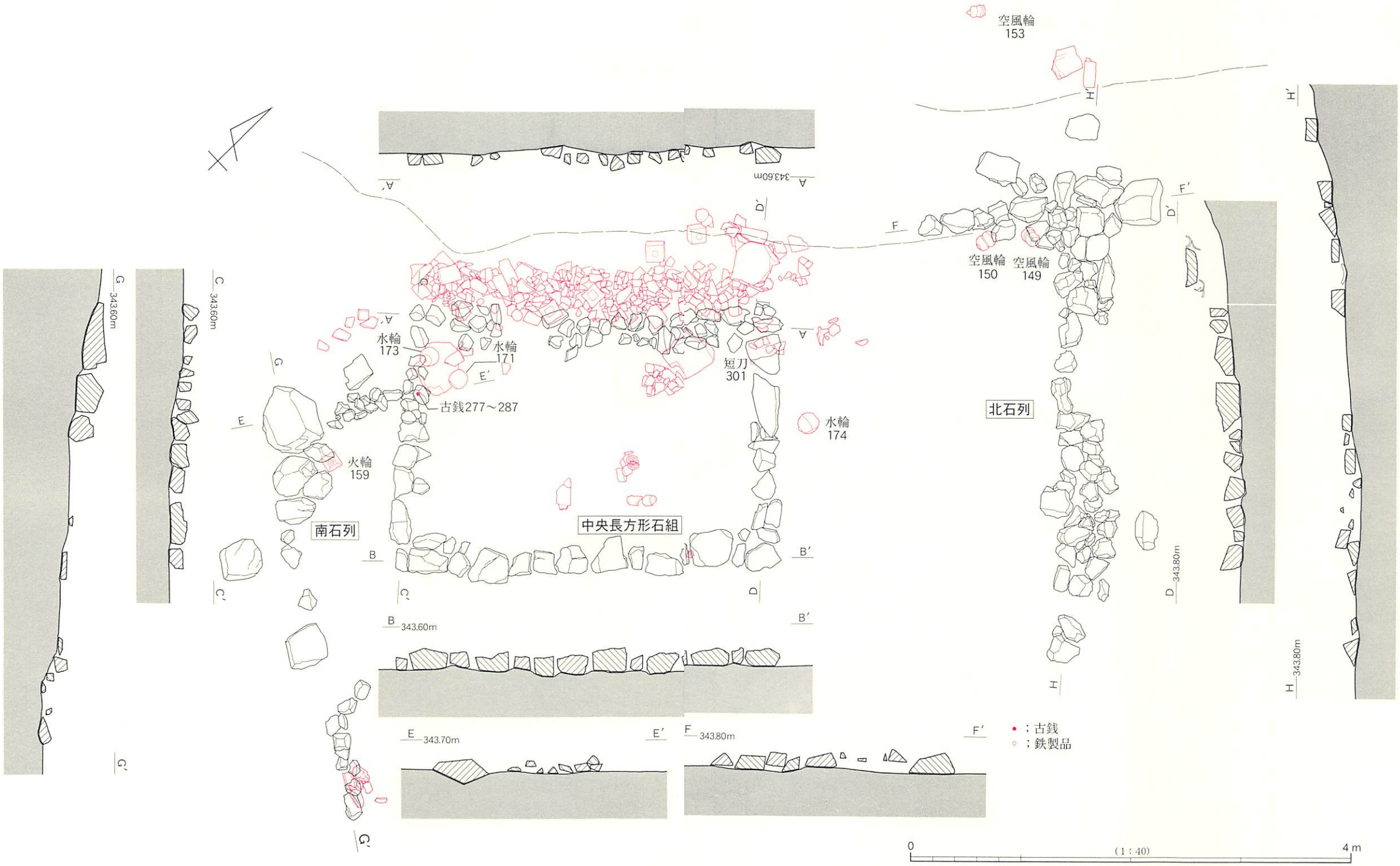
基壇状遺構dからは，北西辺石列中央付近の上方（地表面）で水輪177・182・186・187が

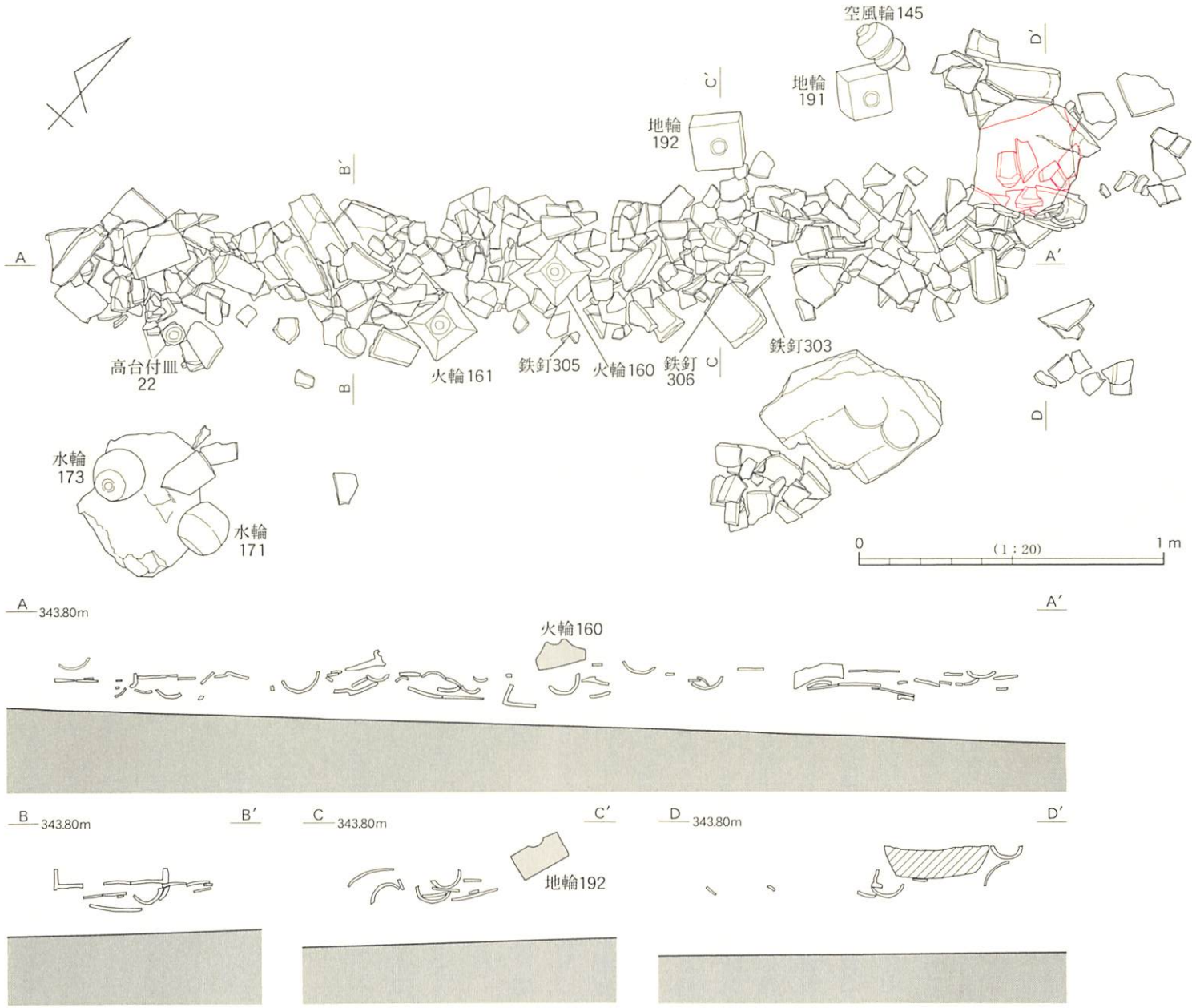
出土しているが，直接伴う可能性は少ない。また，基壇状遺構ｅの北隅では陶器の水滴23，北東辺東半の石列沿いで五輪塔部材２点（火輪162・水輪176）と古銭（北宋銭）１枚（景徳元寶262）が出土している。

⑤基壇状遺構ｆ（第12図，図版10）　下段の平坦面中央に築かれた基壇状遺構で，中央の長方形石組と南西側に取りつくＬ字形の南石列，北東側に取り付く同じくＬ字形の北石列からなる。三者が一体のものであるかどうかについては，中央石組と北石列，南石列と北石列との間に重複がなく，明らかにはしえない。ただ，南石列と中央石組はごく部分的に上下に重なる部分が存在する。南石列の角礫の上にその南西辺石列の角礫が載っている中央石組の方が後出し，南石列の基壇を壊して中央石組の基壇が築かれた可能性もある。しかし，ここでは，中央石組と南石列・北石列の三者が一体のものであるという前提のもとに記述を進めることにする。

中央の長方形石組は北西辺の石列が北東－南西方向（Ｎ46°Ｅ）を指している。石組の規模は，長辺の北西辺が3.52ｍ，南東辺が3.62ｍ，短辺の南西辺･北東辺とも2.36ｍで，石組の広さ（基壇面積）は8.43㎡である。北西辺と南西辺の北西側1/3は10～20㎝大の小角礫を主に用いるが，その他は30～40㎝大のやや大型の角礫を並べている。南西辺の角礫の大きさが変わる付近に南石列が取り付く。Ｌ字を180°回転して反転させた形で，短い北西辺と長い南西辺から成る。北西辺は北北東－南南西方向（Ｎ33°Ｅ）を指し，現存の長さは1.66ｍ，これにほぼ直角に取りつく南西辺の石列の現存規模は長さ3.9ｍである。中央石組南西辺と南石列北西辺の取り付く角度は76°とやや鋭角である。南石列北西辺には10㎝大の小角礫を並べているが，南西辺には10㎝大の小角礫以外に特に北西側に40～60㎝大の大型の角礫を置いている。北石列は中央石組の北東側1.4ｍの位置にＬ字を180°回転させた状態で存在する。中央石組とは直接重なっていないが，その北西辺は南石列北西辺の方位に近い北東－南西方向（Ｎ36°Ｅ）を指している。両者は直接つながらないが何らかの関連性はあると考えられる。北石列北西辺の現存の長さは2.2ｍで，この北西辺と79°と鋭角に取り付く北東辺は長さ（現存規模）4.42ｍである。北石列に用いられた石材は10～40㎝の大きさの角礫である。中央石組と南石列，北石列が一体のものである場合の基壇状遺構ｆの現存規模は南西－北東方向（長軸）８ｍ，北西－南東方向（短軸）4.4ｍほどである。

基壇状遺構ｆの周辺からは南石列の南西辺中央で結晶質石灰岩製の火輪159が，北石列では北隅付近で黒雲母花崗岩製の空風輪149・150，北西側にやや離れた中段から斜面下方で結晶質石灰岩製の空風輪153が出土している。中央石組南西辺の南石列北西辺が取り付くあたりで古銭11枚がまとまって出土した。11枚の内訳は，唐銭１枚（開元通寶282），北宋銭８種９枚（祥符元寶286，嘉祐通寶283，熙寧元寶279，元祐通寶Ａ（以下，銭銘の真書体をＡ，篆書体をＢとする）284，同Ｂ278･281，聖宋元寶285，政和通寶Ａ277，同Ｂ280），南宋銭１種１枚（淳熙元寶287）である。そのすぐ北西側では結晶質石灰岩製の水輪171・173が，また北東辺では北隅近くで短刀301，中央付近で半裁された黒雲母花崗岩製の水輪174がそれぞれ出土してい


空風輪
153
空風輪
150
空風輪
149
水輪
173
水輪
171
古銭277～287
火輪
159
短刀
301
水輪
174
南石列
中央長方形石組
北石列
A
A′
343.60m
B
B′
343.60m
C
C′
343.60m
D
D′
343.80m
E
E′
343.70m
F
F′
343.80m
G
G′
343.60m
H
H′
343.80m
●；古銭
○；鉄製品
0
(1：40)
4 m



第 13 図　瓦溜実測図（1：20）

る。なお，地表面の中央石列東隅付近で水輪５点（179～181・184・188）と石仏139・140が出土している。

下段平坦面と北西側背後の中段平坦面との高低差は２m程度であるが，両平坦面の間の斜面は急峻で直登は難しい。その中央付近に両者を連絡する通路が存在する。地山の石を露出させて東側から西側へ登る石畳状のスロープになっている。この通路は基壇状遺構ｆ背後の北石列北隅付近から始まり，中段中央の基壇状遺構ｂの南東辺中央に取り付いている（第５図）。

（３）瓦溜（第13図，図版８・９ａ・ｂ）

下段の基壇状遺構ｆの中央石組北西辺直上で検出した瓦片の堆積で，長さ3.8m，幅0.5mほどの広がりである。瓦溜の長軸は中央石組北西辺にほぼ沿い，両端も石組北西辺の両側端にほぼ合致する。瓦群の下面はほぼ中央石組上面の高さ（中央石組下面から20cmほどの高さ）に揃う。基壇状遺構ｆの石列の上面をほぼ基壇造成時の地表面であるとすると，瓦の堆積状況からこの瓦溜の瓦は基壇状遺構ｆに伴う施設に葺かれていた瓦が何らかの原因で一どきに落下，堆積したものである可能性が高い。この瓦溜の直上や周辺からはほぼ間層を置かずに複数の五輪塔部材が直線状に出土している。これらは瓦の落下・堆積とそれほど時間をおかずに恐らく北西側背後の中段方向から落下，堆積したものである蓋然性が高い。瓦溜直上の空風輪145，火輪160・161，地輪191・192，そしてこれらの南北延長線上で出土している水輪171・173，火輪159などで，いずれも乳白色の結晶質石灰岩製である。これら五輪塔部材群の出土ライン（Ｎ17°Ｅ）は，瓦溜の長軸（Ｎ49°Ｅ）や基壇状遺構ｆ中央石組北西辺の方位（Ｎ46°Ｅ）に斜交する。

この瓦溜では多量の瓦片や五輪塔部材以外に，土師質土器・高台付皿22や鉄釘303・305・306が出土している。高台付皿は瓦溜の南西端付近，鉄釘３点は中央付近から出土した。いずれもほぼ瓦片の出土位置と同じ高さで出土している。鉄釘は基壇状遺構ｆの内部や周辺からも出土しており，基壇状遺構ｆに伴う施設に鉄釘が使用されていたことを示唆している。

（４）石仏・五輪塔部材群

①石仏（第15図，図版２・３）　計10体の石仏が出土した。このうち９体は地表面に置かれていたか，地表に露出していた石仏である。唯一，発掘調査により地中から出土した石仏131は結晶質石灰岩製のもので，Ｃ群の五輪塔部材群に近い中段中央北西側の斜面際（木根内）から出土した。132～136の５体は谷を挟んで南側に13m離れた山道沿いに立てられていた小石仏である（南調査区）。137～140の４体は中段南端及び下段南東端の各段平坦面の縁辺付近の地表面に置かれていた石仏で，原位置を留めていないと考えられる。

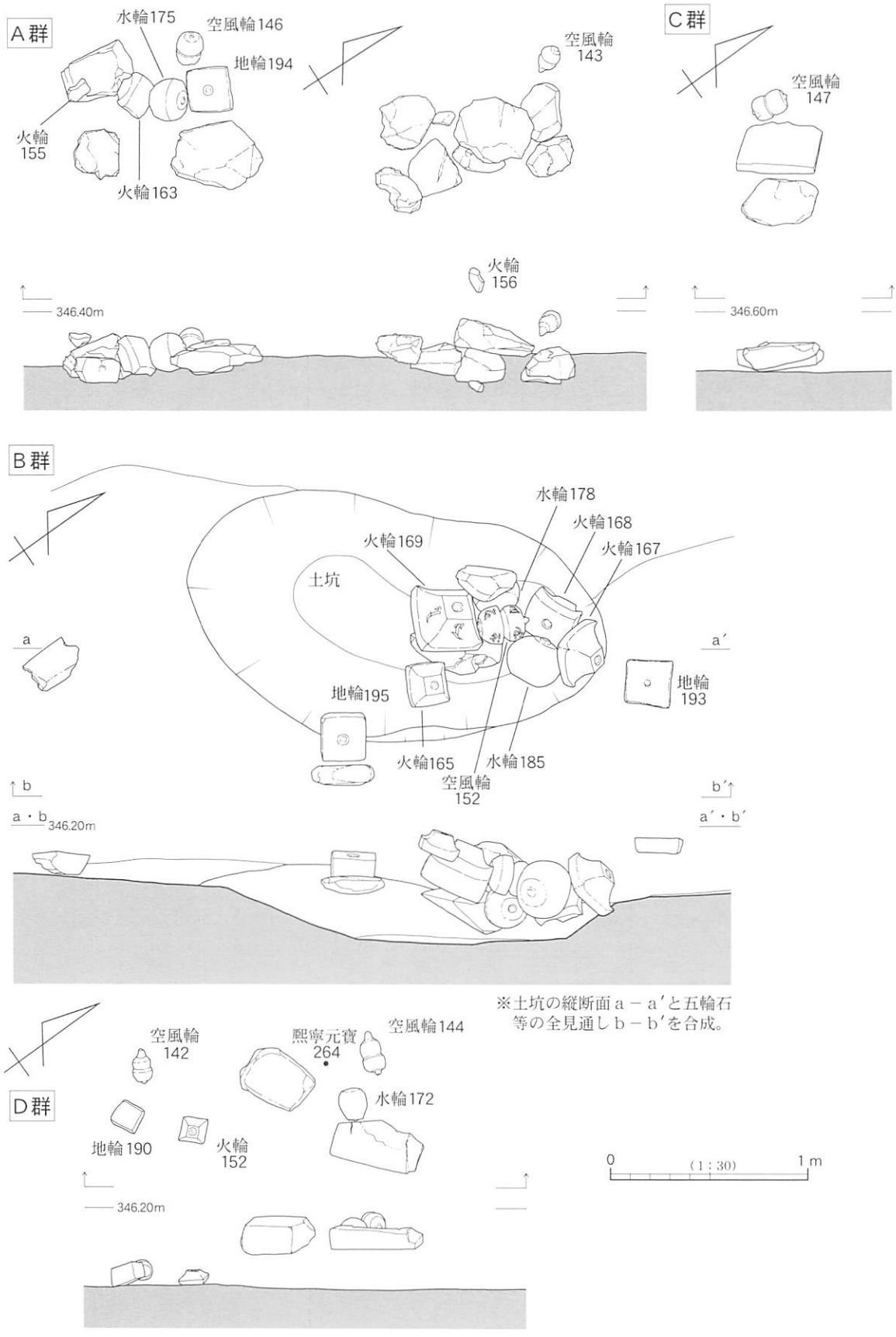
②五輪塔部材群（第14・15図，図版７）　中段平坦面の中央から北東側にかけて計４群の五輪塔部材群を検出した。上段側の斜面に沿って北東－南西方向の長さ約13mの範囲に１～3.4mの間隔で部材の集積がみられた（北東側からＡ～Ｄ群）。最も北東側のＡ群は２群に分かれ，北

東側には１m×0.6mの範囲に20～40cm大の角礫がまとまっており，その北側で空風輪141が，南東側50cmで火輪片156が出土した。60cmほど南側では20～40cm大の角礫３個と空風輪146，火輪155（破片）・163，水輪175，地輪194の計５個の五輪塔部材が出土している。Ａ群の部材別の構成は，空風輪２・火輪３・水輪１・地輪１の７個で，火輪の２個は半裁されていた。空風輪143と火輪片155・156の３個は結晶質石灰岩製である。Ａ群の南西3.4mには土坑を伴うＢ群の五輪塔部材群がある。計10個と最も部材の数が多く，長軸2.19m，短軸1.2m，深さ0.36mの不整長楕円形の浅い土坑内北東側の1.2m×1.8mの範囲に７個の部材が半ば落ち込んだ状態でまとまって出土した。その内訳は，空風輪１（152），火輪４（165・167～169），水輪２（178・185）である。このほかの３点は坑外から出土している。空風輪148は南東側１m，地輪195はほぞ穴のある面を上に向けて土坑の南側で出土し，長さ33cm，幅・高さ10cmの断面方形の棒状の石を南東側に伴う。地輪193は土坑の北側で地面から20cmほど浮いて出土した。このＢ群では結晶質石灰岩製の部材は地輪193のみである。Ｂ群の１mほど南西側でＣ群の部材群が出土している。Ｃ群は大きく２群に分かれ，北西側斜面際の一群（空風輪141・147）と南東側の基壇状遺構ｂとｃの境界の北西側１m付近の一群（火輪158・水輪170）で，両者は２mほど離れている。Ｃ群の構成は空風輪２，火輪１，水輪１の４個からなっており，結晶質石灰岩製の石仏131もこのＣ群に近接して出土した。このＣ群の五輪塔部材４点のうち，147以外は結晶質石灰岩製である。Ｃ群の南西側２mでＤ群の部材群を検出した。最も南西側に位置する五輪塔部材群で，南西1.4mの近距離には基壇状遺構ａが存在する。Ｄ群は40cm大の扁平な角礫２枚を挟んで北側に空風輪144と水輪172，そして北宋銭（熙寧元寶）264，南側には空風輪142，火輪152，地輪190がある。計５点の部材の内訳は空風輪２，火輪１，水輪１，地輪１で，いずれも結晶質石灰岩製である。

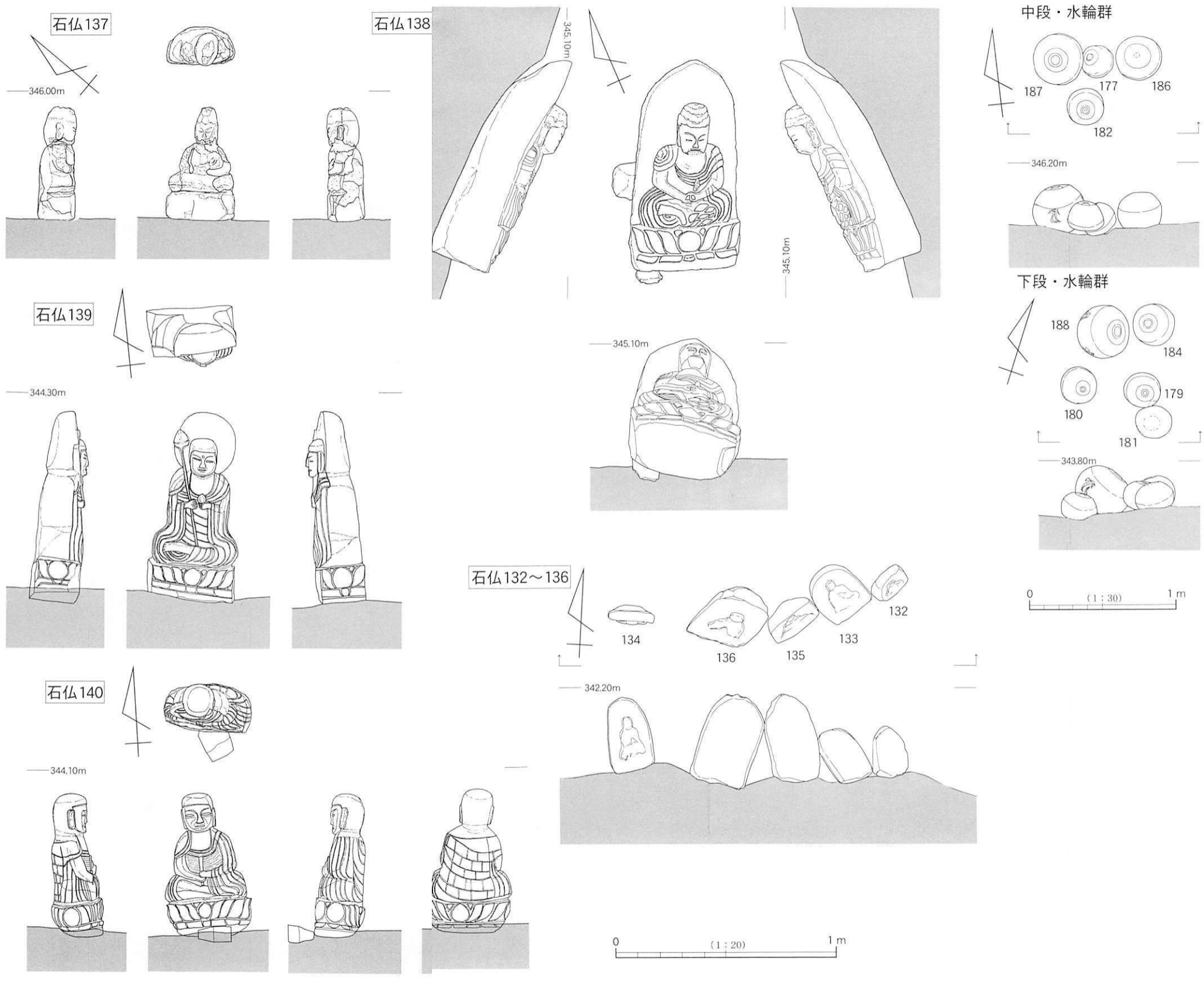
以上，中段の五輪塔部材群の部材は計26点で，その内訳は空風輪８，火輪９，水輪５，地輪４で，1/2弱の12点が結晶質石灰岩製である。結晶質石灰岩製品が占める割合は，空風輪３／８（37.5%），火輪４／９（44.4%），水輪２／５（40%），地輪２／４（50%）とほぼ似通っている。群別では，Ａ群３／７（42.9%），Ｂ群１／10（10%），Ｃ群３／４（75%，石仏131を含めると４／５＝80%），Ｄ群５／５（100%）とＢ群の結晶質石灰岩製品の少なさと特にＣ・Ｄ群における多さが目立つ。

Ｂ．遺物　出土遺物は，土器27点（土師質土器，瓦質土器，陶器），瓦103点，石仏10点，五輪塔部材55点，古銭93点，鉄製品20点の計308点を図示した。瓦片についてはコンテナ（大）（外寸58cm×39.8cm，深さ25cm）50箱と出土量が多く，完形に近いものや特徴的なものを抽出して掲載した。その他の遺物については図示可能なものはほぼすべて掲載した。

①土器（第16～18図１～27，図版11）　土師質土器（皿・高台付皿・擂鉢・鍋），瓦質土器（鍋），陶器（水滴）がある。土師質土器・瓦質土器の大半は中段の基壇状遺構ａに伴うもので，石積内



第 14 図　中段五輪塔部材群出土状況実測図（1：30）



第15図　南査区石仏・地表面五輪塔部材群出土状況実測図（1：20，1：30）

及び石積下の土坑内から出土した。高台付皿は下段の基壇状遺構 f の中央石組北西辺上に堆積した瓦溜の一角で出土した。水滴は中段北東端の基壇状遺構 e の北隅で出土している。

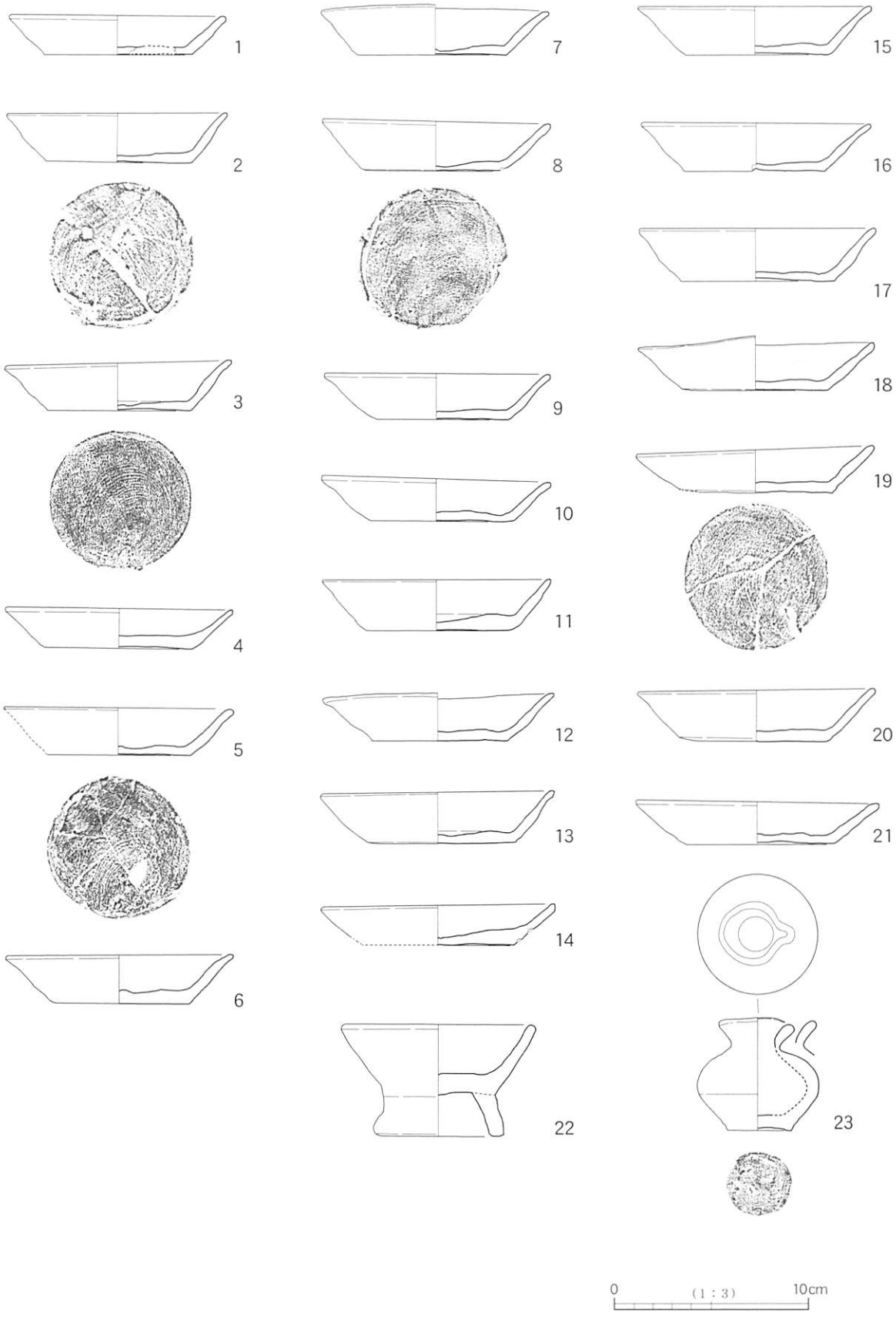
a．**土師質土器・皿 1 ～ 21**　計21点で，4・14・19・21 の 4 点が基壇状遺構 a の石積内から出土し，その他の 17点は石積下の土坑内から擂鉢25 と共に重なった状態で出土した。これら 21 点の皿は平底の底部から直線的に体部が外上方に延びる低平な器形で，底部糸切り離し，体部の調整は内外面ともにほぼ全面的に回転ナデを施している（土坑内出土の 3・10 の 2 点は回転ヘラ切離し）。法量は，口径10.7 ～ 12.3㎝（平均11.6㎝），器高2.1 ～ 2.8㎝（平均2.5㎝），底径6.8 ～ 8.0㎝（平均7.5㎝）である。石積内出土の 4 点と土坑内出土の 17点の皿の間にはそれほど明確な差異はみられない。ただ，形態・色調・胎土はほぼ一様だが，法量については，石積内の 4 点の皿は他の皿に比べると口径・底径が大きく，器高が低い。つまり，土坑内の 17点に比べて石積内出土の皿は全体に大ぶりでより低平である。このことは例えば口径と器高の比率（口径／器高）を数値化してみるとよく分かる。石積内出土の皿は 21 が 4.39 だが，ほかの 3 点は 19 が 5.00，14 が 5.36，4 が 5.43 と数値が高い。これに対して，土坑内出土の皿は 4.15 ～ 5.04（平均4.51）と低い数値を示す。また，土坑内出土の 17点の内 2・6・11・13・15・17・18 の 7 点については，体部下端を中心に内外面に淡灰黒色～灰黒色の黒斑が認められる。これは両者の焼成の違いを示している可能性がある。

b．**土師質土器・高台付皿22**　復元口径9.4㎝，器高5.7㎝の小型品で，径5.9㎝の高い輪状高台を付けたやや特異な器形である。調整は内外面ほぼ回転ナデである。

c．**陶器・水滴23**　口径 3㎝，器高5.7㎝の小型品で，暗茶褐色を呈しており，備前焼系と考えられる。口縁の一部をつまんで注ぎ口としている。調整は，口縁～体部最大径部付近が回転ナデ，体部下半は横方向の回転ヘラケズリで，平底の底部外面は回転糸切り離しである。

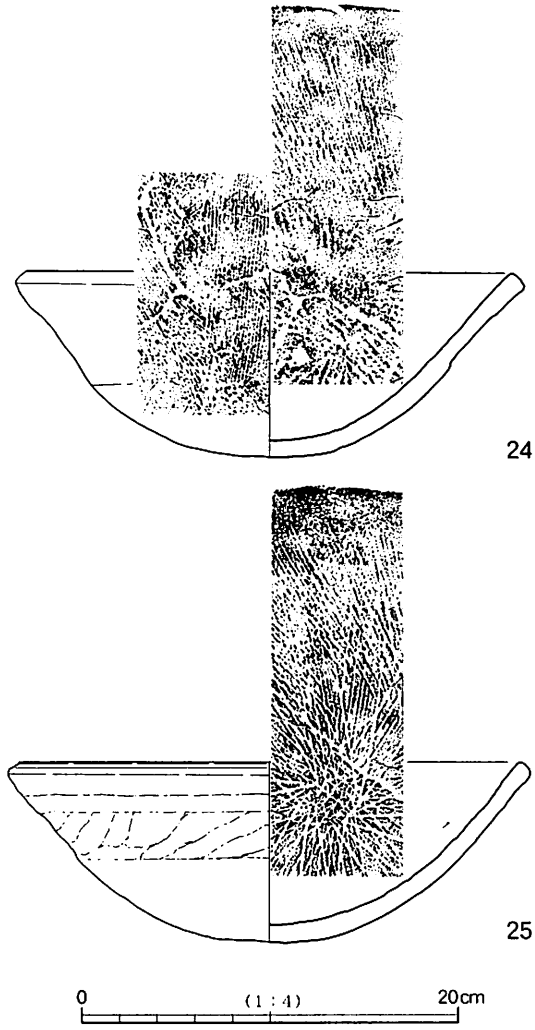
d．**土師質土器・擂鉢24・25**　24 は基壇状遺構 a の石積内，25 は土坑内からの出土である。口径・器高，丸底から外上方に直線的に延びた口縁の端部を四角く納める形態，そして内外面の調整や擂り目の状況，体部外面下半を中心にみられる灰黒色～灰色の黒斑の存在などよく似ている。口径25 ～ 26㎝，器高10㎝弱で，内面の底部～体部下位2/3 に縦方向の擂り目，体部上位2/3 にやや斜め方向の擂り目を施し，中央で両者が斜交する。内面の口縁部付近にはこれらの擂り目に先行する斜位あるいは横方向のナデないしは細いハケ目状の調整が認められる。外面の調整は，25 は残りが悪く不明確であるが，中央付近が指頭によるナデで凹んでいる。24 ではその下方の外底面にかけて縦方向・斜め方向に細かいハケ目が施されている。24 の底部は丸みが強いものの体部との間に弱い稜が認められやや平底気味である。25 は口縁の幅 6 ～ 7㎝ほどの範囲がごく弱く迫り出し，注ぎ口状を呈している。色調は灰～黄灰色と瓦質土器に酷似するが，3㎜大以下の長石・石英粒を主体とする砂粒を多く含む胎土は軟質で瓦質的ではなく，ここでは土師質土器とした。

e．**瓦質土器・鍋26，土師質土器・鍋27**　26 は基壇状遺構 a の石積内，27 は同じく石積外南東側で出土した。前者は原状をかなり留めていたが，後者は破片の状態で出土している。26 は



第 16 図　出土遺物実測図（1）（1：3）土師質土器・陶器

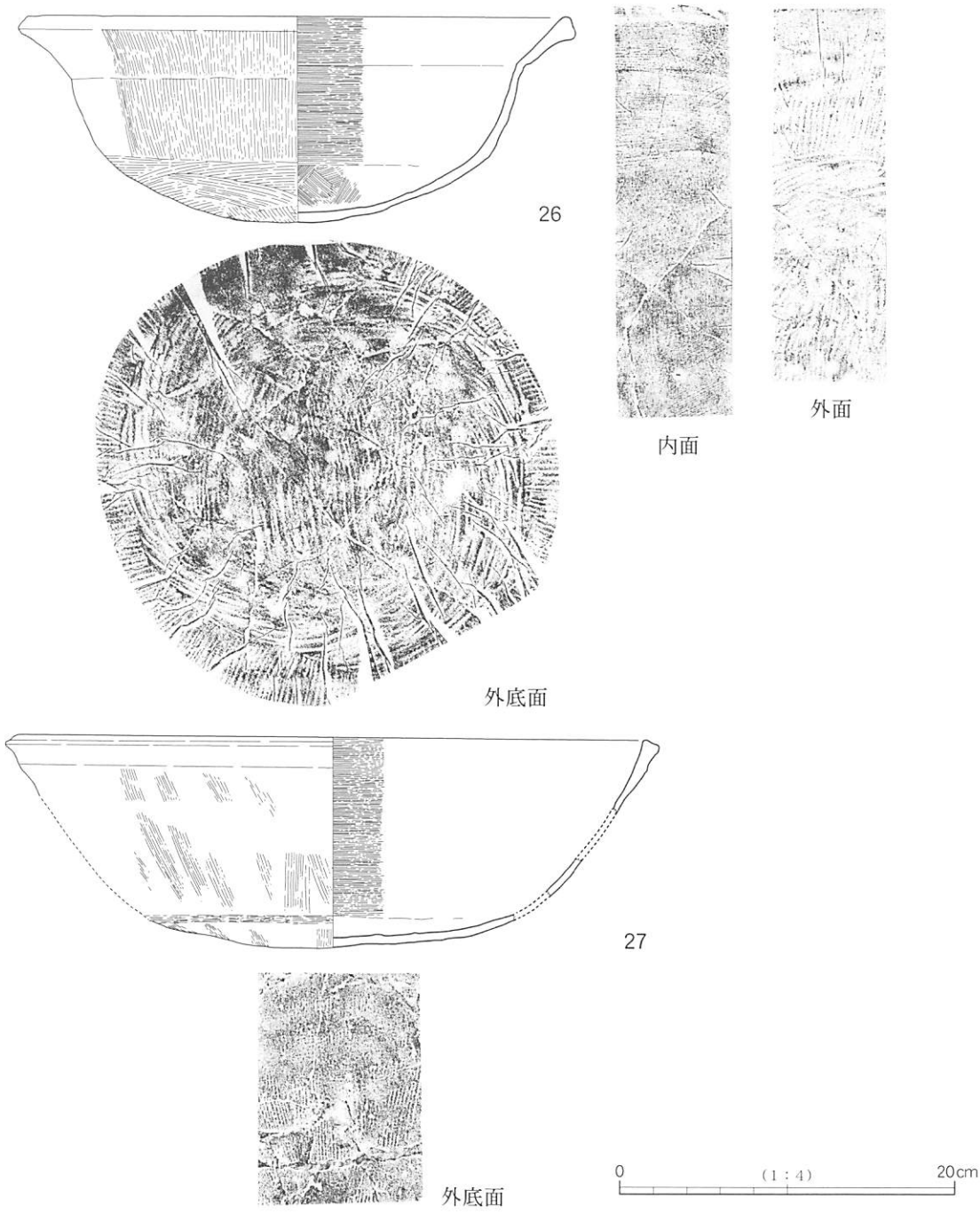
口径31.9cm，器高12.3cmの丸底の鍋で，やや開き気味に直立した体部から強く屈曲し，外上方に肥厚しながら延びた口縁端部を平たく納める。27は口径37.2cm，器高13.5cmと26より大型の鍋である。丸みの強い平底の底部から外上方にほぼ直線的に延びた体部から肥厚した口縁の端部を平たく納める。いずれも口縁部の平坦な端面の中央が僅かに凹む。調整は，内面が横方向主体の細かいハケ目，外面は体部が縦方向の粗い幅広のハケ目，底面は同じく幅広の縦方向・横方向のハケ目を施す。これらのハケ目は，断面形が細かいV字に刻まれるハケ目A，幅広に丸く凹むハケ目B，そして細い条線間の断面が丸みをもつハケ目Cの大きく3種がある。これらは恐らくハケ目の工具の原材の用い方の違いによるものと考えられる。ハケ目Aは26の内底面付近，体部外面，そして27の外面全体に用いられている。26の外底面ではハケ目Bと併存している。ハケ目Bはそのほか，27の体部内面にもみられる。ハケ目Cは26の口縁～体部内面にみることができる。これらのハケ目は，同じ種類のハケ目でも1cm当たりの条線の数は様々であることから，ハケ目工具の数は更に増えることになる。最も多く用いられているハケ目Aは10条／cm，3～4条／cm，4～5条／cm，6～7条／cmと少なくとも3～4通りの工具の存在が考えられる。これに対して，使用頻度の少ないハケ目B・Cは主に内面で7～8条／cmと比較的細かいハケ目を施すのに用いられている。ハケ目Bも26の外面では2～3条／cmと幅広である。主に外面でみられるハケ目Aも，26の内底面では細かいハケ目であり，このことから横方向主体のハケ目が施される内面では細かいハケ目，縦方向主体のハケ目が施される外面では粗く幅広のハケ目が施されるようで，ハケ目Aは外面中心，ハケ目B・Cは内面主体に用いられたと考えられる。



第17図 出土遺物実測図（2）（1：4）
土師質土器

②**瓦**（第19～34図28～130，図版12～16）

瓦は中段の基壇状遺構aの周囲と下段の瓦溜からまとまって出土している。出土量は多いが，ここでは軒瓦を主体に丸瓦・平瓦の完形に近いものや特徴的なものについて述べる。軒丸瓦（菊花文・三巴文），軒平瓦（連珠文・連巴文），丸瓦，平瓦，雁振瓦，鬼瓦がある。軒平瓦・平瓦のなかには一部隅切瓦が存在する。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦を中心に，主に法量及び形態と



第 18 図　出土遺物実測図（3）（1：4）土師質土器・瓦質土器

調整に焦点を絞って分析をすすめる。

軒丸瓦　瓦当文様が菊花文のものと三巴文のものとがある。

a - Ⅰ．**軒丸瓦（菊花文）28 ～ 43・48 ～ 51**（20点）　瓦当部を残すものは16点で，48 ～ 51の4点は瓦当部が外れた丸瓦部のみの破片で，長さや幅・高さから軒丸瓦（菊花文）のものと判断した。軒丸瓦（菊花文）は中段から3点，下段から17点出土した。下段でも特に瓦溜から14点とまとまって出土している。中段では基壇状遺構aの周囲から2点出土した。通常の軒丸瓦に比べると小ぶりで，瓦当には16弁の菊花を配している。外区に圏線や珠文帯は存在しない。

・法量

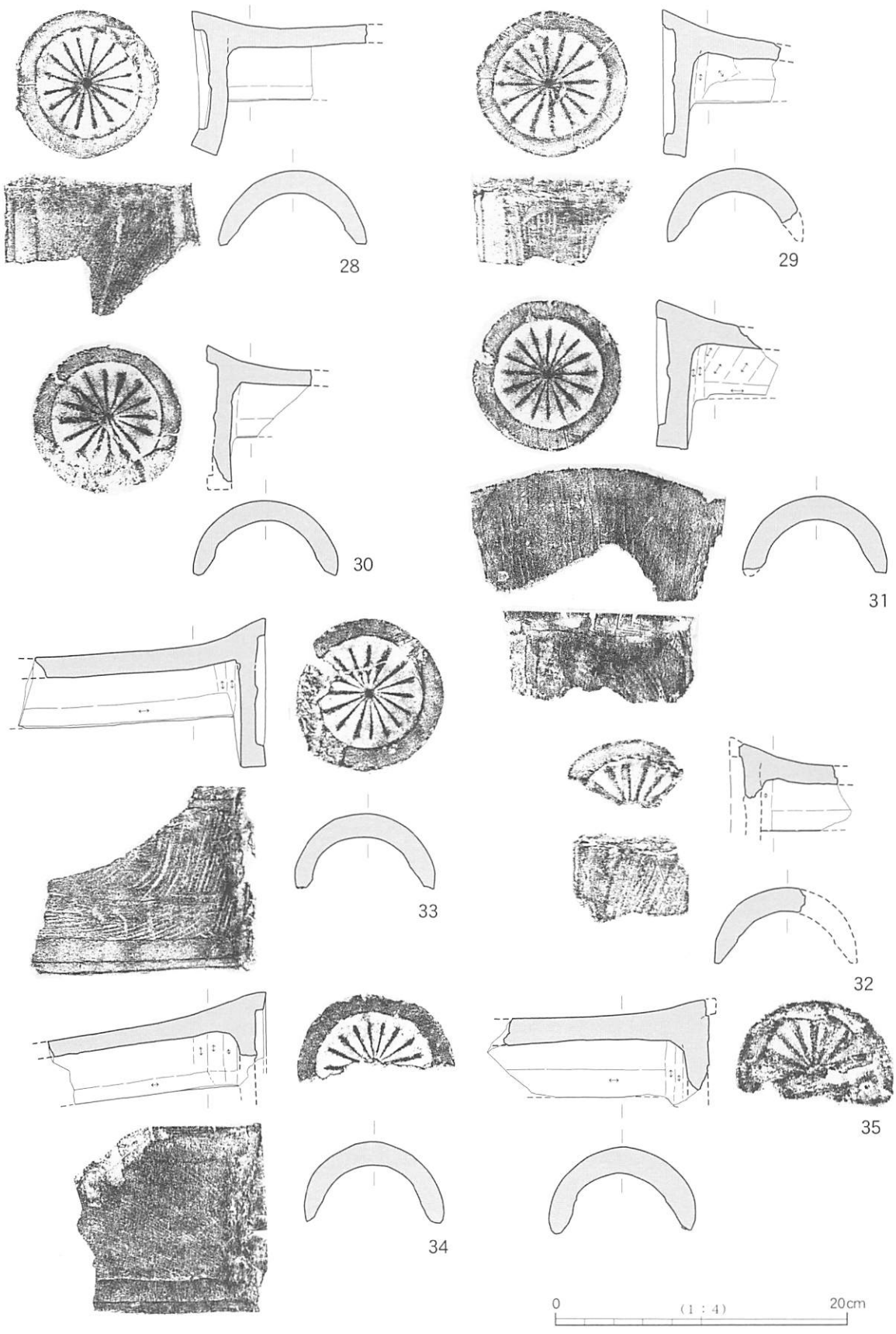
瓦当面直径は10.0 ～ 11.5㎝（計測数15点，平均10.3㎝）だが，中段の基壇状遺構a周囲出土の43のみ直径11.5㎝とやや大型で，そのほかの主に下段の瓦溜などから出土したものは直径10.0 ～ 10.2㎝の範囲に納まる。完形のものは皆無で，瓦当部が残る個体はいずれも玉縁側を失っている。41が現存長19.6㎝と最大であるが，例が少なく長さについては明確にできない。48 ～ 51の4点は瓦当部が外れた痕跡を留める丸瓦部片である。これらは瓦当部以外の残りはよく，玉縁部の状況もよく分かる。特に49は丸瓦部が完存しており，現存の長さは27.2㎝である。48・50・51も現存長23.9 ～ 26.0㎝であることから，軒丸瓦（菊花文）の全長は29 ～ 30㎝程度と考えられる。丸瓦部の高さは断面部分で4.8 ～ 6.7㎝（計測数17点，平均5.6㎝），器壁の厚さは1.1 ～ 2.1㎝（計測数17点，平均1.5㎝）である。

・形態と調整

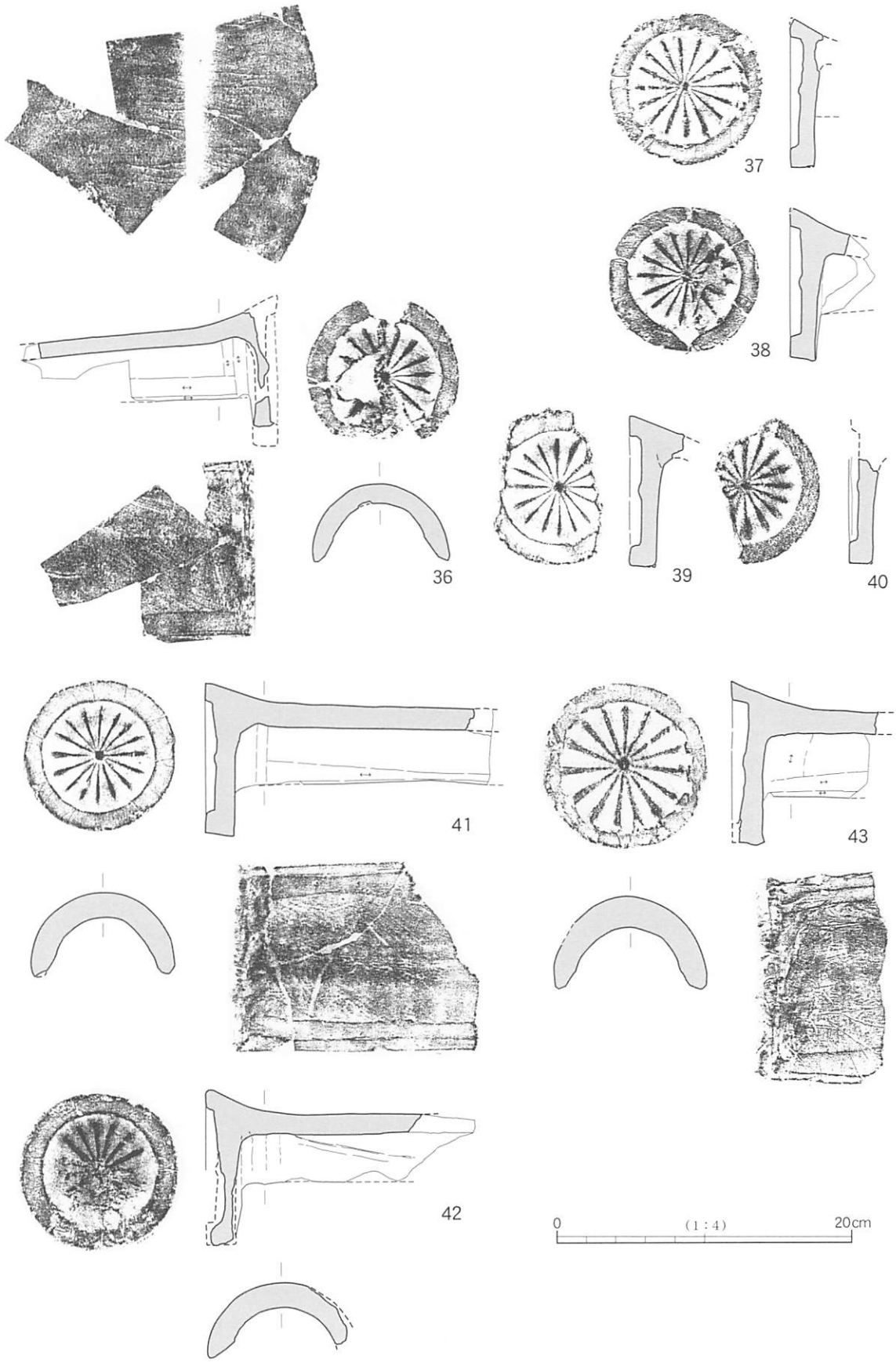
瓦当の貼り付け状況が明確に分かる例はないが，32の破断面や瓦当37の裏側上部に残る丸瓦の端部が外れた跡，さらには49 ～ 51の瓦当が外れた個体で菊花文軒丸瓦のものだと考えられるものの瓦当接合面などを観察すると，瓦当裏の上部からやや下がった位置に丸瓦部の端部を接合している。この時，接合しやすくまた外れにくくするために，丸みを帯びた丸瓦の端部や端部近くの凹面などに斜格子状の刻みを入れている。また，37には接合面に指頭によると思われるナデの痕跡がみられる。49の端部には細かい斜格子状の刻みが多くみられる。50では丸瓦端部と端部側の凹面に斜格子状の刻みが明瞭に残る。なお，凹面側の接合部分には横方向の指頭ナデがみられる。また，瓦当上部から少し下がった位置に丸瓦部が貼り付けられることから軒丸瓦（菊花文）の側面観は尖り気味の瓦当頂部から丸瓦部凸面にかけて急角度で下傾する形態となる。

瓦当裏の調整は横方向のこまかいナデで，側縁寄りは円周に沿ったナデを施す。凸面は縦方向のナデで，単位の境は緩やかな稜をなし，表面は光沢をみせる。凹面は布目痕で，なかには斜め方向主体のハケ目状（あるいは強いナデ状）の調整痕（コビキA[(1)]とみられる）が残る個体もある（28・29・31・33・34・37）。

a - Ⅱ．**軒丸瓦（三巴文）44 ～ 47**（4点）　出土点数が少なく，いずれも中段の基壇状遺構a，基壇状遺構c・d付近などからの出土で，下段からは出土していない。いずれも尾の長い左巻の



第 19 図　出土遺物実測図（4）（1 ： 4）軒丸瓦①



第20図　出土遺物実測図（5）（1：4）軒丸瓦②

巴文である。圏線を介して外区には珠文が廻る。珠文は径 5 ～ 6 ㎜で，心々で 1.2 ～ 1.4㎝間隔に約27 ～ 30個の珠文が配されている。47 は瓦当が外れた小破片であるが，器壁の厚さなどから軒丸瓦（三巴文）の破片とみられる。

・法量

いずれも瓦当部を中心にした破片で，長さは分からない。瓦当面直径はいずれも 14.0㎝で，軒丸瓦（菊花文）の 1.37倍の大きさである。丸瓦部の高さは不明である。器壁の厚さについては，瓦当が外れた三巴文軒丸瓦の可能性が高い 47 が 1.9㎝を測る。

・形態と調整

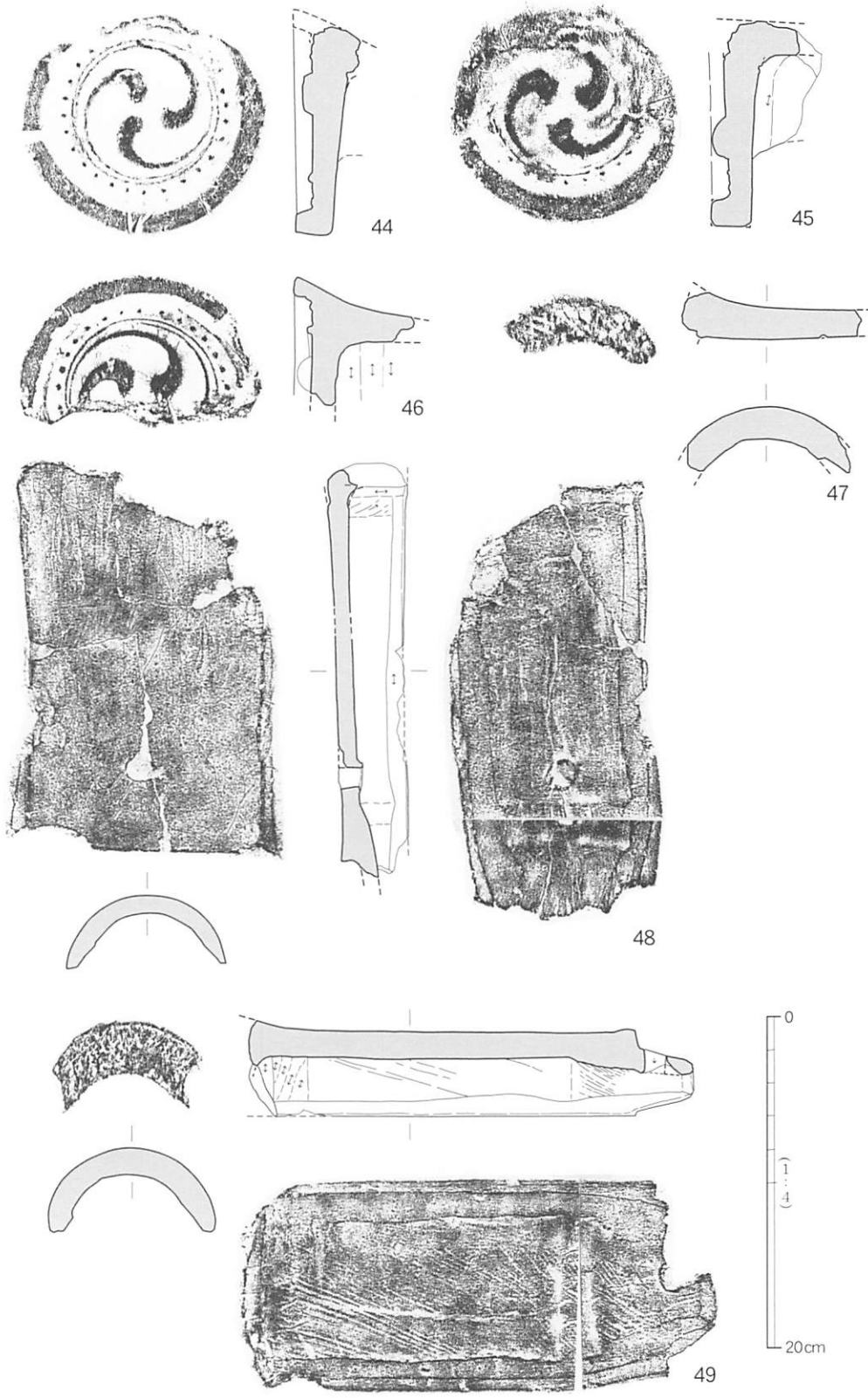
丸瓦部を殆どとどめない瓦当部主体の破片であり，全体の形態や調整については明らかでない。瓦当裏は横方向のナデ，凸面は縦方向のナデを施している。凹面は 45 が布目痕，47 は布目痕と斜め方向の強いナデ（コビキＡ）がみられる。47 の接合面には斜格子状の刻みと凹面端部に細かい斜め方向の刻み目がみられ，瓦当貼り付けの痕跡と考えられる。44・46 の凸面をみる限りでは，軒丸瓦（三巴文）は軒丸瓦（菊花文）と同じく，丸瓦端部を瓦当上部からやや下がった位置に貼り付けており，瓦当上端が尖り，丸瓦部にかけて急角度で傾斜する側面観をなしていたものと考えられる。

軒平瓦　瓦当文様が連珠文のものと連巴文のものとがある。

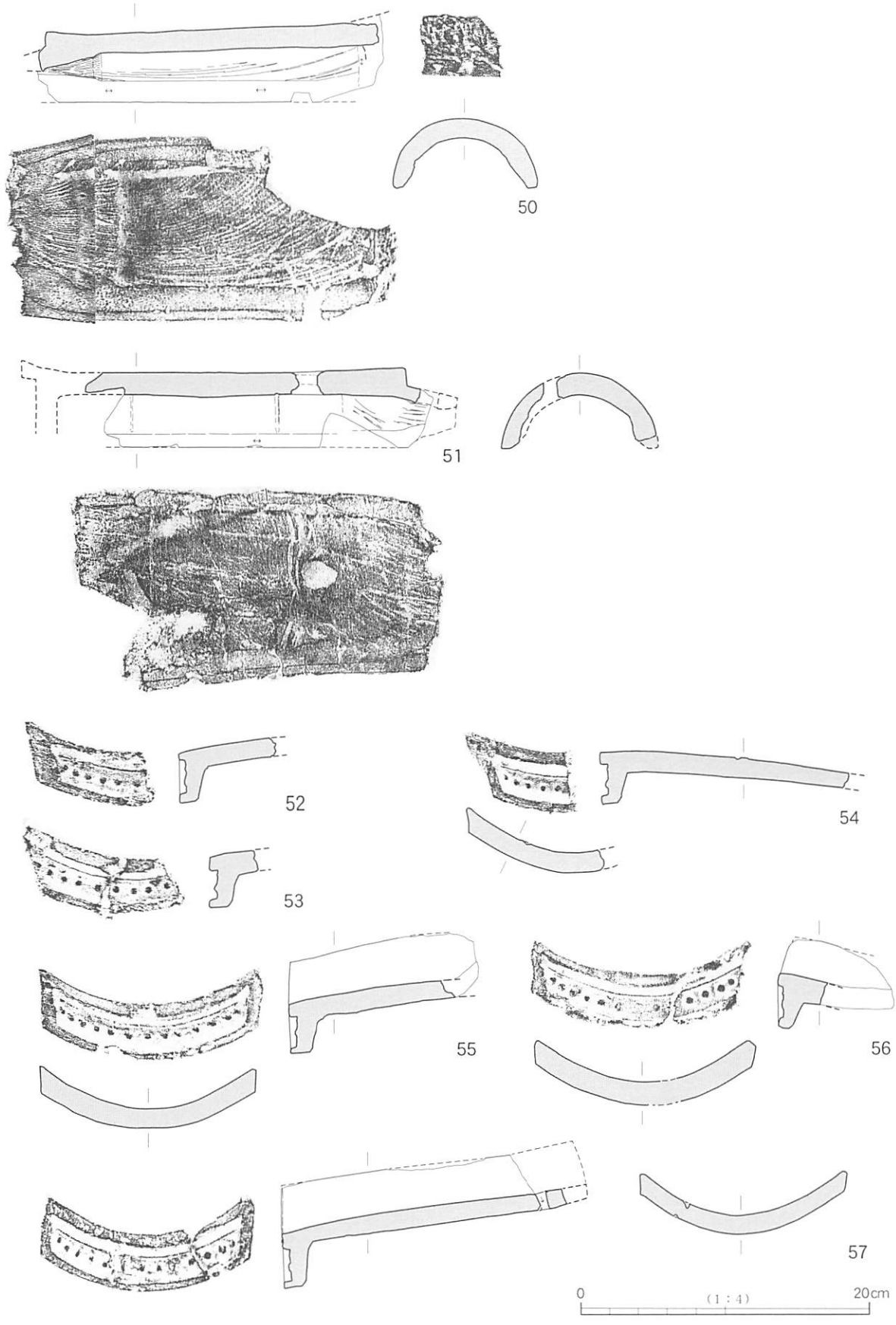
ｂ－Ｉ．**軒平瓦（連珠文）52 ～ 65**（14点）　中段から 3 点，下段から 11 点出土した。中段では南西半 2 点，基壇状遺構 a 周囲 1 点，下段では瓦溜 7 点，基壇状遺構 f 南西辺 1 点などで，下段の瓦溜から集中的に出土している。瓦当の完存例（55・57・60 ～ 62・65）からみて，13 個の珠文が並び，各珠文の間隔は心々で 0.7 ～ 1.4㎝，珠文の大きさは直径 5 ～ 7 ㎜程度である。珠文帯の上部には圏線 1 条がみられる。

・法量

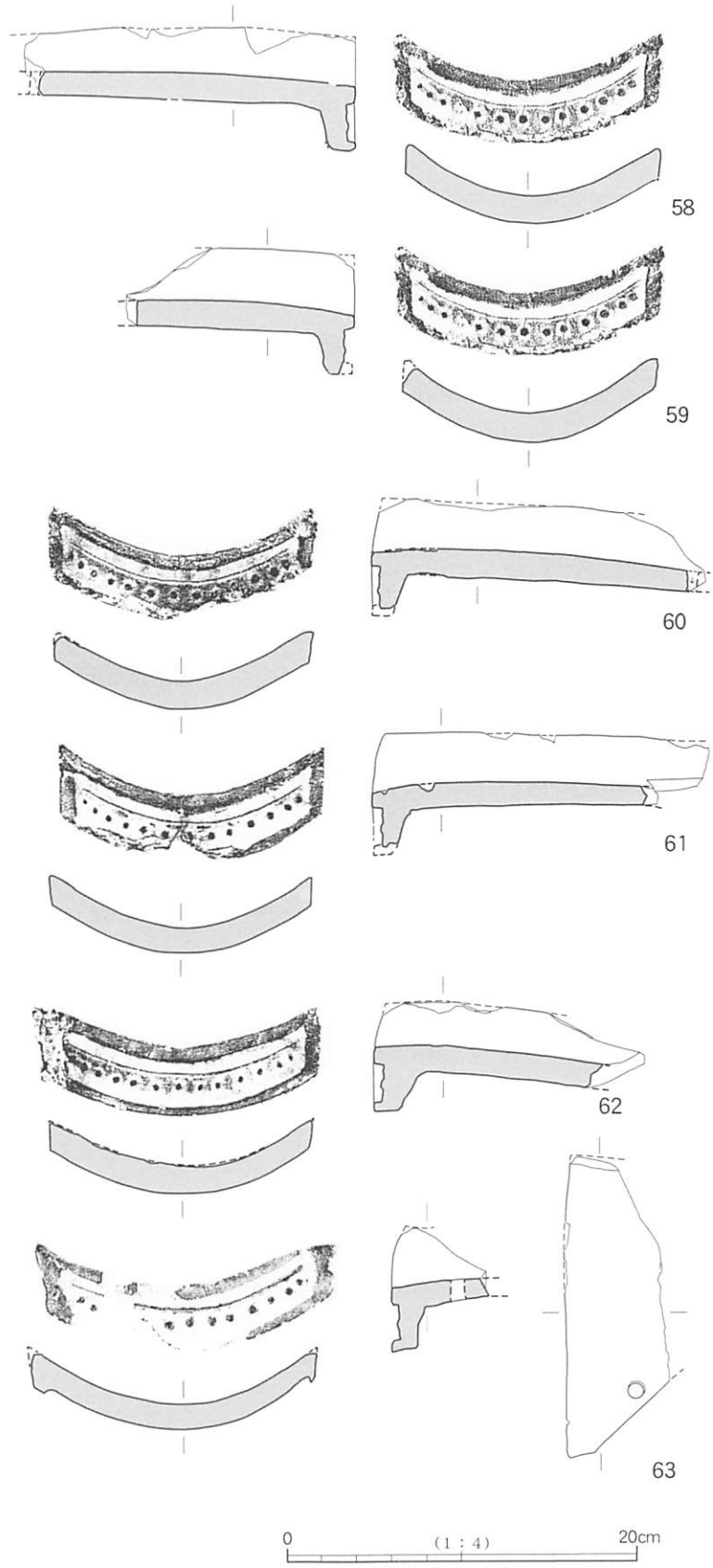
長さは平瓦部の後端が残るもの 2 点（57＝21.4㎝，65＝19.6㎝）や平瓦部の残りが良いもの（19.1㎝, 19.6㎝）の数値から 19 ～ 22㎝程度と考えられる。**瓦当面の上弦幅**は 15.0㎝（3 点），15.1㎝（1 点）から平均15.0㎝, 平瓦部の断面部分で 14.3 ～ 15.3㎝（計測数 4 点, 平均14.8㎝）である。これらから，軒平瓦（連珠文）の法量は長さ 20㎝，上弦幅15㎝程度と考えられる。**瓦当面の高さ**（中央）は 3.4 ～ 3.9㎝（計測数14点，平均3.6㎝）である。また，凹面両端の最高所と中央の最も低い箇所との差（**弧深**）は, 瓦当面の弧深が 3.0 ～ 3.6㎝（計測数 5 点, 平均3.3㎝）で，断面部分では 2.6 ～ 2.8㎝（計測数 4 点，平均2.8㎝）であり，平瓦部の断面部分での弧深の値が瓦当面の弧深の値より低い。上弦幅に対するこの弧深の割合を計測することで，軒平瓦の瓦当面凹面側の湾曲の度合いが分かる。即ち，**弧深／上弦幅**の値が高いと湾曲の度合いが強く，逆は弱いことになる。先ず，同じ個体で上弦幅・弧深の両方の値が分かるものでこの計測をしてみると（54・59・61・65），0.2 ～ 0.23（平均0.22）となる。また，瓦当面における上弦幅と弧深の値のそれぞれの平均値を出して, それらの値で計測すると, 3.3㎝／ 15.0㎝＝0.22 となり，



第21図　出土遺物実測図（6）（1：4）軒丸瓦③



第22図　出土遺物実測図（7）（1：4）軒丸瓦④・軒平瓦①



第23図　出土遺物実測図（8）（1：4）軒平瓦②

まったく同じ値になる。器壁の厚さは，1.0 ～ 1.7㎝（計測数13点，平均1.4㎝）である。

・形態と調整

いずれも平瓦部の広端面に浅い段顎の瓦当を貼り付けており，瓦当面を垂直にした時の側面観（縦断面形）は平瓦部が斜め上方に傾くものとほぼ水平なものとがある。瓦当を平瓦部に貼り付ける方法は破断面が観察できる例が少なく明確ではないが，唯一54で，平瓦部広端面を斜めに切削して凸面側に作りだした斜傾する面に瓦当上部を貼り付ける「瓦当貼り付け技法」の存在を看取することができる。

大半の個体には凸面の側縁に段差，瓦当裏と平瓦部凸面との接合箇所（屈曲する箇所）に高さ5㎜程度の垂直な面（端部を押し当てた痕跡）が残っている。平瓦部凸面から瓦当裏にかけて条線が連続する縦方向の強いナデないしはハケ目状の調整痕跡がみられ，それが顎後縁にまで及んでいる。これらはいずれも凹面台に粘土板を載せて作られた痕跡であり，これらの軒平瓦がいずれも型つくりによるものであることを表している。凹面は横方向の細かな仕上げナデが全面的にみられる例が多いが，それに先行する粗い縦方向のナデが部分的に残るものがある（54・57・58・60）。65では両側縁際は縦方向のナデ，中央は横方向の仕上げナデを施す。59・61では横方向の仕上げナデに先行してごく部分的に格子目タタキ状の調整痕がみられる。

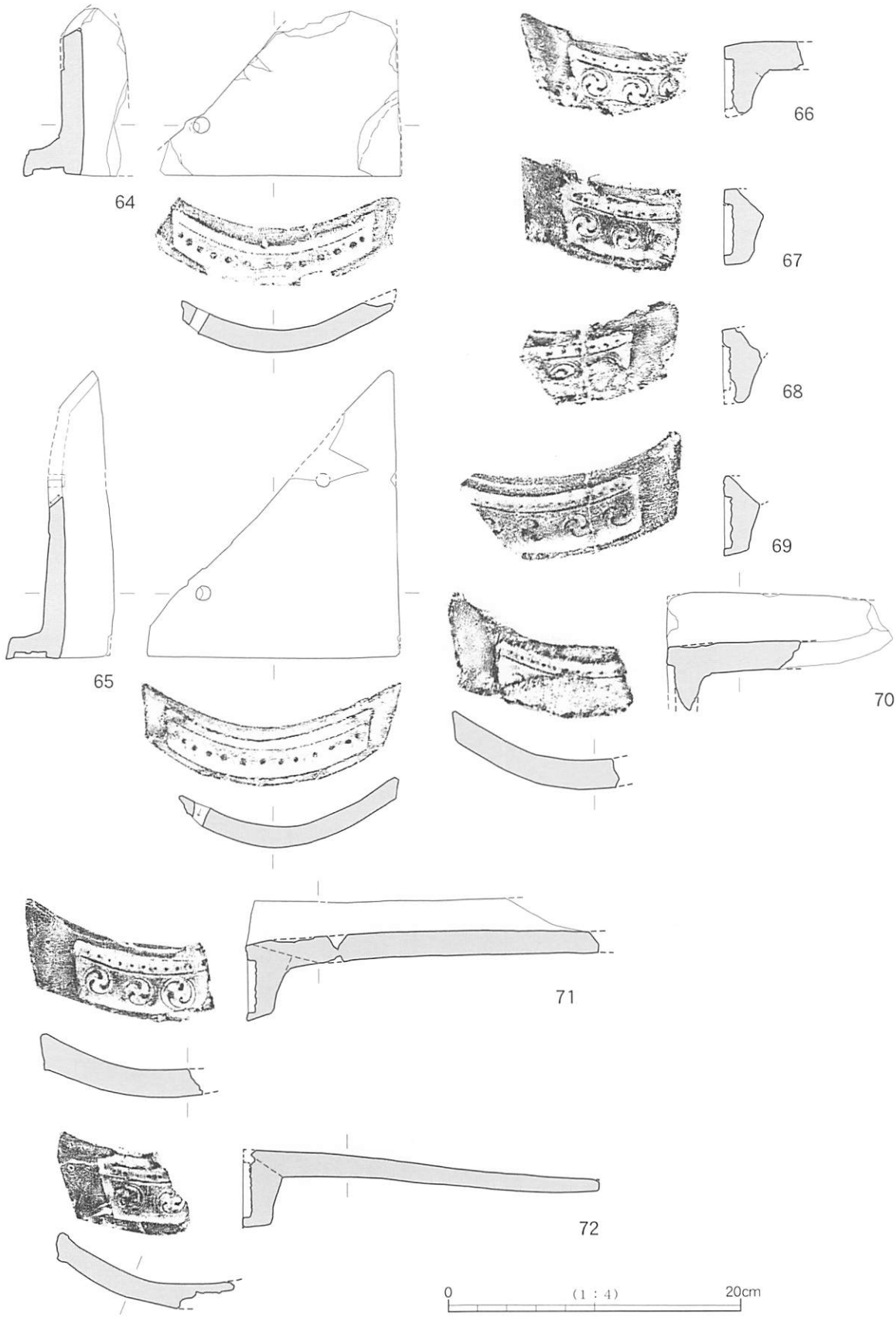
瓦当面と瓦当～平瓦部両側面，平瓦部後端（狭端面）は鋭利な工具によって切削されており，平瓦部凹面両側縁には1～2条程度の細かい面取りが施されている。瓦当～平瓦部の両側面の切削面はほぼ垂直である。

63～65の3点は隅切瓦である。63は平瓦部の向かって右側辺を斜めに切り，64・65は左側辺を切っている。それぞれの斜めに切削した辺の縁辺近くに1～2個の円孔（釘孔）を穿っている。このほか，57・58・60の軒平瓦にも釘孔各1個がみられる。これらはいずれも狭端面寄りのほぼ中央に円孔が空けられている（瓦当面から釘孔中心まではいずれも18.4㎝と同じで，規則的である）。これら釘孔をもつ6点の軒平瓦（連珠文）はいずれも下段からの出土である。

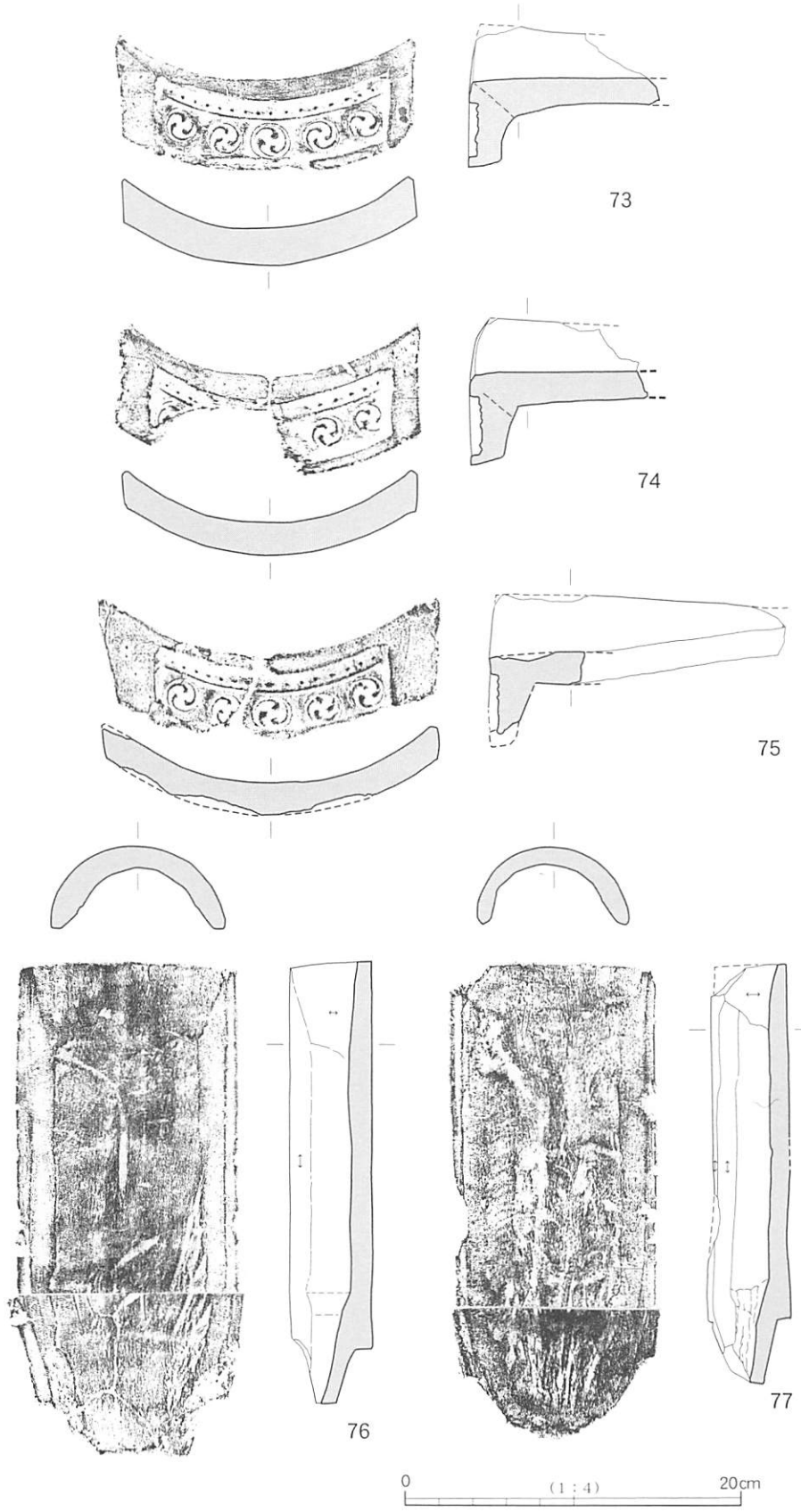
b－Ⅱ．**軒平瓦（連巴文）66～75**（10点）　中段7点，下段3点の出土で，中段では基壇状遺構a周囲から4点，その他3点，下段では瓦溜1点ほかである。瓦当面には左巻の小三巴文を5～6個連ねた連巴文を配しており，上部に一条の圏線を介して珠文帯が存在する。三巴文は直径2～2.5㎝程度で，心々の間隔2.8～3.2㎝（三巴文同士は0.6～0.8㎝間隔）である。珠文帯は径5～6㎜の珠文を16個，心々で0.7～1.1㎝程度の間隔で連ねている。

・法量

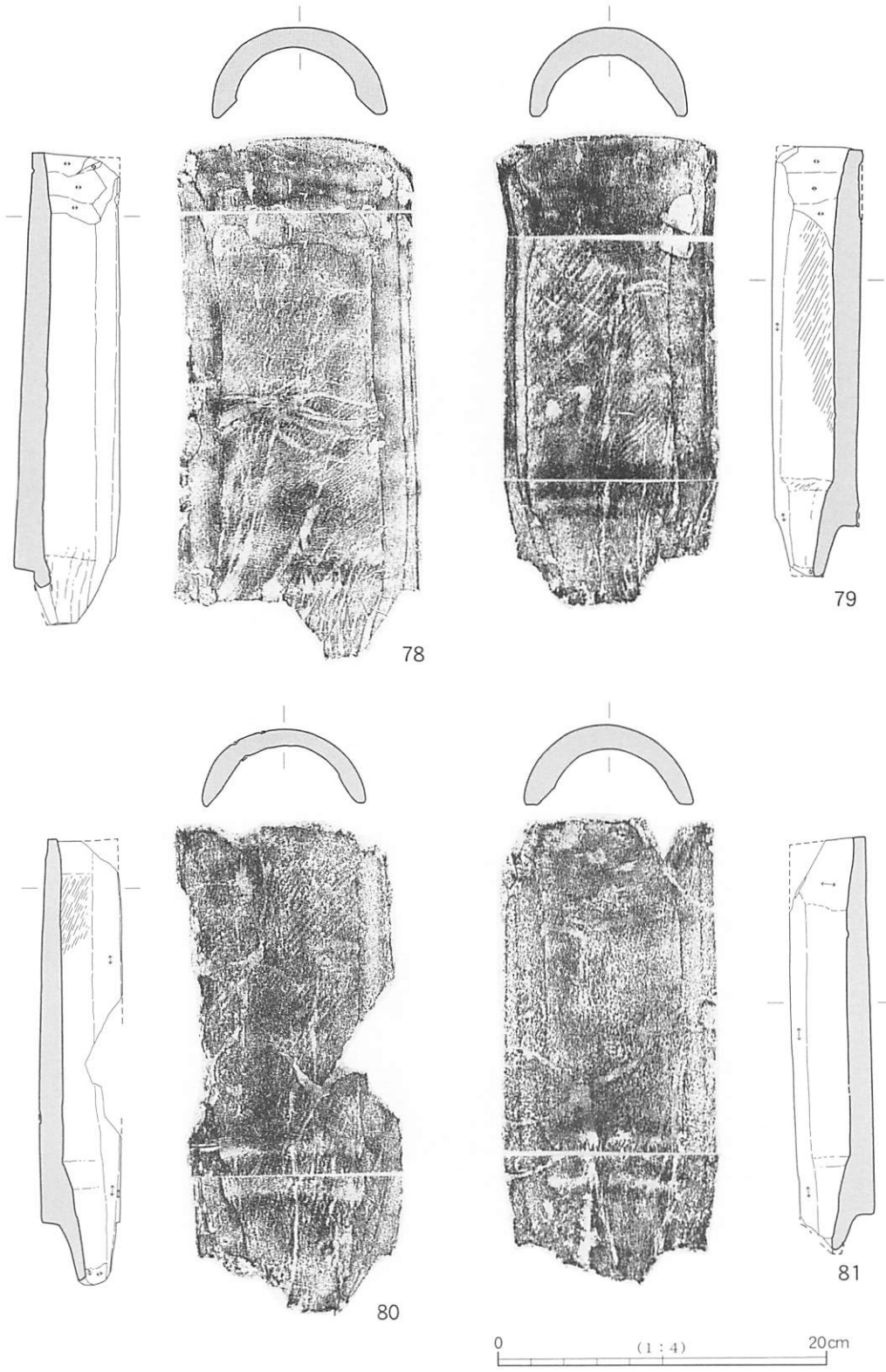
長さは唯一平瓦部の後端が残る72が24.5㎝，最も残りの良い破片71が23.4㎝であることから，24～25㎝程度と考えられる。**上弦幅**は瓦当面で17.5㎝，20.3㎝，断面部分で17.4㎝であり，17.4～20.3㎝である。**瓦当面中央の高さ**は5.1～6.5㎝（計測数7点，平均5.7㎝）である。**弧深**は瓦当面で3.7㎝，断面部分で3.1㎝であり，**弧深／上弦幅**は両方の値が分かる75で3.7㎝／20.3㎝＝0.18である。計測数が少ないのであまりはっきりしたことはいえないが，この値だ



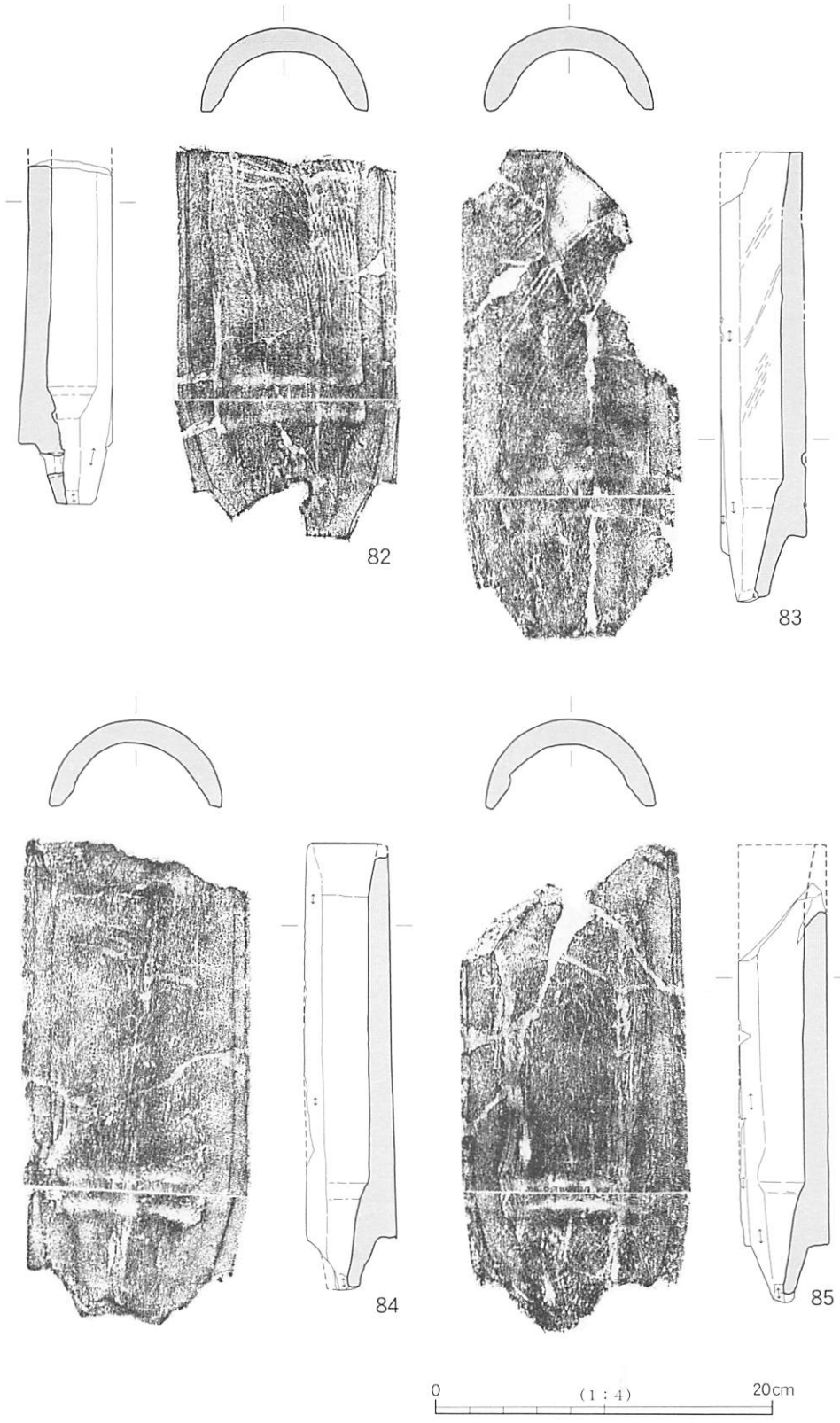
第24図　出土遺物実測図（9）（1：4）軒平瓦③



第25図　出土遺物実測図（10）（1：4）軒平瓦④・丸瓦①



第26図　出土遺物実測図（11）（1：4）丸瓦②



第27図　出土遺物実測図（12）（1：4）丸瓦③

けだと弧深／瓦当面上弦幅の値は軒平瓦（連珠文）に比べると低く，瓦当面の湾曲の程度がやや弱いということになる。器壁の厚さは，0.7 ～ 2.3㎝（計測数 7 点，平均1.8㎝）で，軒平瓦（連珠文）や平瓦に比べて器壁が厚い。

・形態と調整

軒平瓦（連珠文）と大きくは変わらない。小破片が多く，全容を窺えないので，その側面観については分からない。瓦当の平瓦部への貼り付け方法については，67 ～ 69・71・73・74 の 6 点の破断面の観察により，「瓦当貼り付け技法」によっていることが分かる。調整は，基本的には型つくりによると考えられ，凸面の両側縁の段差や瓦当裏付け根の垂直痕跡がみられる個体が多い。ただ，軒平瓦（連珠文）と違い，瓦当裏の縦方向の強いナデの上から仕上げ的な横方向のナデが施されている個体が多い。凹面には全面に横方向の仕上げナデを施しているが，70・72 では仕上げナデに先行する布目痕がよく残っている。

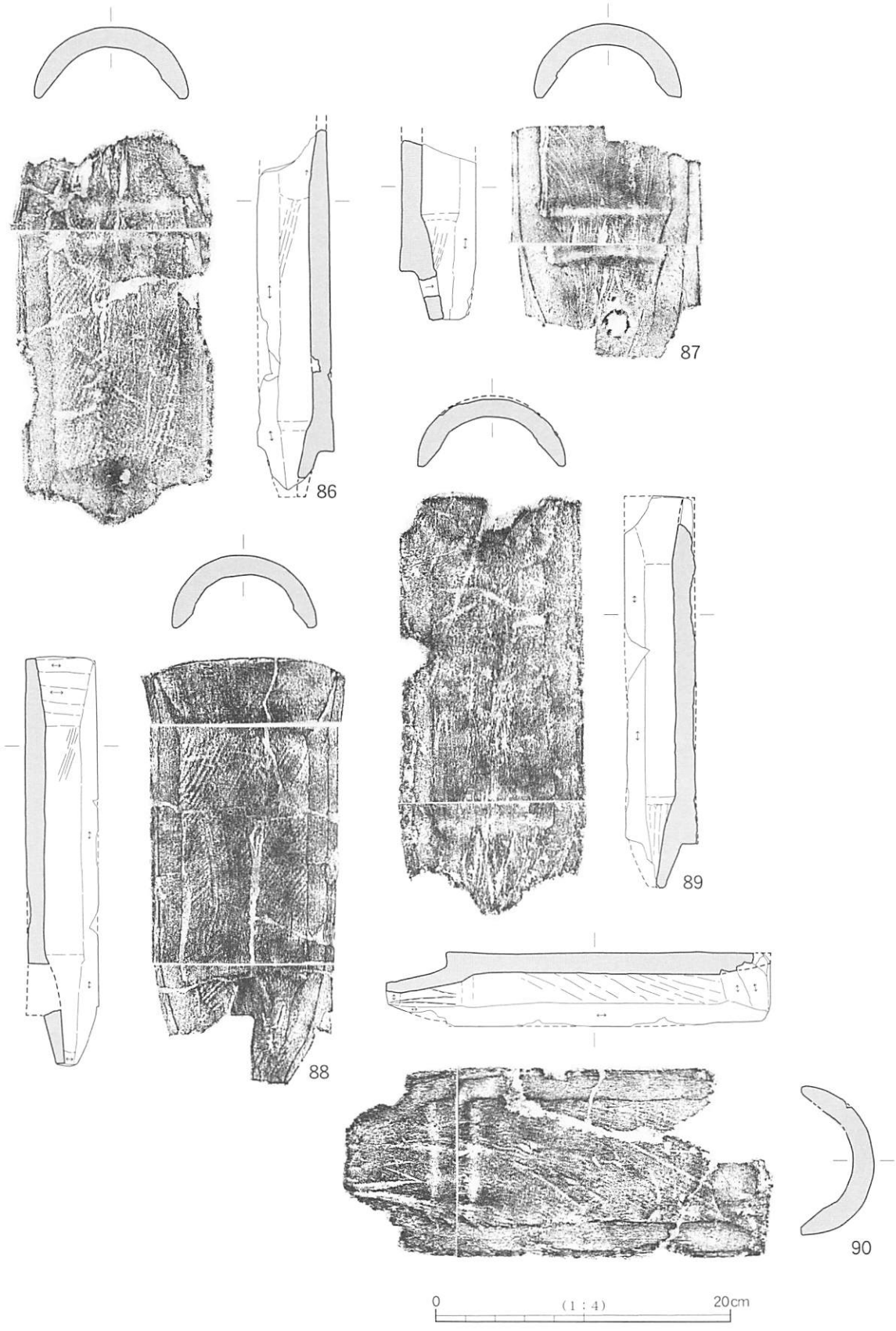
丸瓦 76 ～ 97（22点）小型品と大型品がある。中段から 7 点，下段で 14点出土している。中段では基壇状遺構 a 周囲から 4 点，その他から 3 点出土し，下段ではいずれも瓦溜からの出土である。

・法量

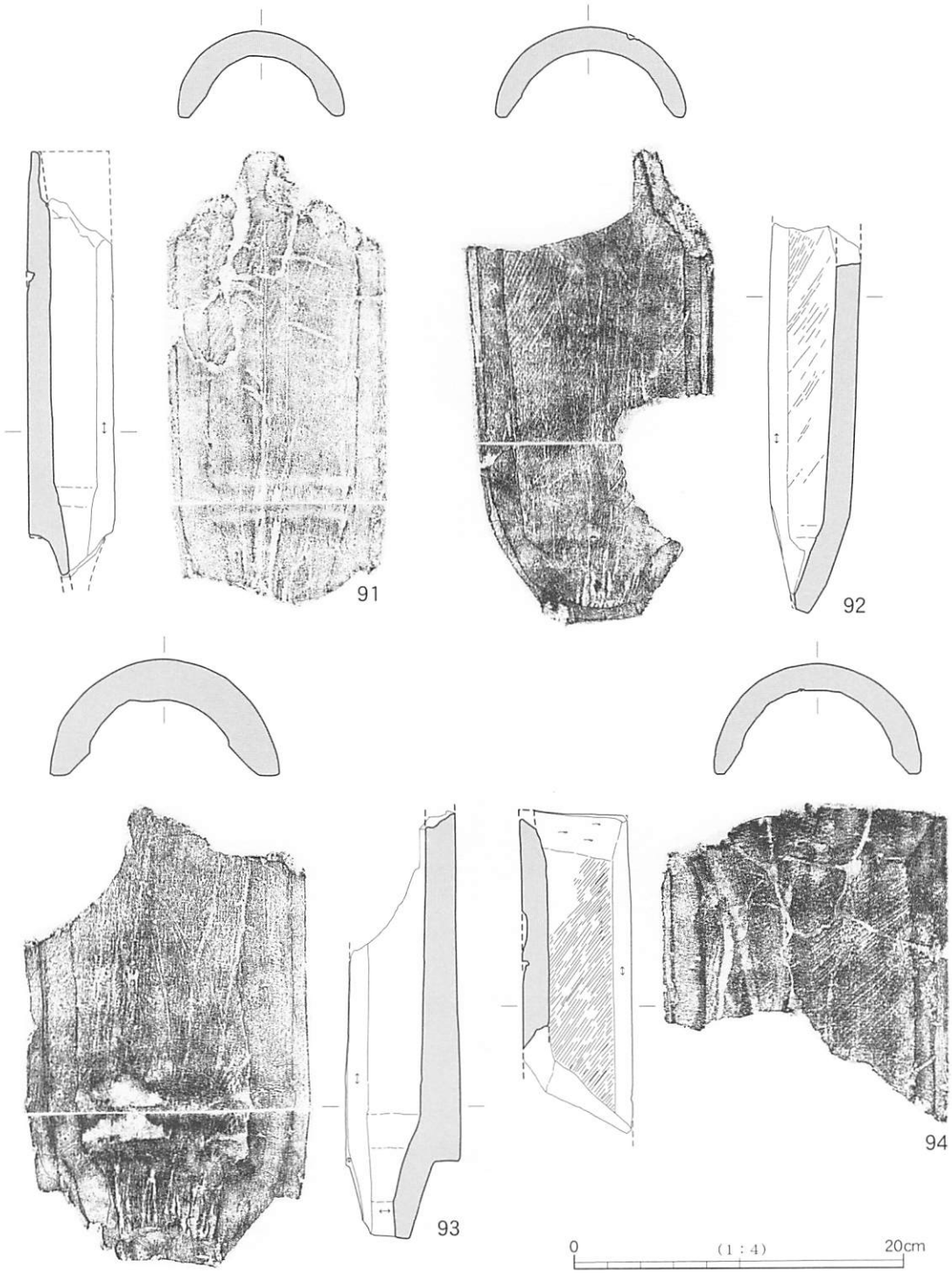
長さは全体としては 24.8 ～ 33.1㎝（計測数10点，平均27.9㎝）だが，長さ 29 ～ 30㎝付近を境に小型品と大型品に分かれるようである。小型品は長さ 24.8 ～ 28.1㎝（計測数 8 点，平均26.7㎝）＝76 ～ 80・83・84・88 で，大型品は長さ 32.1 ～ 33.1㎝（計測数 2 点，平均32.6㎝）＝96・97 である。幅は基本的に断面部分での数値で，全体的には 9.1 ～ 13.9㎝（計測数21点，平均10.7㎝）だが，11㎝あたりを境にして分れる。幅9.1 ～ 10.7㎝（計測数16点，平均10.1㎝）＝76 ～ 91（小型品）と幅12.5 ～ 13.9㎝（計測数 6 点，平均12.9㎝）＝92 ～ 97（大型品。計測対象ではないが，現存幅12㎝の 92 を含む）。このように，長さ・幅から小型品の 76 ～ 91（16 点，長さ 24 ～ 29㎝，幅 9 ～ 11㎝ほど）と大型品の 92 ～ 97（6 点，長さ 30 ～ 33㎝，幅12 ～ 14㎝ほど）に分けることができる。このことは，**高さ**の数値にも反映している。丸瓦の高さは，全体的には 4.9 ～ 7.4㎝（平均5.7㎝）だが，小型品の 76 ～ 91 は 4.9 ～ 6.5㎝（計測数16点，平均5.3㎝），大型品の 92 ～ 97 は 5.6 ～ 7.4㎝（計測数 6 点，平均6.8㎝）と明確に分れる。器壁の厚さは，0.8 ～ 2.4㎝（計測数22点，平均1.5㎝）である。玉縁部は 15点で残存するが，その長さは 2.9 ～ 5.4㎝（平均3.5㎝）である。小型品では 2.9 ～ 4.0㎝（計測数11点，平均3.4㎝），大型品は 4.2 ～ 4.7㎝（計測数 4 点，平均4.7㎝）である。釘孔があるものが 2 点（82・87）あり，いずれも小型品の玉縁部に穿孔がみられる。大型品の 92 は中段の基壇状遺構 a 周囲から出土したが，玉縁部が段差をもたない無段式の行基葺の丸瓦である。

・形態と調整

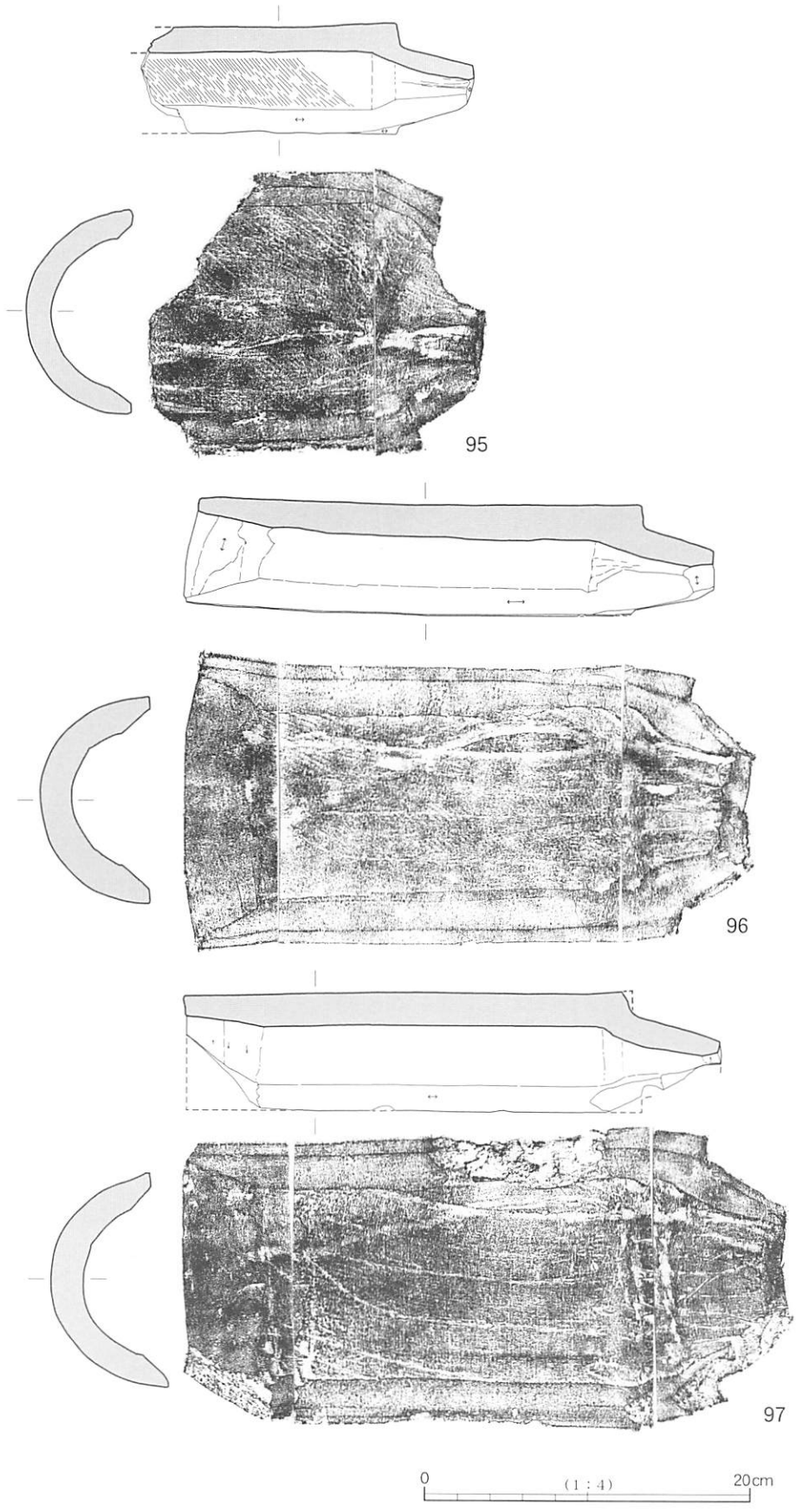
形態と調整に関しては，小型品と大型品の間に大きな差はない。側面観は半円筒の後端部に下傾する玉縁部が付くもので，横断面形は半円形，縦断面形の前端側は端部に向って凹面の厚さが



第 28 図　出土遺物実測図（13）（1：4）丸瓦④



第29図　出土遺物実測図（14）（1：4）丸瓦⑤



第30図　出土遺物実測図（15）（1：4）丸瓦⑥

減ずる。両端部は鋭利な工具で垂直に切削し，凸面の調整は丸瓦部が縦方向の幅 1 cm程度の強いナデで，単位の両側には稜が付く。丸瓦部後端面と玉縁部の凸面は横方向の仕上げナデである。凹面は，丸瓦部前端の厚さが減じる箇所は横方向のケズリないしはナデ，その他は玉縁部にかけて大半が布目痕と斜め方向主体の粗いハケ目状のコビキＡである。玉縁部後端の凹面には縦方向の短いケズリを施すものがある（89・90・93・96）。凹面の両側縁には丸瓦部～玉縁部全体に幅広の大きな面取りがなされ，さらに凹面･凸面の境には 1 ～ 2 条の小さな面取りを行っている。また，丸瓦部から玉縁部へ移行する箇所の凹面は緩やかに下傾して窄まる。

平瓦98 ～ 123（26点） 丸瓦と同様に小型品と大型品がある。中段で 15 点，下段で 11 点出土した。中段では基壇状遺構 a 周囲で 15 点，その他 1 点で，下段ではいずれも瓦溜からの出土である。

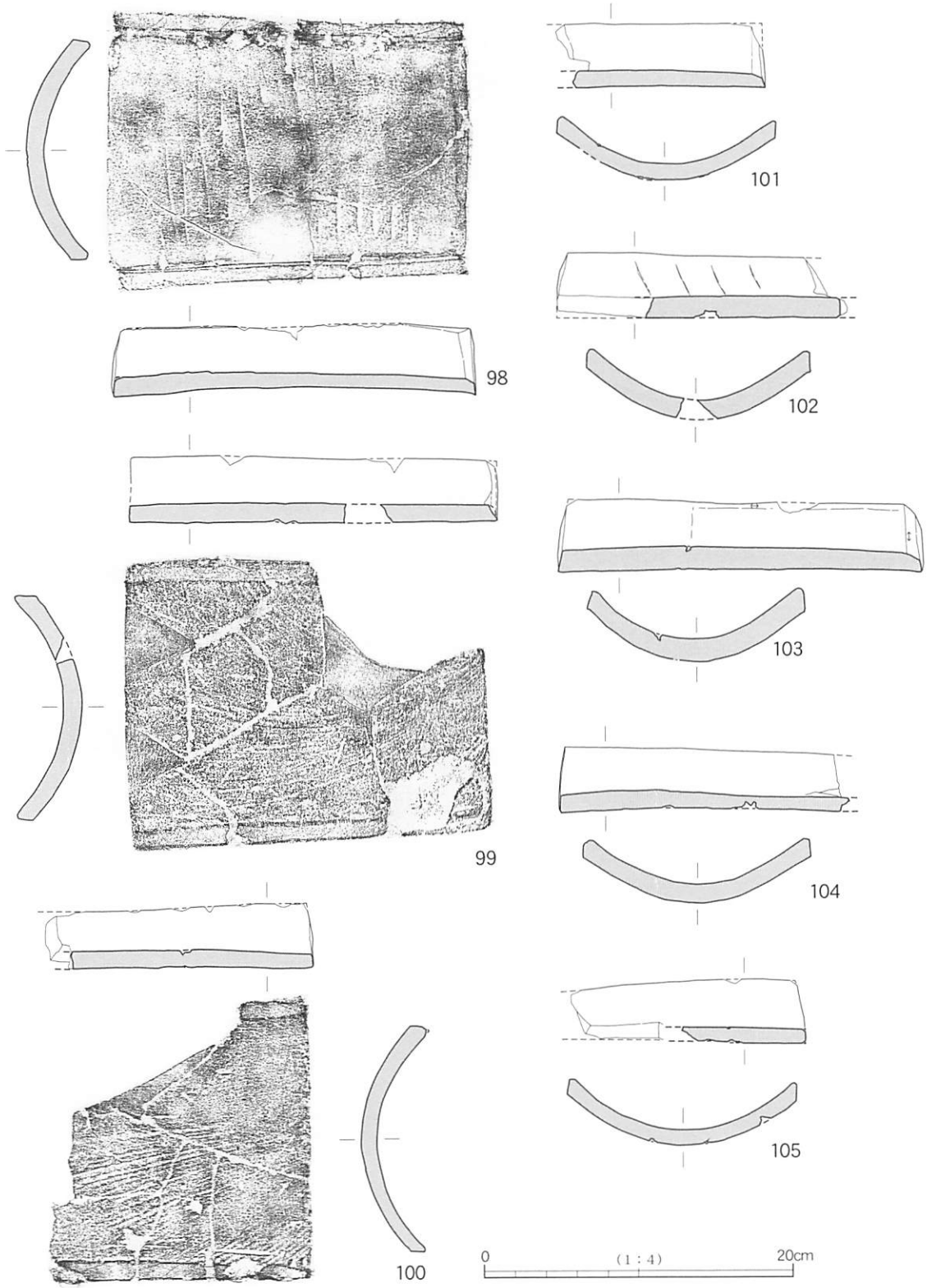
・法量

長さが計測できる資料は計 11 点で，23.5 ～ 30.5 cm（平均28.5 cm）である。これらは 23.5 ～ 23.9 cm（計測数 3 点，平均23.7 cm）＝98・99・103 の小型品と，長さ 29.9 ～ 30.5 cm（計測数 8 点，平均30.3 cm）の大型品に分けることができる。**上弦幅**は広端面及び断面部分での値をみてみると，小型品の 98 ～ 105 では広端面上弦幅は 13.7 ～ 14.4 cm（計測数 4 点，平均14.1 cm），断面部分での上弦幅は 14.1 ～ 14.7 cm（計測数 3 点，平均値14.5 cm）といずれも平均値が 14 cm台であるが，大型品の 106 ～ 122（123 は隅切瓦なので除く）の広端面上弦幅は 19.0 ～ 19.3 cm（計測数 3 点，平均19.2 cm），断面部分上弦幅は 17.5 ～ 19.7 cm（計測数13 点，平均値18.4 cm）と平均値は 18 ～ 19 cm台である。資料数は少ないが，これを狭端面上弦幅でみてみると，小型品では 12.5 ～ 13.0 cm（計測数 3 点，平均12.7 cm），大型品は 16.5 ～ 17.8 cm（計測数 4 点，平均17.4 cm）となる。これらから，平瓦は小型品 98 ～ 105 と大型品 106 ～ 122 に分かれ，その法量は，小型品は長さ 23 ～ 24 cm，広端面上弦幅 14 cm，狭端面上弦幅 12 ～ 13 cmであり，大型品は長さ 30 ～ 31 cm，広端面上弦幅 19 cm，狭端面上弦幅 16 ～ 18 cm程度となる。広端面上弦幅／長さ＝0.59 ～ 0.6（小型品），0.63 ～ 0.64（大型品）となり，大型品の方がやや長さの広端面上弦幅に対する割合の数値が高い，つまり平面形がより細長いといえる。次に，広端面上弦幅と狭端面上弦幅を比較してみよう。両者の数値がいずれも分かるのは小型品の 103 のみで，広端面上弦幅 13.7 cmに対して狭端面上弦幅は 12.7 cmで，狭端面上弦幅／広端面上弦幅＝12.7 cm／13.7 cm＝0.93 である。小型品の狭端面上弦幅平均値／広端面上弦幅平均値＝12.7 cm／ 14.1 cm ≒0.90，大型品では 17.4 cm／ 19.2 cm＝0.91 となる。つまり，平瓦の狭端面上弦幅は広端面上弦幅の 0.9 ～ 0.93 程度，つまり 9 割強ということができる。**弧深**については，小型品は広端面で 3.1 ～ 3.4 cm（計測数 3 点，平均3.2 cm），断面部分で 2.9 ～ 3.2 cm（計測数 5 点，平均3.0 cm），狭端面で 3.6 ～ 3.85 cm（計測数 2 点，平均3.7 cm）である。小型品で広端面の弧深と狭端面の弧深の両方の数値が分かるのは，98（広端面弧深3.1 cm，狭端面弧深3.6 cm）と 99（広端面弧深3.1 cm，狭端面弧深3.85 cm）の 2 点であるが，この例からも平均値が示すように，弧深について

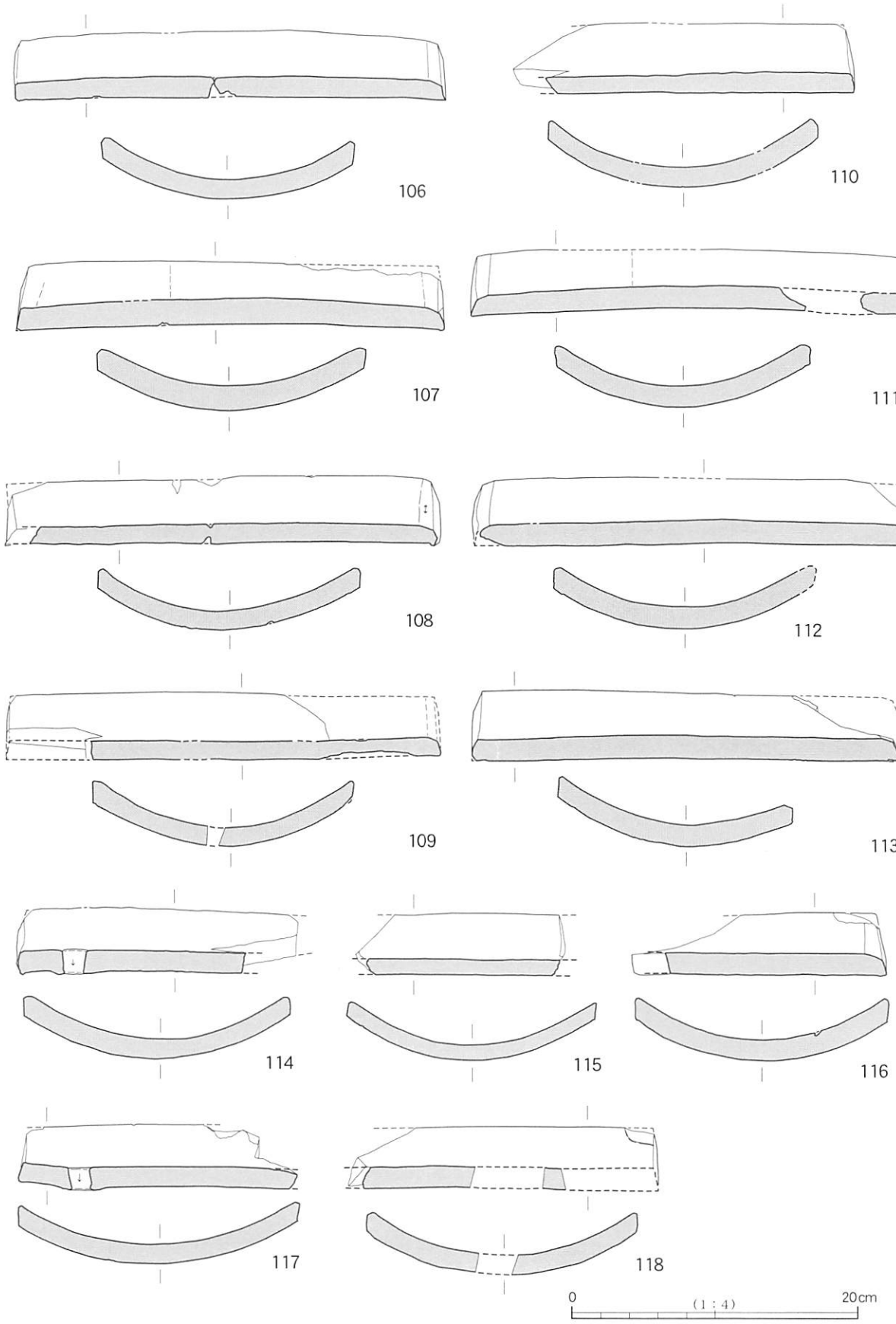
は広端面よりも狭端面の数値が大きい（つまり深い）ことが分かる。また，大型品の弧深をみてみると，広端面で 2.5 ～ 3.0㎝（計測数 3 点，平均2.7㎝），断面部分で 2.4 ～ 3.3㎝（計測数11点，平均2.9㎝），狭端面で 2.8 ～ 3.4㎝（計測数 4 点，平均3.0㎝）である。大型品で広端面の弧深と狭端面の弧深の両方の数値が分かる例は 3 点ある。すなわち，106（広端面弧深3.0㎝，狭端面弧深2.8㎝），107（広端面弧深2.7㎝，狭端面弧深3.0㎝）と 111（広端面弧深2.5㎝，狭端面弧深2.85㎝）である。小型品と同じくやはり狭端面の弧深の数値が広端面のそれよりも高い，つまりより深い。ただ，小型品と大型品の弧深の数値を比べてみると，全体に大型品の弧深の数値は低く，小型品の弧深は深い。即ち，大型品の弧深の数値は相対的に低い，つまりより浅いといえる。このことは次の弧深と上弦幅の関係をみてみるとよりよく分かる。**弧深／上弦幅**は平瓦の凹面の湾曲の度合いを測る数値である。これらを既述した上弦幅と弧深の平均値でみてみると，小型品では弧深／上弦幅＝3.2㎝／ 14.1㎝＝0.23（広端面），＝3.7㎝／ 12.7㎝＝0.29（狭端面），大型品では弧深／上弦幅＝2.7㎝／ 19.2㎝＝0.14（広端面），＝3.0㎝／ 17.4㎝＝0.17（狭端面）となる。このことから，平瓦では小型品の方が大型品よりも凹面側の湾曲の度合いが大きいことと，同じ平瓦でも広端面よりも狭端面の方の湾曲の度合いが大きいことが分かる。器壁の厚さは 0.6 ～ 1.8㎝（計測数26点，平均1.2㎝）で，軒平瓦（連珠文＝平均1.4㎝，連巴文＝平均1.8㎝）に比べると薄い。

・形態と調整

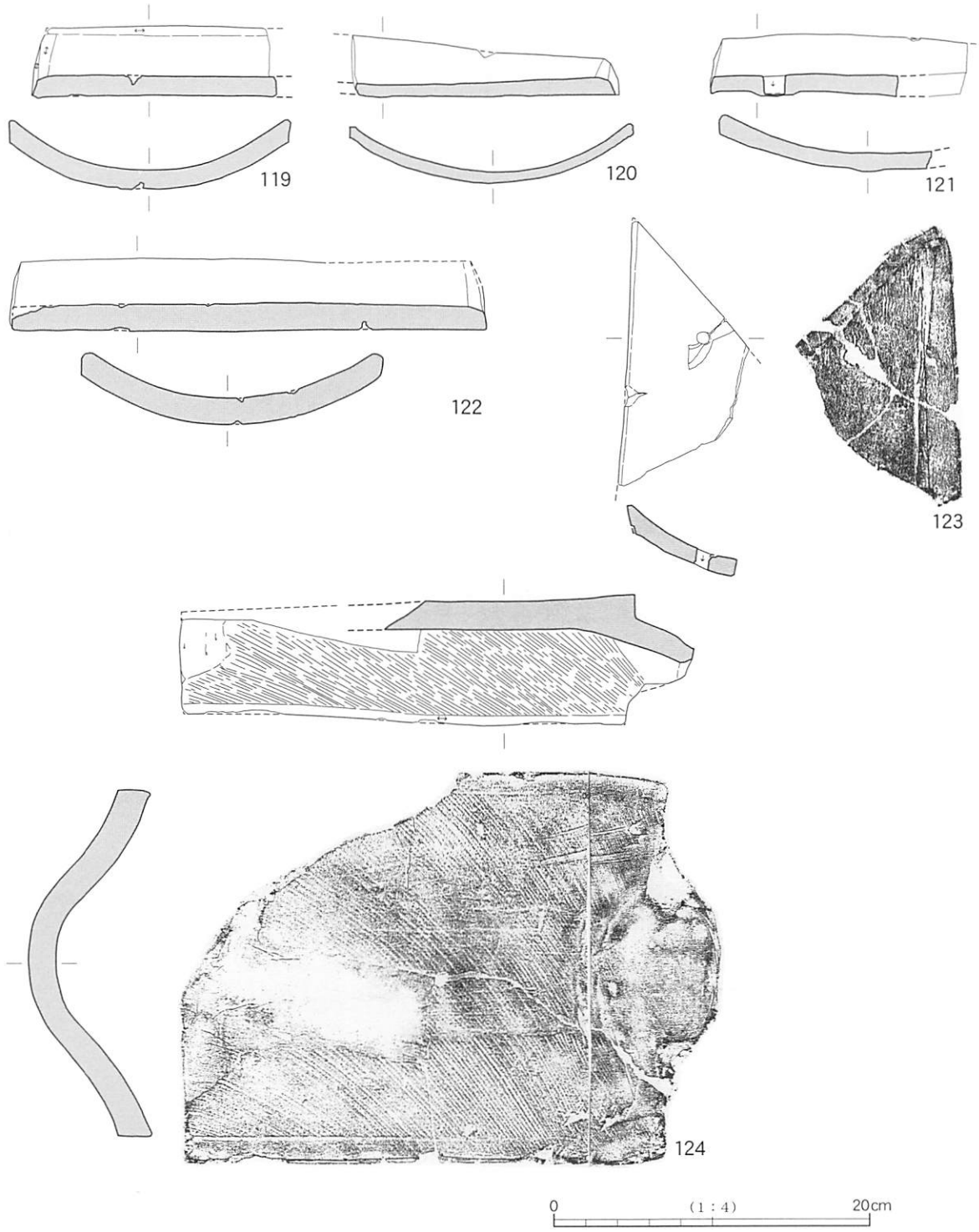
以上のように，平瓦はやや強い湾曲の小型の平瓦と湾曲がいくらか弱い大型の平瓦とに分けられる。平面形は片側の小口（狭端面）がいくらか狭まる長方形である。両小口（広端面・狭端面）は長軸中心線に対して基本的には直交するが，なかにはいくらか傾いているものも存在する（107 ほか）。広端面・狭端面と両側面は鋭利な工具で端面がほぼ垂直ないしは凹面側に若干上傾するように横方向に切削されている。両小口の端面には凹面側から工具が当てられており，凸面側は半端な切削状況をみせるものがある（100・107・121，98 は凸面側から切削されている）。狭端面の凹面側には幅広の面取りがみられるが，この面取りは横方向に工具を動かして切削がなされている。両側縁の凹面側の端部にはそれぞれ細い面取りが 1 ～ 2 条程度みられる。凹面側の調整は縦方向のやや粗いナデののちに仕上げの細かな横方向のナデを行っている。両側縁際には仕上げの縦方向のナデがみられるものもある。また，横方向のナデがみられず，縦方向のナデのみのものや両者が共存するものもある。後者の場合，縦方向のナデは広端面側で，横方向のナデは狭端面側に施されている（107・111・112）。これは軒の先端側に凹面を露出させる狭端面側と上に後ろ側の平瓦が重なる広端面との違いであろう。凸面側の調整はあまり明確な調整痕は残らない。幅数㎝程度の緩やかな稜をもった単位の縦方向のナデ状の調整がみられることが多いが，大半は痕跡は不明確である。全体に凸面側の面はざらざらしている。両側縁に 1 ～ 2 条の幅数㎜ほどのごく浅い縦方向のナデ状の調整と小さな段差が側縁際に残る。なかには両小口（広端面・狭端面）の縁辺にもごく緩やかな盛り上がった段差がみられる例もある（101・108・120・121）。これらは型の痕跡と考えられる。凹面側のような仕上げの調整がなされず，ごく



第31図　出土遺物実測図（16）（1：4）平瓦①



第 32 図　出土遺物実測図（17）（1：4）平瓦②

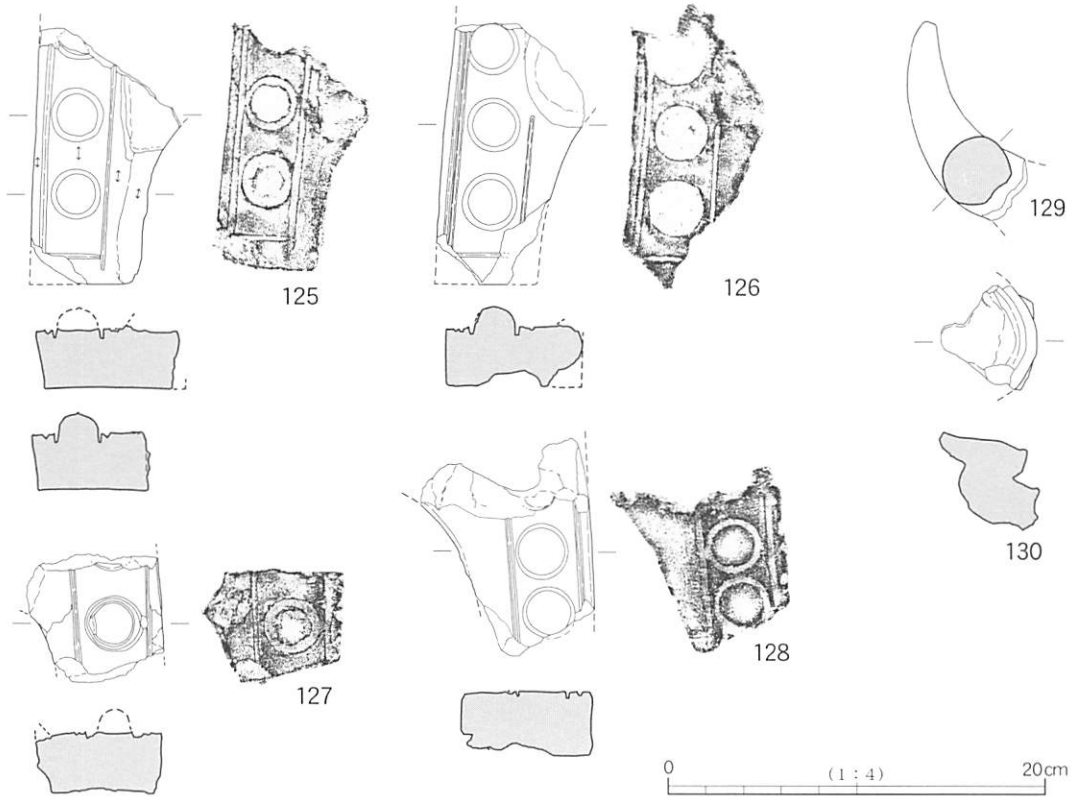


第 33 図　出土遺物実測図（18）（1：4）平瓦③・雁振瓦

粗い無調整に近い。この凸面の調整状況から，大半の平瓦は凹面台による一枚作りの所産と考えられる。なお，99・100の凸面には斜め方向に緩やかなカーブを描く粗いハケ目状の調整がみられる。

釘孔は4個体に存在する（114・117・121・123）。114・117・121の3点はいずれも広端面から3.0～3.2㎝の距離のほぼ中央に直径1.5㎝ほどの円形の釘孔が凹面側から穿たれている。121は未通であり，凹面側からの穿孔時の加圧のためか，凸面側の釘孔周囲が2～4㎜程度盛り上がっている。これら3点の平瓦は中段の基壇状遺構aの周囲から出土した。123は隅切瓦で直径1㎝ほどの釘孔が凹面側から穿孔されている。切削された側辺から1.5㎝の位置にあり，釘孔2個が切削された側辺近くに穿たれている隅切瓦の軒平瓦（連珠文）65と対になる軒平瓦である可能性もある。65と同じく下段の瓦溜からの出土である。

雁振瓦124　唯一の道具瓦で，中段の基壇状遺構a周囲から出土した。長さ38.1㎝，最大幅21.9㎝，高さ（最大）8.3㎝である。長さ3.6㎝，幅7～14㎝の短い玉縁が付く。縦断面形は普通の丸瓦状だが，横断面形は中央が丸く盛り上がる半円形の丸瓦状部分から両側端側にかけて外反気味に外下方に延びる形態である。前端側が薄く窄まり，端面は横方向の切削によってほぼ垂直である。側端面はいずれも垂直で，横方向に切削されている。凹面側の縁辺は尖り気味で小さな面取りがされている。凹面は中央の丸瓦状部分には布目痕がよく残る。この布目痕に後出して

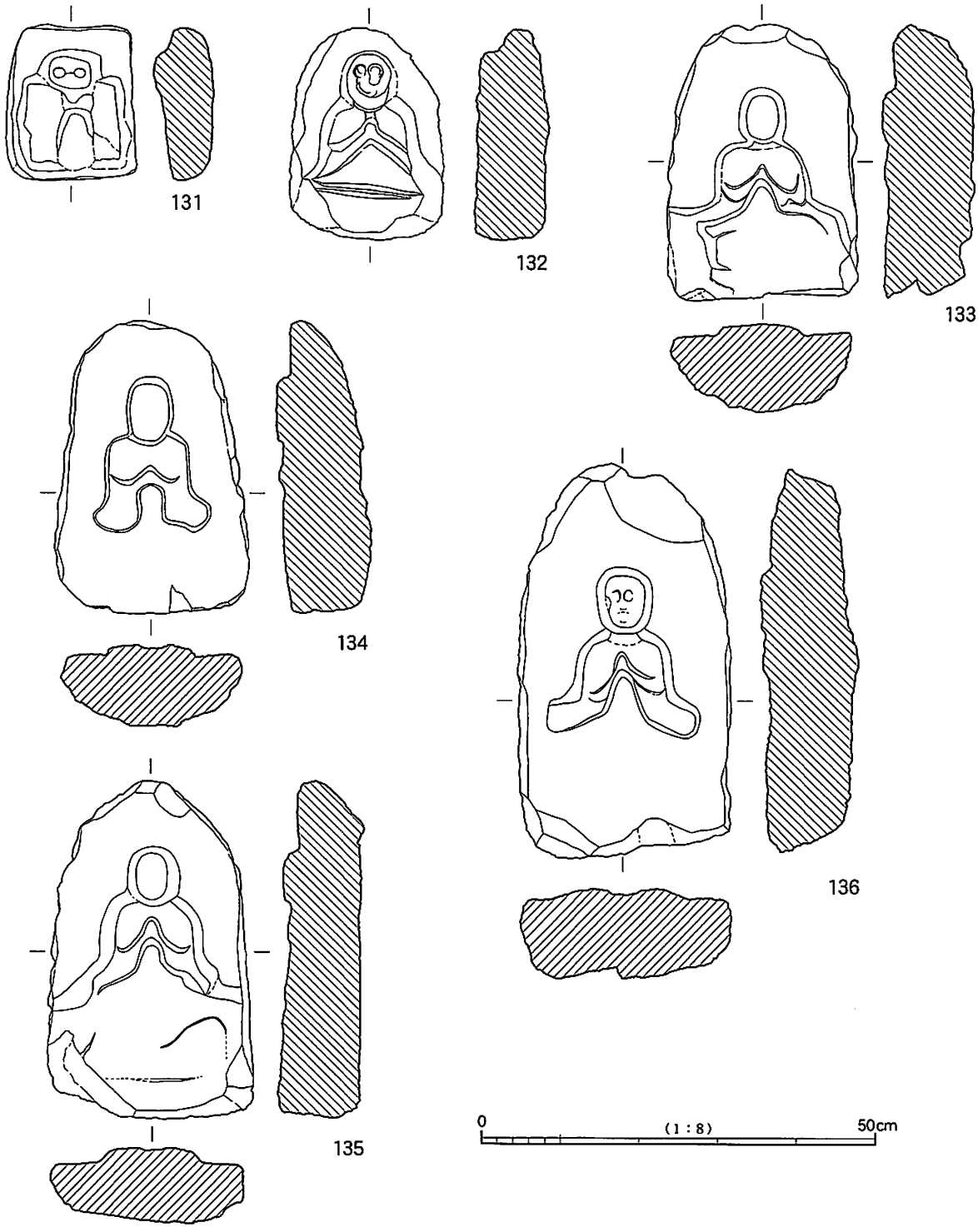


第34図　出土遺物実測図（19）（1：4）鬼瓦

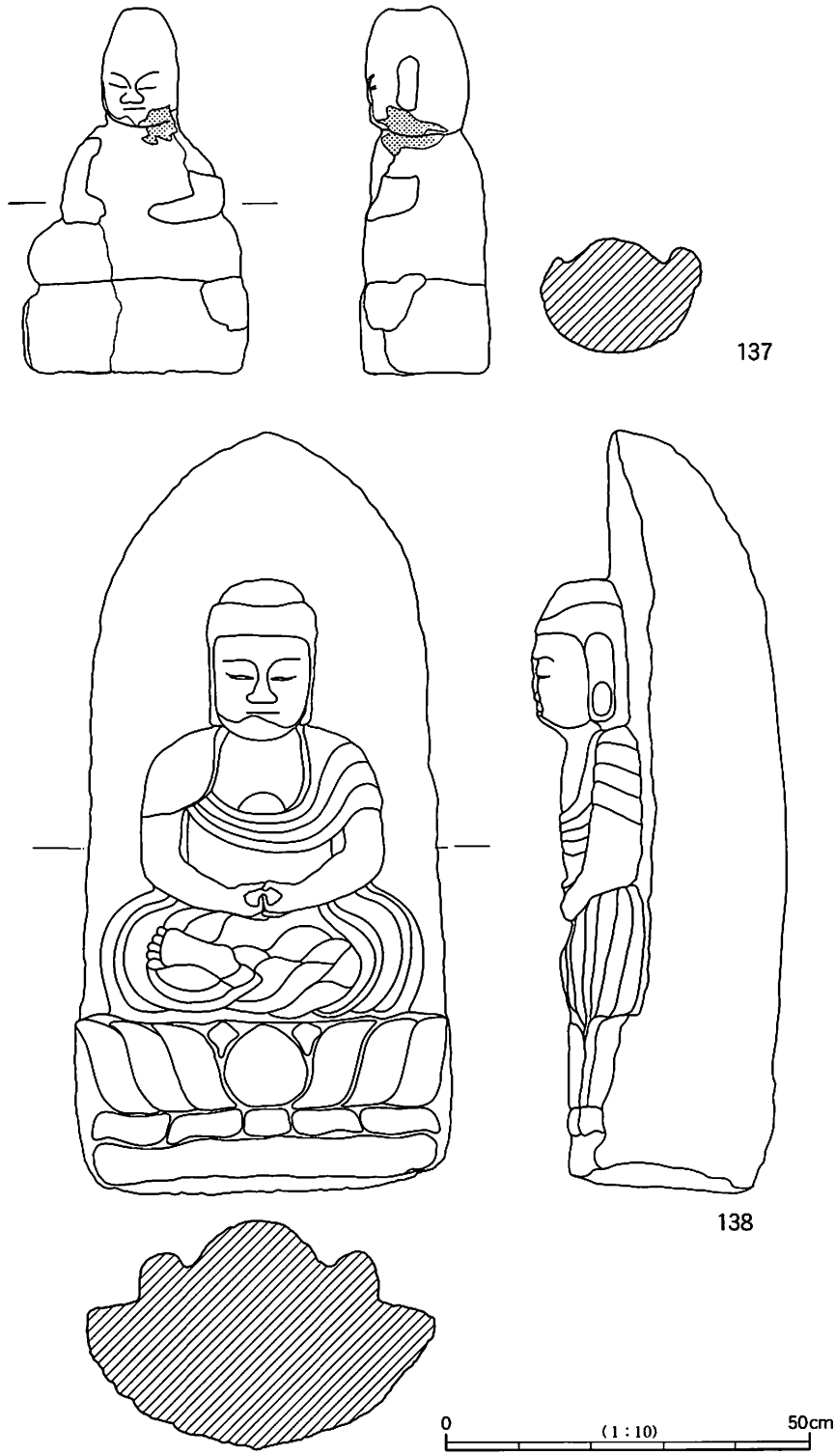
凹面全体に斜め方向の粗いハケ目が密になされている。両側辺沿いには幅1.3 ～ 1.5cmの縦方向の強いナデが施されており，側辺際はすこし凹み加減である。薄く窄まる前端側 3cmほどは横方向のケズリがなされている。凸面は幅 1cmほどの単位の縦方向のナデがなされ，単位間はゆるやかな稜をなし，表面は光沢を帯びている。玉縁寄りの凸面には後出する横方向の細かな仕上げナデがみられる。玉縁部凸面は縦方向のケズリで，凹面は布目痕主体でハケ目はあまりみられない。

鬼瓦125 ～ 130　珠文帯の破片 4 点と角片 1 点，不明品 1 点である。珠文帯片は下段の基壇状遺構 f 付近ほかから，角と不明品は中段からの出土である。珠文帯片は向って左側の珠文帯125・126 と右側の珠文帯127・128各 2 点である。これらは厚さ 3.1 ～ 3.4cmである。125 ～127 の 3 点は直径 2cm程度の半球 1 ～ 3 個を両側辺・下端の二～三辺の直線的な断面V字形やU字形の刻線が囲むが，128 は幅 2mm，深さ 3mmほどの刻線で囲んだ直径2.5cmほどの平板なものである。

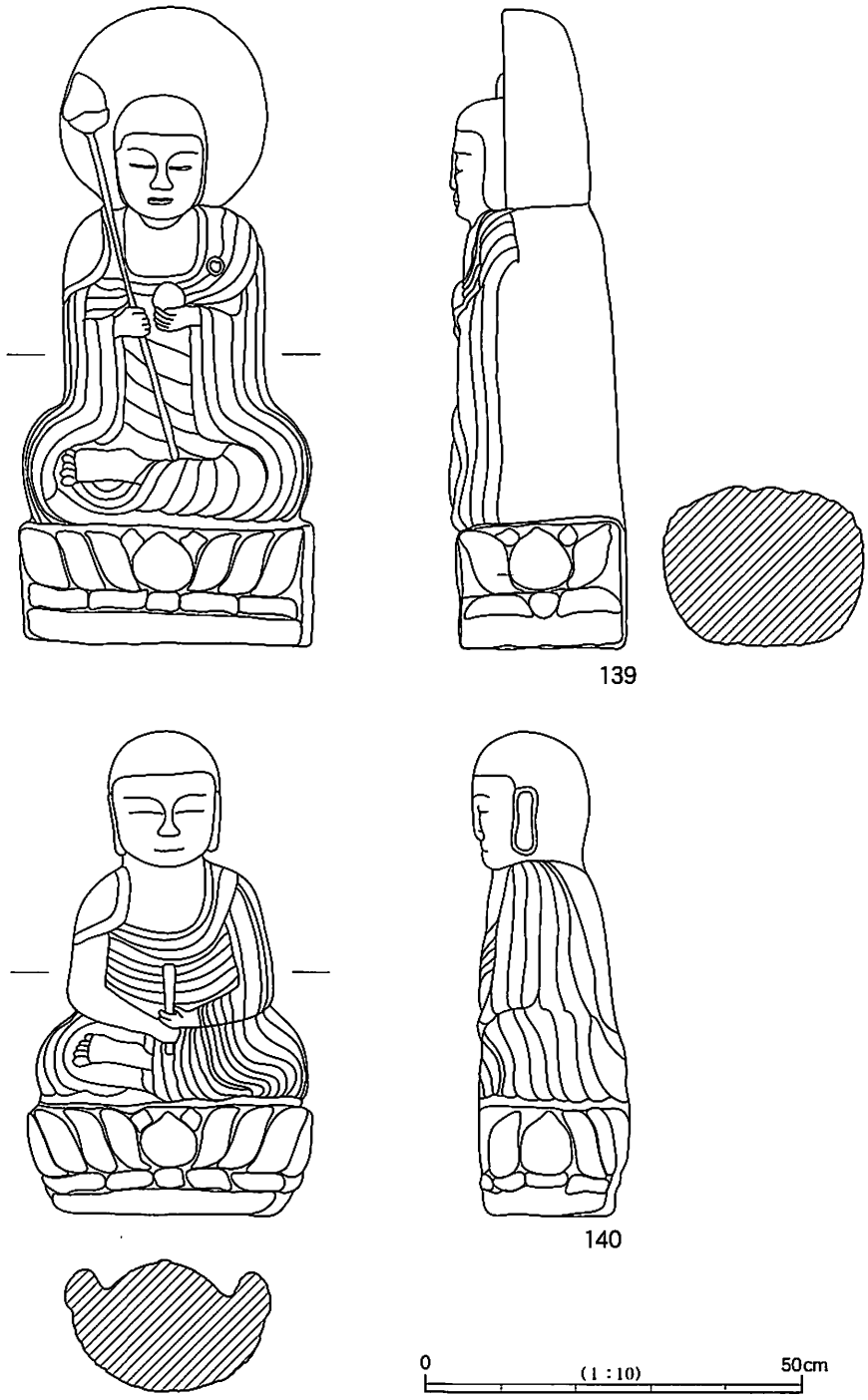
③石仏（第35 ～ 37図131 ～ 140，図版16）　石仏は計10体出土した。最も小型の石仏131は，唯一中段中央のC群の五輪塔部材群付近で出土した。乳白色の細粒結晶質石灰岩製で，20cm×16.5cm，厚さ 7.6cmとほぼ長方形の板石の片面に高さ 15.5cm，幅14.5cmの像容を彫り出した光背形石仏である。強調されて高く削り出された頭部以外は像容はあまり明確ではない。この131以外の石仏 9 体（132 ～ 140）はいずれも地表面に露出していた。南調査区の石仏 5 体（132 ～ 136）は，高さ 27 ～ 49.9cm，幅19.6 ～ 27.1cm，厚さ 9.1 ～ 12.4cm，重さ 7.2 ～ 24.3kgの黒雲母花崗岩製である。いずれも平面形は上辺が丸みをもつか尖り気味の半円形で，両側辺と下辺は直線的な光背形石仏で，坐像を彫り出している。いずれも頭部を中心にした像容で，体部の様子はやや不鮮明である。頭部も顔の表情はあまりはっきりしない。像容の下辺は石仏の下辺から 1/3 ～ 1/4程度上方にあり，像容は石材のほぼ中央に刻み出されている。石仏の横断面形は像容を彫り出している表面はほぼ平坦で，背面側は丸く曲線を描く緩やかな半円形である。縦断面形は表面の像容側はほぼ平坦であるが，背面側は上端が下方に傾斜するほぼ直線的な 135・136 と上端が丸みをもち整美な舟形光背の側面観を示す 133・134 の二通りがある。石仏の下端面は 132・135 はほぼ平坦だが，133・134・136 は背面側に向けて上傾する。137 ～ 140の 4 体の石仏は中･下段の地表面に置かれていた石仏群で，原位置を移動している可能性が高い。137・138 は中段南端の谷に向って置かれていた石仏で，137 は立てられていたが，138 は仰向けに倒れ谷側に半ばずり落ちていた。137 は高さ 51cmと小型の石仏（坐像）で，首が折れてセメントによる修復がみられる。全体の残りはよくないが，顔の表情は比較的よく観察できる。頭部には烏帽子状のものを被り，胸部付近には笏状のものが確認できる。また，下部には台座状のものがみられる。138 は高さ 102cm，幅50cm，厚さ 31cmと 10体のなかでは最も大型の光背形石仏である。光背は上部が尖り気味の半円形で，側面観は舟形でやや前倒気味である。仏は蓮華



第 35 図　出土遺物実測図（20）（1：8）石仏①



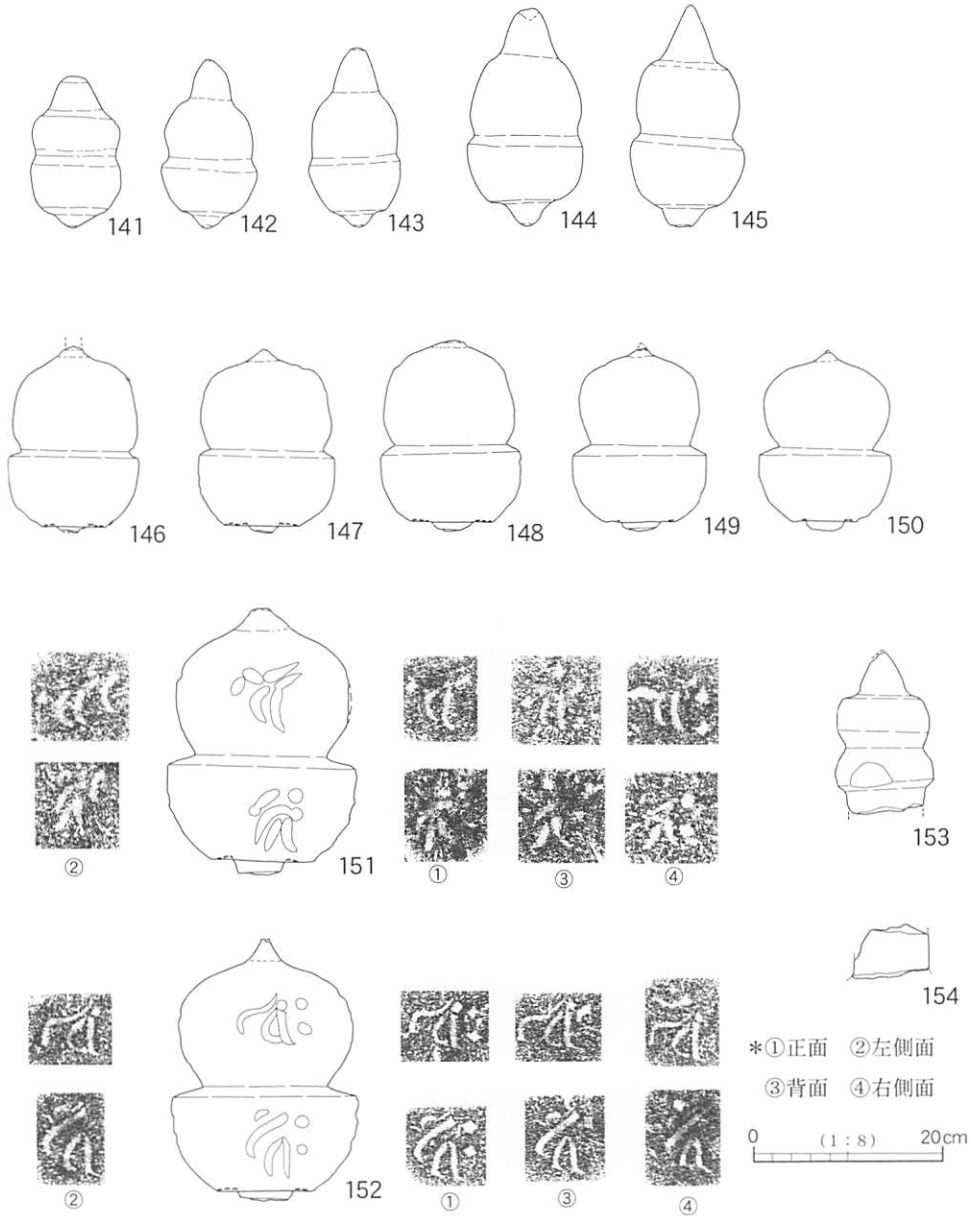
第36図　出土遺物実測図（21）（1：10）石仏②（アミ目はセメント修復箇所）



第 37 図　出土遺物実測図（22）（1：10）石仏③

座に坐し上品上生印の弥陀の定印を結ぶ阿弥陀如来坐像である。139・140の２体は下段南東端の縁辺に南側を向いて置かれていた石仏で，西側の139は高さ84㎝の地蔵菩薩坐像である。頭部背後に直径27㎝の円形の光背をもち，右手に錫杖，左手には宝珠を持つ。高さ15㎝ほどの長方形の蓮華座に坐す丸彫りの石仏である。139の東側の140は光背をもたない高さ64㎝の坐像で，蓮華座に坐している。手には笏状のものをもつ。137については明確でないが，ほかの３体の衲衣は偏袒右肩で，140は背面にも衣紋がみられる。

④五輪塔部材（第38～41図141～195，図版16～18）空風輪・火輪・水輪・地輪の４つの部材から成る五輪塔であるが，本遺跡からは４つの部材が原状のまま出土したものはない。また，



第38図　出土遺物実測図（23）（1：8）空風輪

原状を復元することも難しいので，ここでは各部材ごとに分析・記述することにする。出土した部材の数は計55点である。石材としては黒雲母花崗岩が多い（32点＝58%）が，乳白色の滑らかな結晶質石灰岩（こごめ石）製のものが小型品を中心に計23点あり，全体の４割強（42%）を占める。

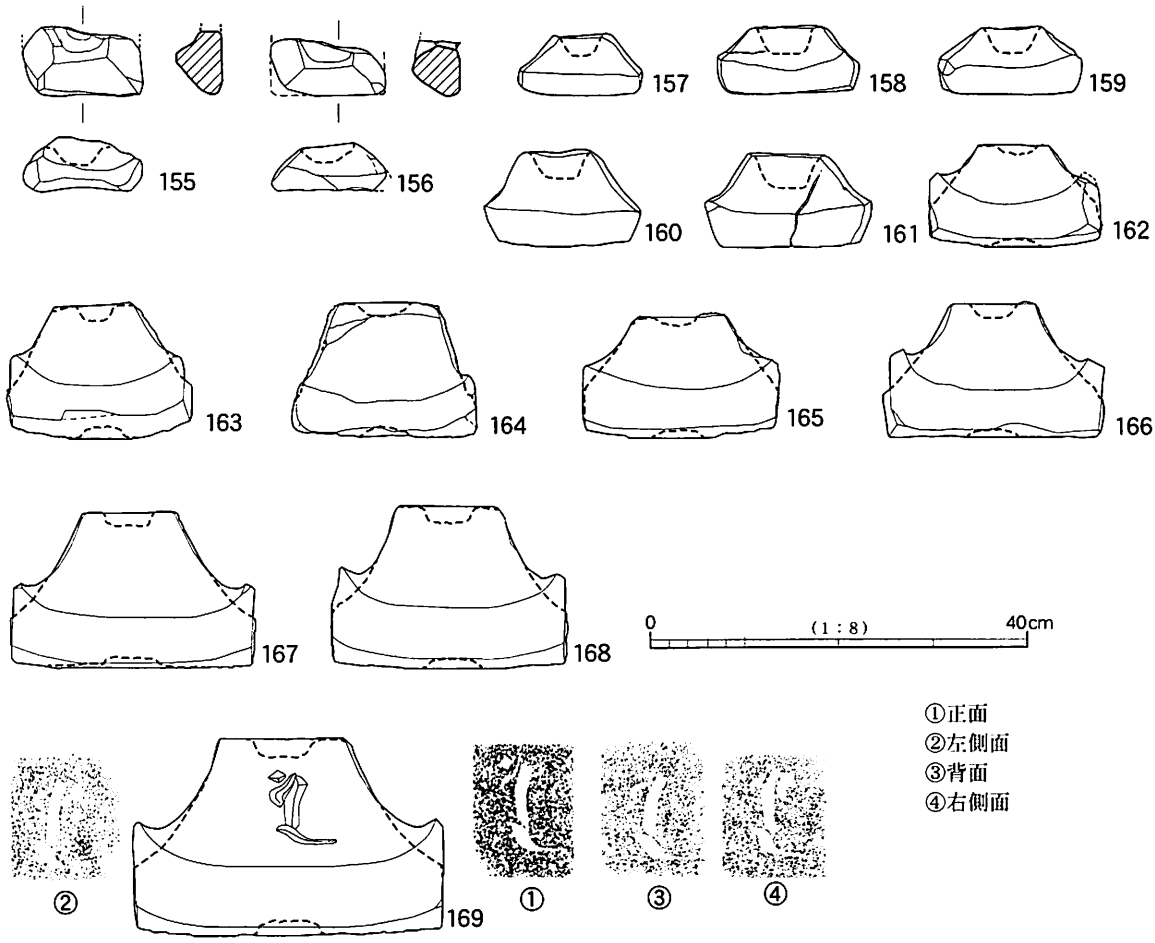
部材別の内訳は，空風輪13点（結晶質石灰岩製６点），火輪15点（結晶質石灰岩製７点），水輪19点（結晶質石灰岩製５点），地輪７点（結晶質石灰岩製５点）で，水輪の数が最も多く，地輪が最も少ない。水輪のうち９点は中段・下段中央の地表面に置かれていたもので，１点は東側調査区外に露出していたものであり，発掘調査によって地中から出土したものは９点にすぎない。このほかの部材で地表面に置かれていたものはないが，火輪164・166の２点は東側調査区外の崖下でみつかったものである。空風輪13点，火輪13点，水輪９点，地輪５点，その他（宝篋印塔の相輪片か）１点の計41点が地中から出土したものである。結晶質石灰岩製品23点はいずれも地中から出土したもので，各部材５～７点ずつあることから，その組み合わせは明らかでないものの，結晶質石灰岩製の小型五輪塔数基が調査区内に存在していた可能性は高い。

発掘調査によって地中から出土した五輪塔部材41点の出土位置は中段29点，下段12点である。中段では大半が中央～北東側にかけての上方斜面と基壇状遺構ｂ～ｅとの間の幅３～４ｍの空間の４か所にまとまって出土した（五輪塔部材群Ａ～Ｄ群＝26点）。このほか５点の部材は，基壇状遺構ｂ東隅（地輪189），同ｃ内部（空風輪151，相輪片か154），同ｅ北東辺（火輪162，水輪176）で出土した。下段では瓦溜直上で５点（空風輪145，火輪160・161，地輪191・192，いずれも結晶質石灰岩製），基壇状遺構ｆ中央石組内西隅で水輪171・173，北東辺で水輪174，南石列西隅で火輪159，北石列北西隅内で空風輪149・150，北西外で空風輪か153が出土している。中央石組・南石列から出土した４点はいずれも結晶質石灰岩製で，北石列北西外出土の153もその可能性がある。すなわち，下段出土の五輪塔部材12点のうち９～10点が結晶質石灰岩製である。

ａ．**空風輪141～153**　計13点あり，中段の五輪塔部材群Ａ～Ｄ群から各２点（141～144・146～148・152），基壇状遺構ｃから１点（151），下段の瓦溜直上から１点（145），基壇状遺構ｆ北石列の北隅付近で２点（149・150），北西外から１点（153）出土している。これら13点はその形態や法量から大きく３つに分類される。結晶質石灰岩製の５点（Ⅰ類；141～145）は空輪の上方突起が鋭く長大なもので，空輪の丸みは弱い。風輪は椀形で，空輪と風輪の間の括れは弱い（括れ径／空輪最大径＝0.89～0.97，括れ径／風輪最大径＝0.81～0.94）。風輪下端のほぞは突出が高く大きい。風輪上端面は大きく上方に傾斜しており，その角度は48～77°とかなり急である。146～150（Ⅱ類）と151・152（Ⅲ類）は法量に大小はあるが，形態的にはよく似ている。Ⅱ・Ⅲ類はⅠ類に比べると丸みのある空輪と椀形の風輪の組み合わせである。空輪の上方突起の突出はそれほど強くなく，風輪下端のほぞも比較的低い。空輪と風輪の間

の括れはそれほど強くないが，Ⅰ類に比べると強い（括れ径／空輪最大径＝Ⅱ類；0.75 ～ 0.87，Ⅲ類；0.71 ～ 0.75，括れ径／風輪最大径＝Ⅱ類；0.71 ～ 0.83，Ⅲ類；0.66 ～ 0.69）。Ⅰ類と大きく違うのは風輪上端面の上方への傾斜角度で，Ⅱ類が 19 ～ 34°，Ⅲ類が 15 ～ 20° とかなり水平に近い。法量的にはⅠ類が高さ 15.7 ～ 23.1cm＋α，空輪径9.1 ～ 11.7cm，風輪径9.4 ～ 12.3cm，Ⅱ類が高さ 19.2 ～ 19.9cm＋α，空輪径12.7 ～ 13.9cm，風輪径13.8 ～ 14.8cm，Ⅲ類は高さ 27.3cm＋α～ 27.8cm＋α，空輪径18.4 ～ 18.5cm，風輪径19.8 ～ 20.1cmである。最大規模のⅢ類の空風輪には空輪・風輪のそれぞれ 4 面に梵字が刻されている。なお，153 は空風輪の形状を示し，法量的には結晶質石灰岩製のⅠ類に近いが，形態的に異なるところもみられる。即ち，空輪上方突起が太く大きい。空輪の高さが低くやや角張った扁球状である。風輪も高さが低く強い扁球状を呈する。そして何より風輪下端のほぞが大きくしかも折れていることから，一石五輪塔の空風輪部の可能性も考えられる。現存の高さ 17.0cmである。

b．**火輪155 ～ 169**　計15点で，発掘調査で出土したのは調査区外出土の 164・166 を除いた 13点である。中段の五輪塔部材群A～D群から各 1 ～ 4 点の計 9 点（155 ～ 158・163・165・167 ～ 169），基壇状遺構 e 北東辺から 1 点（162）が出土した。下段では瓦溜直上から 2 点



第 39 図　出土遺物実測図（24）（1：8）火輪

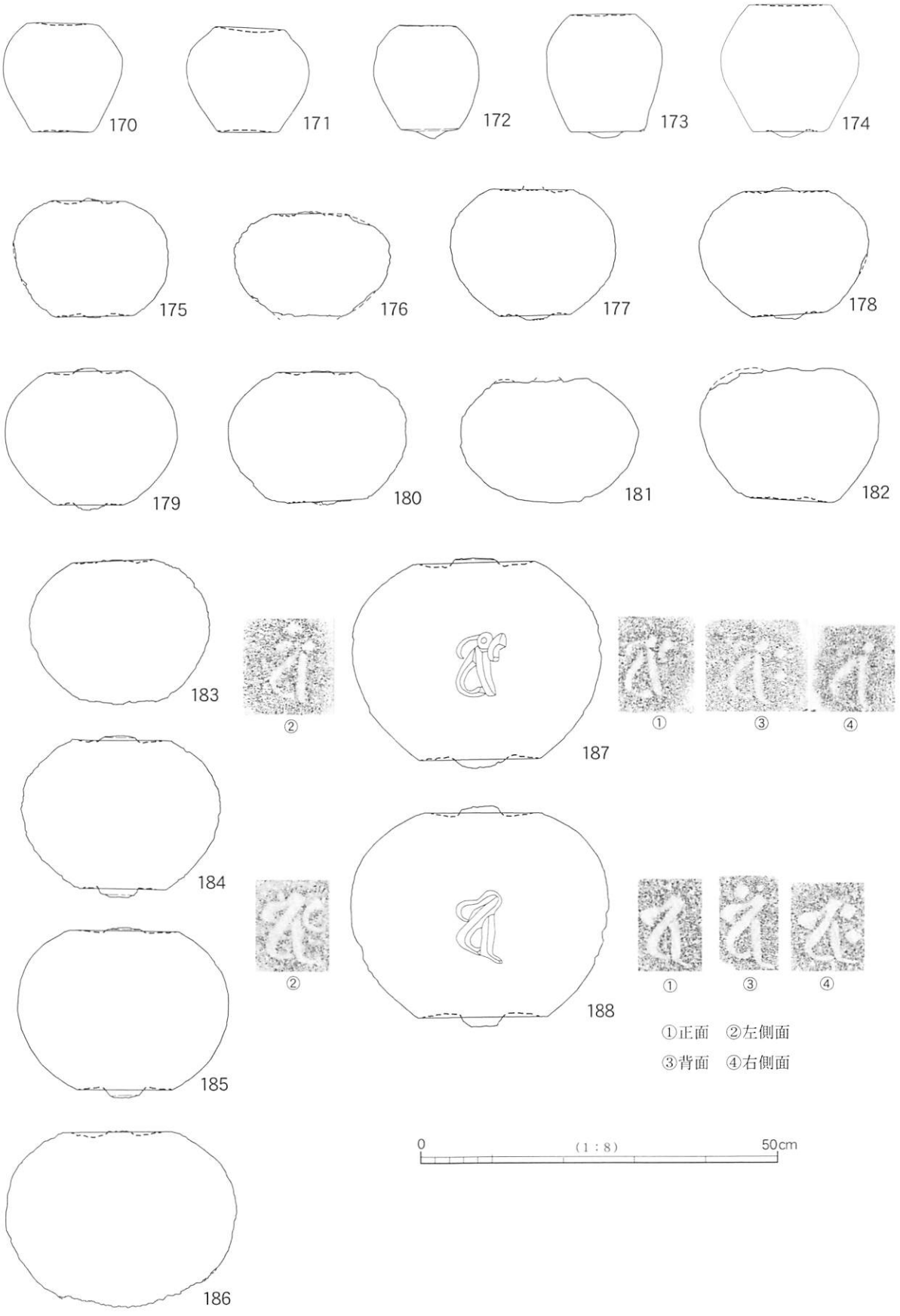
(160・161)，基壇状遺構 f の南石列西隅付近から 1 点 (159) 出土した。結晶質石灰岩製の火輪はいずれも小型品の 155 ～ 161 の 7 点で，高さ 6.4 ～ 10.2cm，軒下面幅13.0 ～ 17.5cmである。ほかの中・大型品はいずれも黒雲母花崗岩製で，高さ 10.8 ～ 20.7cm，軒下面幅17.6 ～ 32.7cmである。計15点の平均値は高さ 12.4cm，軒下面幅20.0cmである。

火輪15点全体で注意されるのは小型の結晶質石灰岩製品の低平さと中型品でみられる軒下面幅に対する高さの度合いが大きいことである。そこで，高さ（全高）／軒下面幅の比率をだしてみると，0.46 ～ 0.75 (平均0.61) となる。この数値が小さいほど火輪は低平になり，大きいほど高くなる。155 ～ 161 の結晶質石灰岩製の火輪の高さ／軒下面幅の数値は 0.46 ～ 0.62 (平均0.52)，黒雲母花崗岩製の 162 ～ 169 は 0.61 ～ 0.75 (平均0.66) となり，数値的に裏付けられる。次に，軒の反りについてみてみると，軒上面は結晶質石灰岩製の 156・157・159・160 はほぼ水平であるが，他の 11 点については高さ 1.3 ～ 5.0cm (平均3.1cm) の反りがみられる。反りの程度を全体の高さとの比率（軒上面の反り／高さ）でみてみると，0.11 ～ 0.30 (10例＝平均0.22) となり，かなり数値の高い反りであることが分かる。また，軒下面の反りの状況をみてみると，結晶質石灰岩製の 7 点 (155 ～ 161) 及び 164・166 の計 9 点と過半数の火輪の軒下面はほぼ平坦であり反りはみられない。その他の 6 点は高さ 0.9 ～ 2.6cm (平均1.8cm) の反りがあり，全高に対する比率は 0.08 ～ 0.15 (平均0.12) と比較的高い。軒口は垂直のもの 7 点 (157・162 ～ 165・168・169)，外傾するもの 7 点 (156・158 ～ 161・166・167)，不明 1 点 (155) である。外傾するものもその度合いは高さ 10cmあたり 1 cm以下とそれほど大きなものではない。屋根斜面のたるみの度合い（斜面凹みの深さ／屋根中央の斜面長）については，0.03 ～ 0.12 (平均0.07) で，長さ 10cm当たり深さ 7 mm程度とごく緩やかである。火輪は通常上下両面にほぞ穴があるが，結晶質石灰岩製のものは上面にはほぞ穴があるが，下面は平坦でほぞ穴は存在しない。

最大規模の 169 のみ，屋根斜面の 4 面に梵字を彫っている。

c．**水輪170 ～ 188**　五輪塔部材のなかでは最も多い 19点が出土している。このうち，発掘調査で地中から出土した 9 点は，中段ではA～D群から各 1 ～ 2 点の計 5 点 (170・172・175・178・185)，基壇状遺構 e 東隅で 1 点 (176) の計 6 点，下段では基壇状遺構 f の西隅内で 2 点 (171・173)，同じく北東辺で 1 点 (174) の計 3 点である。下段出土の 3 点と中段C・D群出土の各 1 点の計 5 点は結晶質石灰岩製である。なお，地表面と調査区外から出土した計10点の水輪はいずれも黒雲母花崗岩製である。

水輪については，その側面観（縦断面形）及び上面観（横断面形），ほぞの有無に着目して分析を行う。水輪全体では，高さ（ほぞを除く）14.9 ～ 28.6cm (平均19.1cm)，最大径14.7 ～ 36.2cm (平均24.2cm) の法量を示す。黒雲母花崗岩製の水輪14点は高さ／最大径＝0.73 ～ 0.79 (平均0.68) で，高さが最大径の数値の 7 割に満たないやや低平な球形で，最大径はほぼ中央付近［最大径部の高さ／全高＝0.51 ～ 0.58 (平均0.55)］にある。これに対して，結晶質石灰岩製の水輪 5 点は高さ／最大径＝0.87 ～ 1.01 (平均0.95) で，最大径と高さの数値がほぼ等し



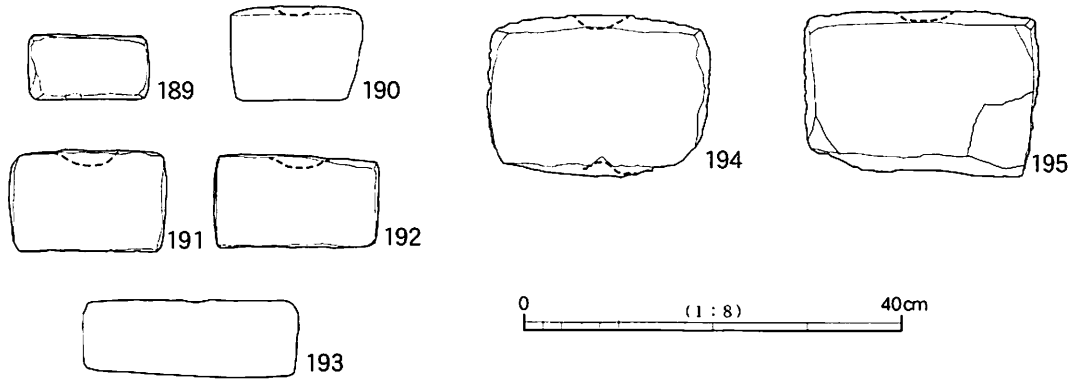
第40図　出土遺物実測図（25）（1：8）水輪

いが，最大径は中央より上方にある［最大径部の高さ／全高＝0.54 ～ 0.64（平均0.60）］。また，最大径と上面径･下面径を比べると，黒雲母花崗岩製の水輪は，上面径／最大径＝0.46 ～ 0.55（平均0.50），下面径／最大径＝0.41 ～ 0.51（平均0.46）と上面径・下面径が最大径の 1/2 かそれ以下であるのに対して，結晶質石灰岩製の水輪は上面径／最大径＝0.55 ～ 0.59（平均0.57），下面径／最大径＝0.51 ～ 0.65（平均0.55）と上面径・下面径が最大径の 6 割に近く，上下面がより広い。つまり，黒雲母花崗岩製の水輪に比べると結晶質石灰岩製の水輪は窄まり方がやや弱いといえる。これらのことから，黒雲母花崗岩製の水輪は整美な扁球状の側面観をみせるが，結晶質石灰岩製の水輪はやや肩が張って下面側に窄まる壺形の側面観を示すといえる。一方，上面観（横断面形）を比較してみると，黒雲母花崗岩製の水輪は通常の水輪と同じく上面観がほぼ正円形であるが，結晶質石灰岩製の水輪は 172・174 はほぼ円形であるものの，170 は横長の隅丸長方形，171・173 は不整楕円形と主体はいずれも正円形ではない不整形の上面観をみせている。以上のように，本遺跡出土の水輪は石材の違いが形態や法量などの差違に直接結び付いているといえる。

ほぞについては，黒雲母花崗岩製のものは上面・下面の両方にほぞをもっているが，結晶質石灰岩製の水輪は上・下面両方にほぞをもつものは皆無で，下面のみにほぞをもつもの（172・173・174）と上下面共にほぞがないもの（170・171）とに分かれる。また，石材を問わず上下面は 2 ～ 7 ㎜程度緩やかに凹むものが多く，172（上面）・173（下面）のみが平坦である。

d．**地輪189 ～ 195**　地輪の出土点数は計 7 点と最も少ない。出土地点は，中段のA・B・D群から各 1 ～ 2 点の計 4 点（190・193 ～ 195），基壇状遺構 b の東隅から 1 点（189），下段では瓦溜直上から 2 点（191・192）出土している。結晶質石灰岩製の小型品 5 点（189 ～ 193）と黒雲母花崗岩製の中型品 2 点（194・195）から成る。なお，前者の 193 は幅23.0㎝，高さ 8.1㎝とほかのものと比べると扁平な割に大型であることから地輪とするよりも石仏等の台座に使用された可能性が高く，以下の分析では省くことにする。

法量は高さ 6.9 ～ 17.3㎝（平均11.9㎝），幅12.7 ～ 24.7㎝（平均18.1㎝）である。小型品の 189 ～ 192 の 4 点は高さ 6.9 ～ 10.7㎝（平均9.3㎝），幅12.7 ～ 17.5㎝（平均15.1㎝），中型



第 41 図　出土遺物実測図（26）（1：8）地輪

品の２点は高さ 17.0 ～ 17.3㎝（平均17.2㎝），幅23.5 ～ 24.7㎝（平均24.1㎝）である。結晶質石灰岩製の５点については明確でないが，中型の黒雲母花崗岩製の２点については，下面及び４つの側面の下端周辺は未加工・未調整で，下面は凹凸が顕著である。このことから，この部材下端周辺の未加工部分は土中に埋められていた部分と考えられる。よって，地上に露出していた部材の割合（露出率＝露出部分の高さ／全高）と露出部分の高さ（加工面の高さ）と幅の比率（扁平率）を求めてみる。194 は全高17㎝，加工面の高さ 8.5 ～ 14㎝，最大幅23.5㎝で，露出率0.5 ～ 0.82，扁平率0.36 ～ 0.6 である。195 は全高17.3㎝，加工面の高さ 14 ～ 16㎝，最大幅24.7㎝であることから，露出率0.81 ～ 0.92，扁平率0.57 ～ 0.65 である。これらの露出率の数値から，少なくとも 194・195 の地輪を構成部材に含む五輪塔は全高の１～２割が土中に埋まった状態で造立されていたことが分かる。

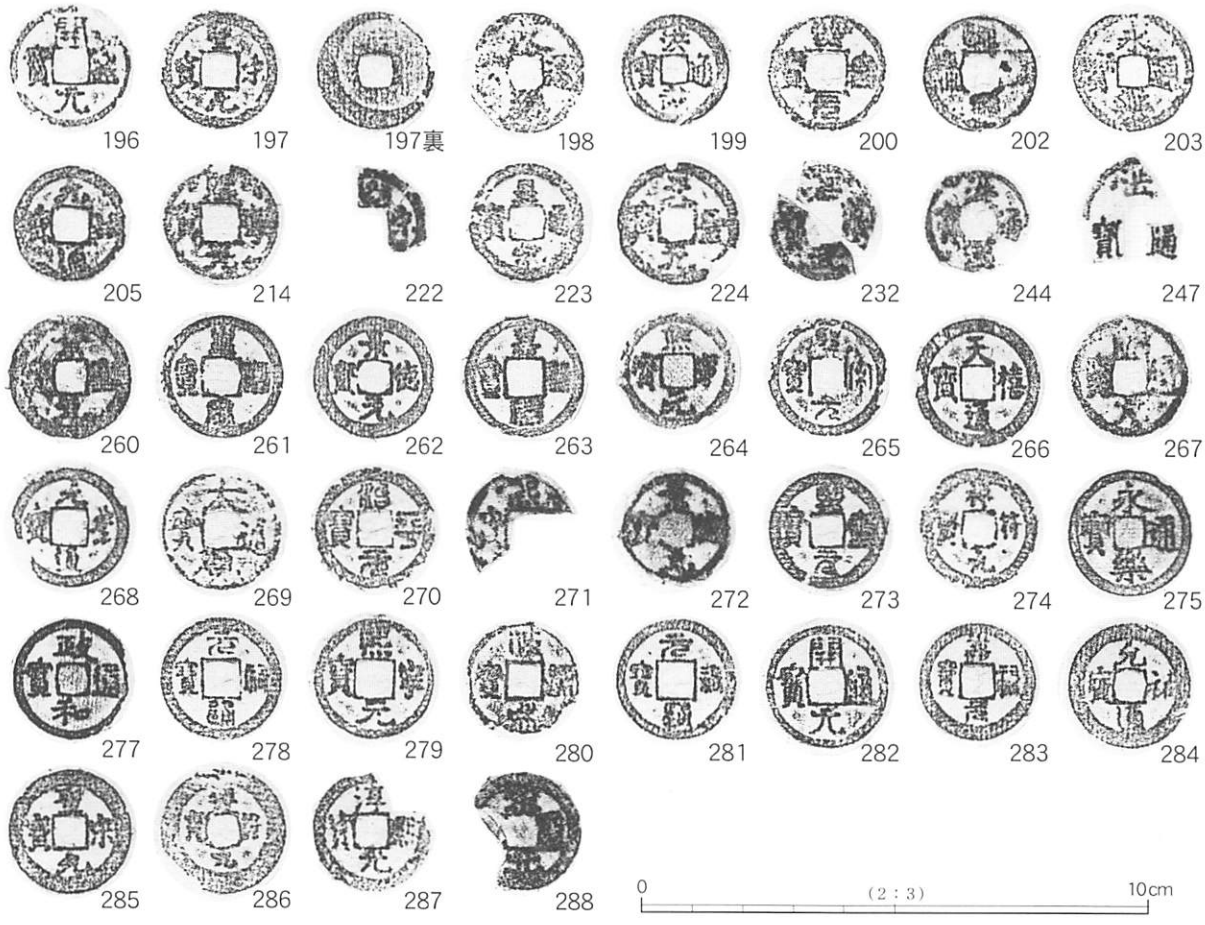
189・193 の２点以外は上面中央にほぞ穴があけられている。中型品の２点の上面は平坦ではなく，上面中央にかけて最大1.5㎝程度高くなっている。

⑤古銭（第42図196 ～ 288，第３・４表，図版18・19）　調査区からは計93枚の古銭が出土している。これは形がある程度把握できるものの数で，実際にはもう少し増えるものと思われる。銭銘が判読できて銭種を特定できるもの（Ａ - １類）は49枚で，唐銭１種３枚，北宋銭16種34枚（書体が異なるものは銭銘が同じであれば１種とする），南宋銭１種１枚，明銭２種11枚と北宋銭がＡ－１類の古銭の大半を占める。銭種の内訳は，唐銭が621年初鋳の開元通寶，北宋銭16種は最も古い960年初鋳の宋通元寶以後，景徳元寶，祥符元寶，天禧通寶，天聖元寶，明道元寶，皇宋通寶，嘉祐通寶，治平元寶，熙寧元寶，元豊通寶，元祐通寶，元符通寶，聖宋元寶，大観通寶，そして1111年初鋳の政和通寶が最も新しい。皇宋通寶・熙寧元寶・元豊通寶・元祐通寶・政和通寶の５銭種では書体が異なるものがそれぞれ２種ずつみられるが（Ａ；真書体，Ｂ；篆書体），同一書体のものに限れば，１銭種あたり１～４枚（熙寧元寶Ａが４枚，熙寧元寶Ｂ・聖宋元寶Ａが各３枚以外は１～２枚）の出土にとどまる。南宋銭は1174年初鋳の淳熙元寶１枚のみである。明銭２種は1368年初鋳の洪武通寶（８枚）と1408年初鋳の永楽通寶（３枚）で，１銭種あたりの出土枚数３～８枚は大半が１～２枚の唐銭や北宋銭に較べて多い。このほか銭種を特定できないものの明らかに銭銘をもつもの（Ａ - ２類）９枚，銭銘の存否はわからないものの表裏に輪（縁）や郭の存在が認められ，古銭（硬貨・金属貨幣）の体を成すもの（Ｂ類）15枚で，そのほかは銭銘及び輪（縁）・郭のいずれの存在も認めることができなかったものの銭形（円形）を成すもの（Ｃ類）19枚である。このＣ類はいわゆる無文銭の可能性が考えられる。

これら北宋銭を主体とする古銭は，中段で80枚，下段で13枚と大半が中段で出土した。これらの古銭の出土位置と銭種構成には大きく２つの特徴がみられる。先ず，中段と下段との比較であるが，出土量では古銭は86％が中段から出土している。中段で出土した古銭には明銭とＣ類の無文銭の可能性のあるものが含まれるが，下段では13枚のうち11枚が基壇状遺構ｆの中央石組の南西辺中央で一括して出土したもので，明銭やＣ類の出土はなく，唐銭・北宋銭に南

宋銭・鉄銭各１枚が含まれる。南宋銭・鉄銭は中段では出土していない。中段出土の古銭の大半は基壇状遺構ａからの出土で，石積内と土坑内から各32枚ずつ計64枚（68.8％）が出土している。なお，銭種が特定できるＡ－１類は中・下段両方から出土しているが，Ａ－２類・Ｂ類・Ｃ類は中段の基壇状遺構ａからだけ出土し，中段のほかの箇所や下段からの出土はない。同じ基壇状遺構ａ出土の古銭でも，石積内出土の古銭と土坑内出土の古銭とでは銭種構成に違いがみられる。石積内では鍋26内一括出土古銭（198 ～ 209）など計32枚の古銭が出土したが，唐銭１枚，北宋銭７種９枚，明銭２種３枚のＡ－１類10種13枚をはじめ，Ａ－２類６枚，Ｂ類９枚，Ｃ類４枚と各種の古銭が出土している。これに対して，土坑内からは北宋銭は天禧通寶（241）１枚のみで，明銭は洪武通寶の１種７枚，Ａ－２類３枚，Ｂ類６枚のほか，Ｃ類が15枚（78.9％）出土している。つまり，基壇状遺構ａの土坑からは明銭の洪武通寶と無文銭の可能性のあるＣ類が集中的に出土し，北宋銭の出土は皆無に近い。同じ明銭でも，洪武通寶は７枚／８枚（87.5％）と大半が土坑内から出土している。永楽通寶は石積内からは２枚出土しているのに対し，土坑内からはまったく出土していない，という明確な差違がみられる。

ここで，これら93枚の古銭の法量（外径・重さ）の面から分析を試みる。なお，「外径」は古銭外縁の直径で，銭径ともいう。まず，銭種が特定できるＡ－１類（唐銭・北宋銭・南宋銭・明



第42図　出土遺物拓影（２：３）古銭

銭の計20種49枚）は，**外径**（計測数47点）が2.1～2.55㎝，平均2.36㎝で，**重さ**（計測数30点）は1.02～4.12ｇ，平均2.54ｇである。Ａ－１類のなかで明銭の洪武通寶は外径（計測数６点）2.11～2.2㎝，平均2.16㎝，重さ（計測数２点）1.02～3.79ｇと重さについては計測数が少なく，また数値のばらつきが大きく比較できないが，銭径については明らかにほかのＡ－１類の銭貨に比べて小さいといえる。同じ明銭でも永楽通寶は出土点数が少ないものの，外径（計測数３点）2.40～2.52㎝，平均2.44㎝，重さ（計測数２点）2.47～2.88ｇ，平均2.68ｇと他のＡ－１類の古銭に比べてむしろやや大きいといえる。因みに，洪武通寶８点を除いてＡ－１類の法量を計算してみると，外径（計測数41点）2.1～2.55㎝，平均2.39㎝で，重さ（計測数28点）は1.54～4.12ｇ，平均2.55ｇと大きな違いはでてこない。しかし，本遺跡出土の洪武通寶８点が小型であることは明らかであり，模鋳銭の可能性がある。また，北宋銭の天禧通寶241は外径2.1㎝と洪武通寶並みに外径が小さく，模鋳銭の可能性を残す。次に，銭銘が読めず銭種を特定できないＡ－２類の法量についてみてみると，外径（計測数７点）2.01～2.34㎝，平均2.21㎝，重さ（計測数５点）1.41～2.5ｇ，平均1.88ｇである。銭銘の存否は不明だが，輪（縁）や郭が存在し，銭貨の体をなすＢ類は，外径（計測数７点）2.0～2.7㎝，平均2.18㎝で，重さ（計測数４点）1.13～2.04ｇ，平均1.63ｇである。そして，無文銭の可能性が考えられるＣ類の法量は，外径（計測数12点）1.85～2.23㎝，平均2.09㎝，重さ（計測数９点）0.72～1.95ｇ，平均1.28ｇである。このように，洪武通寶を除いたＡ－１類の銭貨の法量の平均値が外径2.39㎝，重さ2.55ｇであるのに対して，洪武通寶・Ａ－２類・Ｂ類・Ｃ類の法量の平均値は，外径2.09～2.21㎝，重さ1.28～1.88ｇと似通った数値を示しており，外径で0.18～0.3㎝，重さで0.67～1.27ｇの違いがみられるのである。即ち，Ａ－１類（洪武通寶以外の）に比べて，Ａ－２類・Ｂ類・Ｃ類の古銭はいずれも外径・重さの数値が小さい，即ち外径が小さく，重さも軽いことが指摘できる。

⑥鉄製品（第43図289～308，図版20）　短刀・刀子各１点と鉄釘18点がある。中段では基壇状遺構ａを中心に刀子（289）と鉄釘11点（290～300）が出土しており，下段からは基壇状遺構ｆと瓦溜などから短刀（301）と鉄釘７点（302～308）が出土した。

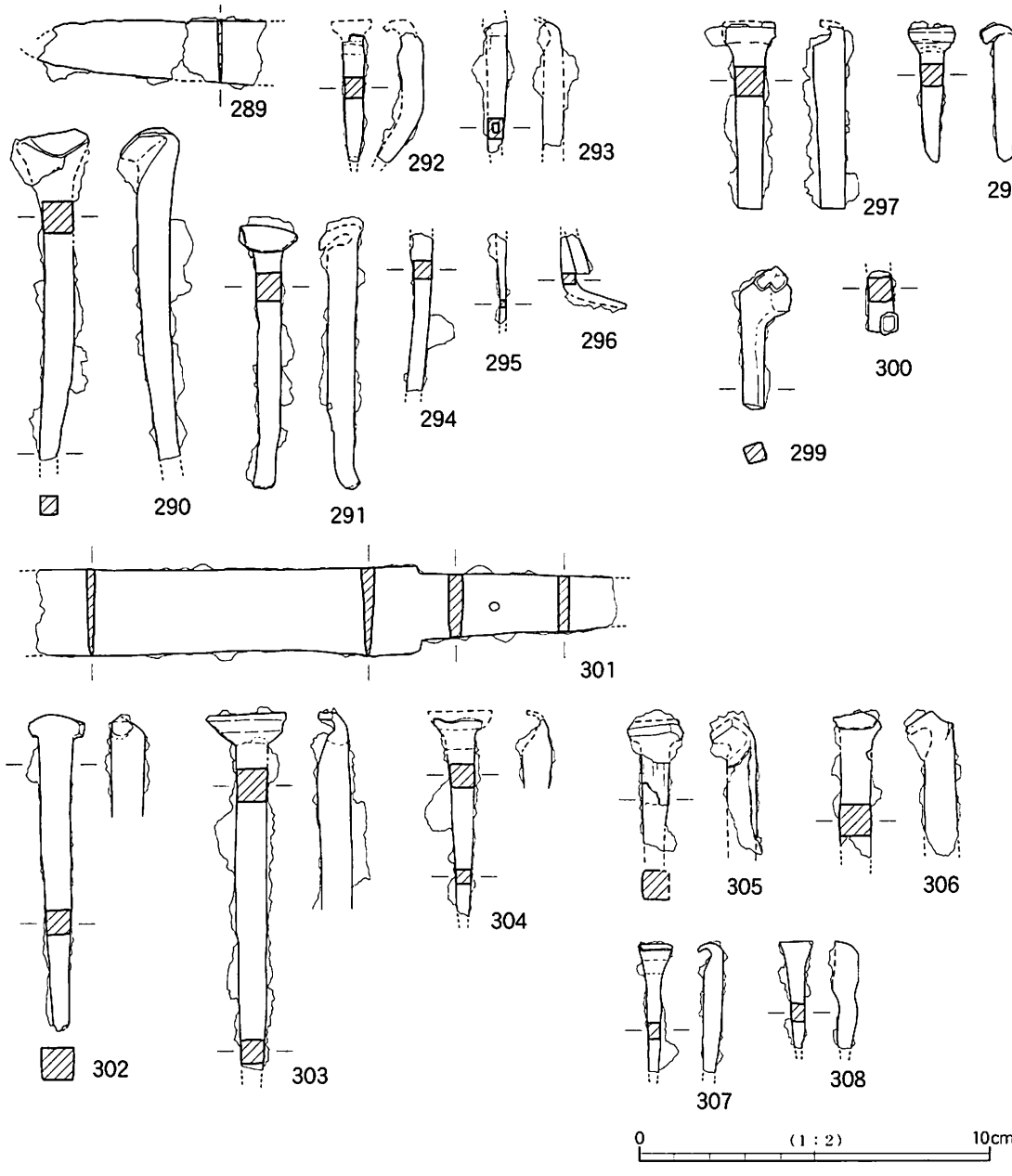
短刀は基壇状遺構ｆ中央石組の北東辺と北西辺が合わさる北隅内部で出土した。切先側を欠失しており，現存規模は全長16.6㎝，刃部幅2.4㎝，背部厚0.4㎝，茎部長5.6㎝で，両関（角関）である。茎部には径２㎜ほどの目釘孔が空いている。**刀子**は基壇状遺構ａ東辺中央の鍋26北東側の石積上面で出土した。刃部の破片で，切先と茎部は失っている。現存規模は刃部長6.4㎝，刃部幅1.8㎝，背部厚0.15㎝である。**鉄釘**は中・下段から計18点出土している。中段では南西半にある基壇状遺構ａ周辺（290～293）と基壇状遺構ａ石積内（294～296）から主に出土しており，そのほか基壇状遺構ｄ・ｅ周辺（298），基壇状遺構ｂ周辺（299・300），南西半（297）から出土している。下段では瓦溜（303・305・306），基壇状遺構ｆ周辺（302・304・307・308）から出土した。大半が頭部を留め，いずれも折頭形と考えられる。全長が窺えるものは少ないが，全長数㎝の小型のもの（292・293・297・298・304・307・308）と全長７～10㎝

程度の大型のもの（290・291・302・303）とがある。305・306は頭部片だが頭部や身部の幅や厚さから大型品の可能性が高い。基壇状遺構aの石積内出土の294～296はいずれも小型品であろう。297は頭部や身部の幅・厚さが比較的大きいが，その割に短く下端部が角張っていることから，鉄釘以外の用途が考えられる。この鉄釘の大小は用途を反映していると思われるが，具体的には分からない。ただ，前述したように，瓦片のなかには釘孔をもつものが少なからずみられたことから，瓦釘の用途を果たしたものもあると考えられる。

註

（1）山崎信二「第2章　近世瓦におけるコビキB（鉄線切り）出現の年代」独立行政法人　国立文化財機構奈良文化財研究所『近世瓦の研究』 2008年，14～26頁。

（2）山崎信二「Ⅲ　中世瓦の研究方法」奈良国立文化財研究所『中世瓦の研究』 2000年，27～28頁。



第43図　出土遺物実測図（27）（1：2）鉄製品

第３表　　出土位置別古銭一覧

（１）全体

<table>
<tr><th rowspan="4">類型</th><th rowspan="4">王朝</th><th rowspan="4">計</th><th colspan="3">中段</th><th colspan="2" rowspan="3">下段</th></tr>
<tr><th colspan="2">基壇状遺構ａ</th><th rowspan="3">その他</th></tr>
<tr><th>石積</th><th>石積下土坑</th></tr>
<tr><th>石積内</th><th>土坑内</th><th>基壇状遺構ｆ
南石列一括</th><th>その他</th></tr>
<tr><td rowspan="4">Ａ－１類</td><td>唐</td><td>１種・３枚</td><td>１枚</td><td></td><td>１枚</td><td>１枚</td><td></td></tr>
<tr><td>北宋</td><td>16 種・34 枚</td><td>７種・９枚</td><td>１枚</td><td>10 種・14 枚</td><td>６種・９枚</td><td>１枚</td></tr>
<tr><td>南宋</td><td>１種・１枚</td><td></td><td></td><td></td><td>１枚</td><td></td></tr>
<tr><td>明</td><td>２種・11 枚</td><td>２種・３枚</td><td>１種・７枚</td><td>１枚</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">Ａ-２類</td><td>９枚</td><td>６枚</td><td>３枚</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">Ｂ類</td><td>15 枚</td><td>９枚</td><td>６枚</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">Ｃ類</td><td>19 枚</td><td>４枚</td><td>15 枚</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">その他</td><td>１枚</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>１枚</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="4">計</td><td rowspan="4">93 枚</td><td>32 枚</td><td>32 枚</td><td>16 枚</td><td>11 枚</td><td>２枚</td></tr>
<tr><td>34.40%</td><td>34.40%</td><td>17.20%</td><td>11.80%</td><td>2.20%</td></tr>
<tr><td colspan="3">80 枚</td><td colspan="2">13 枚</td></tr>
<tr><td colspan="3">86.00%</td><td colspan="2">14.00%</td></tr>
</table>

（2）詳細

類型	銭種	王朝	初鋳年	中段						下段	
				基壇状遺構 a					その他		
				石積			石積下土坑				
				石積内	鍋 26 内一括	石積下面	土坑内	擂鉢 25 下面		基壇状遺構 f 南石列一括	その他
A - 1 類	開元通寶	唐	621 年	196					267	282	
	宋通元寶	北宋	960 年						260		288
	景徳元寶	北宋	1004 年						262,272		
	祥符元寶 A	北宋	1008 年						274	286	
	天禧通寶	北宋	1017 年				241		266		
	天聖元寶 A	北宋	1023 年			224					
	明道元寶 B	北宋	1032 年		202						
	皇宋通寶 A	北宋	1039 年			223					
	皇宋通寶 B	北宋	1039 年						261		
	嘉祐通寶 B	北宋	1056 年						263	283	
	治平元寶 B	北宋	1064 年						270		
	熙寧元寶 A	北宋	1068 年	214					264,271	279	
	熙寧元寶 B	北宋	1068 年		200				265,273		
	元豊通寶 A	北宋	1078 年						268		
	元豊通寶 B	北宋	1078 年		208						
	元祐通寶 A	北宋	1086 年							284	
	元祐通寶 B	北宋	1086 年							278,281	
	元符通寶 A	北宋	1098 年		205						
	聖宋元寶 A	北宋	1101 年	197		222				285	
	大観通寶 A	北宋	1107 年						269		
	政和通寶 A	北宋	1111 年							277	
	政和通寶 B	北宋	1111 年							280	
	淳熙元寶 A	南宋	1174 年							287	

類型	銭種	王朝	初鋳年	中段						下段	
				基壇状遺構 a					その他		
				石積			石積下土坑				
				石積内	鍋 26 内 一括	石積下面	土坑内	擂鉢 25 下面		基壇状遺構 f 南石列一括	その他
A - 1 類	洪武通寶	明	1368 年		199		232,236,244, 245,247,249	259			
	永楽通寶	明	1408 年		198,203				275		
A -2 類				217	201,204, 206,207	226	237,246,251				
B類				215,216	209	218 ～ 221, 225,227	242,250, 252 ～ 254	255			
C類				210 ～ 213			228～231,233～235, 238 ～ 240,243,248	256 ～ 258			
その他											276（鉄銭）

第４表　出土遺物一覧表

（１）土器

報告No.	器種①	器種②	出土位置		法　量（単位cm，＊；復元値，括弧；現存値）＊①				備考
			段	遺構・地点	口径	器高	底径	最大径	
1	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	10.7	2.5	7.6	－	
2	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.2	2.7	7.5	－	
3	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.3	2.6	7.3	－	
4	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・石積内	11.4	2.1	7.5	－	
5	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.4	2.4	7.4	－	
6	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.4	2.5	6.8	－	
7	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.4	2.6	7.6	－	
8	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.5	2.7	7.7	－	
9	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.6	2.3	6.8	－	
10	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.6	2.4	7.3	－	
11	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.6	2.6	7.5	－	
12	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.7	2.5	7.0	－	
13	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.7	2.7	7.6	－	
14	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・石積内	11.8	2.2	8.0	－	
15	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.8	2.5	7.6	－	
16	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.8	2.5	7.3	－	
17	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	11.9	2.7	7.8	－	
18	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	12.0	2.8	7.5	－	
19	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・石積内	12.0	2.4	7.8	－	
20	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・土坑	12.0	2.7	7.7	－	
21	土師質土器	皿	中段	基壇状遺構ａ・石積内	12.3	2.8	8.0	－	
22	土師質土器	高台付皿	下段	瓦溜	＊9.4	5.7	高台径 5.9	－	
23	陶器	水滴	中段	基壇状遺構ｅ北東隅	3.0	5.7	3.3	6.2	
24	土師質土器	擂鉢	中段	基壇状遺構ａ・石積内	25.8	9.8	6.9	－	瓦質か
25	土師質土器	擂鉢	中段	基壇状遺構ａ・土坑	26.5	9.5	－	－	瓦質か
26	瓦質土器	鍋	中段	基壇状遺構ａ・石積内	31.9	12.3	22.7	－	
27	土師質土器	鍋	中段	基壇状遺構ａ・石積外南東側	37.2	13.5	22.0	－	

＊①法量；原則最大値を示す。以下，同じ。

（2）瓦

報告No.	器種①	器種②	出土位置		法量（単位cm，＊；復元値，括弧；現存値）				備考
			段	遺構・地点	長さ	幅・径＊①	高さ・弧深＊②	その他	
28	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	(12.0)	10.0	5.4		
29	瓦	軒丸瓦（菊花文）	中段	北東側	(8.1)	10.1	5.4		
30	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	(7.2)	10.2	5.4		
31	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	(8.3)	10.2	5.9		
32	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	表土	(7.6)	＊10.2	5.6		
33	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	(17.0)	10.2	5.6		
34	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	(15.0)	10.1	5.5		瓦当 1/2 欠失。
35	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	(15.2)	＊10.0	6.0		
36	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	(17.3)	10.1	5.6		
37	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段		(2.3)	(10.2)	－		
38	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	(5.8)	10.2	6.2		
39	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	表土	(3.7)	10.2	－		
40	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	－	＊10.5	－		
41	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	(19.6)	10.4	5.8		
42	瓦	軒丸瓦（菊花文）	下段	瓦溜	(18.3)	10.5	5.3		
43	瓦	軒丸瓦（菊花文）	中段	基壇状遺構ａ周囲	(9.9)	11.5	6.7		
44	瓦	軒丸瓦（三巴文）	中段	基壇状遺構ａ周囲	(4.0)	14.0	－		
45	瓦	軒丸瓦（三巴文）	中段	北東半	－	＊14.0	－		
46	瓦	軒丸瓦（三巴文）	中段	基壇状遺構ｃ・ｄ付近	(7.3)	＊14.0	－		
47	瓦	軒丸瓦（－）	中段	南西半	(11.0)	Ｂ (9.9)	－		瓦当外れ。
48	瓦	軒丸瓦（－）	下段	瓦溜	(25.1)	Ｂ 9.8	4.8	玉縁部欠失	瓦当部欠失。釘孔１あり。
49	瓦	軒丸瓦（－）	下段	瓦溜	(27.2)	Ｂ 10.2	5.8	玉縁部長さ 3.3	玉縁部に釘孔１あり。
50	瓦	軒丸瓦（－）	下段	瓦溜	(23.9)	Ｂ 10.1	5.4		瓦当はずれ，玉縁部欠失。
51	瓦	軒丸瓦（－）	中段	基壇状遺構ａ周囲	(26.0)	Ｂ (10.7)	5.6	玉縁部長さ (1.9)	玉縁部に釘孔１あり。
52	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段	南西半	－	－	－	瓦当面高さ 3.4	
53	瓦	軒平瓦（連珠文）	中段	基壇状遺構ａ周囲	－	－	－	瓦当面高さ 3.5	
54	瓦	軒平瓦（連珠文）	中段	南西半	(17.3)	Ｂ (9.5)	－	瓦当面高さ 3.6	
55	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段		(12.2)	Ａ 15.0	Ａ 3.0	瓦当面高さ 3.4	
56	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段	表土	(7.8)	Ｂ 15.3	Ｂ 2.8	瓦当面高さ 3.6	
57	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段	瓦溜	21.4	Ｂ 14.4	Ｂ 2.6	瓦当面高さ 3.8	釘孔１あり。
58	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段	瓦溜	(19.5)	Ｂ 14.6	Ｂ 2.8	瓦当面高さ 3.7	釘孔１あり。
59	瓦	軒平瓦（連珠文）	中段	南西半	(13.1)	Ａ 15.0	Ａ 3.3	瓦当面高さ 3.5	
60	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段	瓦溜	(19.1)	Ａ (19.1)	Ｂ 2.8	瓦当面高さ 3.5	釘孔１あり。
61	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段	瓦溜	(19.5)	Ａ 15.1	Ａ 3.4	瓦当面高さ 3.6	

報告No.	器種①	器種②	出土位置		法　量（単位cm，＊；復元値，括弧；現存値）				備考
			段	遺構・地点	長さ	幅・径＊①	高さ・弧深＊②	その他	
62	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段	瓦溜	(15.5)	B 15.1	A (2.6)	瓦当面高さ 3.6	
63	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段	瓦溜	(5.4)	B (16.5)	A 3.4	瓦当面高さ 3.5	隅切瓦，釘孔 1 あり。
64	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段	基壇状遺構 f 南西辺付近	(11.5)	A (15.0)	A (2.0)	瓦当面高さ 3.9	隅切瓦，釘孔 1 あり。
65	瓦	軒平瓦（連珠文）	下段	瓦溜	19.6	A 1 7.5	A 3.6	瓦当面高さ 3.7	隅切瓦，釘孔 2 あり。
66	瓦	軒平瓦（連巴文）	下段	南西半	−	−	−	瓦当面高さ (4.0)	
67	瓦	軒平瓦（連巴文）	下段	南西半	−	−	−	瓦当面高さ 5.1	
68	瓦	軒平瓦（連巴文）	中段	基壇状遺構 a 周囲	−	−	−	瓦当面高さ (5.4)	
69	瓦	軒平瓦（連巴文）	中段		−	−	−	瓦当面高さ 5.4	
70	瓦	軒平瓦（連巴文）	中段	南西半	(15.5)	−	−	瓦当面高さ (2.5)	
71	瓦	軒平瓦（連巴文）	中段	基壇状遺構 a 周囲	(23.4)	−	−	瓦当面高さ 5.1	
72	瓦	軒平瓦（連巴文）	下段	瓦溜	24.5	−	−	瓦当面高さ 5.2	
73	瓦	軒平瓦（連巴文）	中段	基壇状遺構 a 周囲	(10.6)	B 17.4	B 3.1	瓦当面高さ 6.2	
74	瓦	軒平瓦（連巴文）	中段	基壇状遺構 a 周囲	(10.2)	A17.5	B 3.1	瓦当面高さ 6.5	
75	瓦	軒平瓦（連巴文）	中段	南西半	(17.7)	A 20.3	A 3.7	瓦当面高さ 6.3	
76	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	26.2	B 10.4	5.0	玉縁部長さ 3.3	
77	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	24.8	B 9.1	5.1	玉縁部長さ 3.7	
78	瓦	丸瓦	中段	基壇状遺構 a 周囲	28.7	B 10.7	6.5	玉縁部長さ 3.2	
79	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	26.2	B 9.4	5.5	玉縁部長さ 2.9	
80	瓦	丸瓦	中段	基壇状遺構 a 周囲	26.9	B 9.9	5.1	玉縁部長さ 3.6	
81	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	(25.0)	B 10.3	B 4.9	玉縁部長さ (1.9)	
82	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	(20.4)	B 9.9	5.7	玉縁部長さ 3.5	玉縁部に釘孔 1 あり。
83	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	26.6	B 10.1	5.2	玉縁部長さ 3.7	
84	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	26.4	B 10.2	B 5.3	玉縁部長さ 3.1	
85	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	(27.2)	B 10.2	B 5.3	玉縁部長さ 3.2	
86	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	(24.3)	B 10.5	5.3	玉縁部長さ (2.6)	
87	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	(13.2)	B 10.0	5.1	玉縁部長さ 3.2	玉縁部に釘孔 1 あり。
88	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	28.1	B 9.9	4.9	玉縁部長さ (3.4)	
89	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	(26.4)	B 10.1	4.9	玉縁部長さ 4.0	
90	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	(26.2)	B 10.0	5.1		
91	瓦	丸瓦	下段	瓦溜	(25.8)	B 10.2	5.4	玉縁部長さ (2.1)	
92	瓦	丸瓦	中段	基壇状遺構 a 周囲	(23.7)	(12.0)	5.6		無段式
93	瓦	丸瓦	中段	基壇状遺構 a 周囲	(26.0)	B 13.9	7.1	玉縁部長さ 4.7	
94	瓦	丸瓦	中段	基壇状遺構 a 周囲	(19.6)	B 12.6	6.7		
95	瓦	丸瓦	中段	基壇状遺構 a 周囲	(20.5)	B 12.5	6.9	玉縁部長さ 4.5	
96	瓦	丸瓦	中段	南西半	32.1	B 12.7	7.3	玉縁部長さ 4.2	
97	瓦	丸瓦	中段	基壇状遺構 a 周囲	33.1	B 13.0	7.4	玉縁部長さ 5.4	

報告No.	器種①	器種②	出土位置		法　量（単位cm，＊；復元値，括弧；現存値）				備考
			段	遺構・地点	長さ	幅・径＊①	高さ・弧深＊②	その他	
98	瓦	平瓦	下段	瓦溜	23.5	C（14.1）	C 3.1		
99	瓦	平瓦	下段	瓦溜	23.9	C 14.4	C 3.1		
100	瓦	平瓦	下段	瓦溜	(17.4)	C 14.0	C 3.4		
101	瓦	平瓦	下段	瓦溜	(13.6)	B 14.1	B 2.9		
102	瓦	平瓦	下段	瓦溜	(18.8)	C 14.3	B 3.2		
103	瓦	平瓦	下段	瓦溜	23.7	C 13.7	B 3.0		
104	瓦	平瓦	下段	瓦溜	(18.8)	B 14.6	B 2.9		
105	瓦	平瓦	下段	瓦溜	(15.2)	B 14.7	B 3.1		器壁特に薄い（0.9～1.0㎝）。
106	瓦	平瓦	中段		30.1	B 19.1	(3.0)		
107	瓦	平瓦	下段	瓦溜	30.4	C 19.0	C 2.7		
108	瓦	平瓦	下段	瓦溜	30.5	B 18.5	B 3.0		
109	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	30.4	B 18.4	B 3.3		
110	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	(24.0)	B 18.6	B 3.3		
111	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	30.5	B 17.9	C 2.5		
112	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	30.1	B ＊18.0	B 2.7		
113	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	29.9	B（16.4）	－		
114	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	(19.8)	B 18.7	B 3.0		釘孔1あり。
115	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	(14.6)	B 17.5	B 3.0		
116	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	(17.8)	B 17.8	B 2.8		
117	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	(19.5)	B 19.7	B 2.7		釘孔1あり。
118	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	(21.9)	B 18.9	B 2.4		
119	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	(15.6)	B 17.9	B 3.2		
120	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	(17.0)	B 18.1	B 3.0		器壁0.6～1.1㎝と特に薄い。
121	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	(16.5)	B（13.6）	－		釘孔1あり。
122	瓦	平瓦	中段	基壇状遺構a周囲	30.4	C 19.2	B 2.8		
123	瓦	平瓦	下段	瓦溜	(27.2)	B 10.3	B 5.2		隅切瓦，釘孔1あり。
124	瓦	雁振瓦	中段	基壇状遺構a周囲	38.1	B 21.9	8.3	玉縁部長さ3.6	
125	瓦	鬼瓦（左珠文帯）	下段	基壇状遺構f付近	破片の大きさ 13.6×7.7，厚さ 3.1（板状部分）				
126	瓦	鬼瓦（左珠文帯）	下段	基壇状遺構f付近	破片の大きさ 13.9×7.6，厚さ 3.1（板状部分）				
127	瓦	鬼瓦（右珠文帯）	下段	基壇状遺構f付近	破片の大きさ 6.8×7.3，厚さ 3.2（板状部分）				
128	瓦	鬼瓦（右珠文帯）	下段	表土	破片の大きさ 11.5×9.2，厚さ 3.4（板状部分）				
129	瓦	鬼瓦（角）	中段	南西半					
130	瓦	鬼瓦（－）	中段	基壇状遺構a周囲					

＊①幅・径；「径」は軒丸瓦の瓦当の直径。その他は原則，幅とする。B；瓦当面径が計測できない時は断面部分の幅を計測したもの。
軒平瓦の幅は瓦当面の上弦幅；A，平瓦部の断面部分の幅；B，平瓦広端部の幅；C（B・Cとも原則上弦幅）を付ける。
＊②高さ・弧深；軒丸瓦は瓦当部と丸瓦部の境の「高さ」，また丸瓦は残存部位の最大の「高さ」，軒平瓦・平瓦は両側端から上弦の最も深い中央部分までの「弧深（深さ）」で，軒平瓦は瓦当面における，また平瓦は断面部分（B）あるいは広端部（C）での数値を示す。

（3）石仏

報告No.	器種	出土位置		法量（単位cm・kg，＊；復元値，括弧；現存値）				材質＊①	備考
		段	遺構・地点	高さ	幅	厚さ	重さ		
131	石仏	中段	C群	20	16.5	7.6	4.0	AⅡ	光背形
132	石仏	－	南調査区	27	19.6	9.1	7.2	BⅠ	光背形
133	石仏	－	南調査区	35.1	24.2	11.3	14.3	BⅢ	光背形
134	石仏	－	南調査区	37	24.8	12.0	13.5	BⅠ	光背形
135	石仏	－	南調査区	42.7	26.2	10.3	17.5	BⅠ	光背形
136	石仏	－	南調査区	49.9	27.1	12.4	24.3	BⅢ	光背形
137	石仏	中段	南端地表面露出	51	31	16	－	花崗岩	坐像
138	石仏	中段	南端地表面露出	102	50	31	－	花崗岩	阿弥陀如来坐像
139	石仏	下段	東端地表面露出	84	39	22	－	花崗岩	地蔵菩薩立像
140	石仏	下段	東端地表面露出	64	38	23	－	花崗岩	坐像

＊①「材質」＝A；結晶質石灰岩（AⅠ；細粒，AⅡ；粗粒），B；黒雲母花崗岩（BⅠ；細粒，BⅡ；粗粒，BⅢ；中粒）。

（4）五輪塔部材

報告No.	器種	出土位置		法量（単位cm・kg，＊；復元値，括弧；現存値）＊①			材質＊②	備考
		段	遺構・地点	高さ	幅・最大径	重さ		
141	空風輪	中段	C群	15.7	空 9.3，風 9.4	1.6	A Ⅰ	
142	空風輪	中段	D群	17.6	空 9.2，風 10.1	1.8	A Ⅰ	
143	空風輪	中段	A群	18.9	空 9.1，風 9.6	2.0	A	
144	空風輪	中段	D群	22.5	空 11.7，風 12.3	3.8	A Ⅰ	
145	空風輪	下段	瓦溜	(23.1)	空 11.0，風 12.1	3.7	A Ⅰ	
146	空風輪	中段	A群	(19.5)	空 13.2，風 13.8	4.7	B	
147	空風輪	中段	C群	19.2	空 13.8，風 14.4	5.4	B	
148	空風輪	中段	B群	(19.9)	空 13.9，風 14.8	5.7	B	
149	空風輪	下段	基壇状遺構 f	(19.3)	空 12.7，風 14.2	5.1	B	
150	空風輪	下段	基壇状遺構 f	(18.6)	空 13.2，風 14.0	4.9	B	
151	空風輪	中段	基壇状遺構 c 付近	(27.8)	空 18.4，風 20.1	14.1	B 2	梵字あり
152	空風輪	中段	B群	(27.3)	空 18.5，風 19.8	14.2	B	梵字あり
153	空風輪か	下段	中～下段間斜面	(17.0)	空 9.8，風 10.5	(2.3)	A Ⅰ	
154	相輪か	中段	基壇状遺構 c	(5.7)	8.0	－	B Ⅱ	
155	火輪	中段	A群	(5.7)	(12.4)	(0.73)	A Ⅱ	破片
156	火輪	中段	A群	(5.0)	(12.2)	(0.49)	A Ⅰ	破片
157	火輪	中段	D群	6.4	13.0	1.7	A Ⅰ	
158	火輪	中段	C群	7.1	15.0	2.8	A Ⅰ	
159	火輪	下段	基壇状遺構 f	7.2	15.6	2.9	A Ⅰ	
160	火輪	下段	瓦溜上	10.2	16.5	4.4	A Ⅰ	
161	火輪	下段	瓦溜上	9.9	17.5	5.0	A Ⅰ	
162	火輪	中段	基壇状遺構 e	10.8	17.6	5.9	B Ⅱ	
163	火輪	中段	A群	14.2	19.5	8.7	B Ⅱ	
164	火輪	下段	調査区外	14.1	18.9	9.2	B Ⅰ	
165	火輪	中段	B群	13.1	20.3	9.3	B Ⅱ	
166	火輪	下段	調査区外	14.2	23.2	11.8	B Ⅰ	
167	火輪	中段	B群	16.4	25.8	16.4	B Ⅰ	
168	火輪	中段	B群	17.0	24.6	17.5	B Ⅰ	
169	火輪	中段	B群	20.7	32.7	35.0	B Ⅰ	梵字あり
170	水輪	中段	C群	15.3	16.7	5.9	A Ⅰ	
171	水輪	下段	基壇状遺構 f	14.9	17.2	6.1	A Ⅰ	
172	水輪	中段	D群	15.9	14.7	5.0	A Ⅰ	
173	水輪	下段	基壇状遺構 f	17.5	16.3	7.1	A Ⅰ	
174	水輪	下段	基壇状遺構 f	18.8	19.3	(7.3)	A Ⅱ	
175	水輪	中段	A群	16.7	21.5	11.4	B Ⅱ	

報告No.	器種	出土位置		法量（単位cm・kg，＊；復元値，括弧；現存値）＊①			材質＊②	備考
		段	遺構・地点	高さ	幅・最大径	重さ		
176	水輪	中段	基壇状遺構ｅ東隅	(14.7)	21.8	(10.1)	ＢⅡ	
177	水輪	中段	地表面	(18.4)	23.2	14.2	ＢⅠ	
178	水輪	中段	Ｂ群	18.4	23.7	14.0	ＢⅡ	
179	水輪	下段	地表面	19.8	24.1	15.0	ＢⅠ	
180	水輪	下段	地表面	18.7	24.7	16.1	ＢⅡ	
181	水輪	下段	地表面	(17.3)	24.9	12.5	ＢⅡ	
182	水輪	中段	地表面	18.8	25.1	16.0	ＢⅠ	
183	水輪	下段	調査区外	(20.2)	25.2	17.5	ＢⅠ	
184	水輪	下段	地表面	22.7	27.9	22.9	ＢⅠ	
185	水輪	中段	Ｂ群	23.7	29.5	27.7	ＢⅠ	
186	水輪	中段	地表面	(24.4)	32.4	(32.5)	ＢⅡ	
187	水輪	中段	地表面	29.4	35.0	52.5	ＢⅠ	梵字あり
188	水輪	下段	地表面	30.8	36.2	60.0	ＢⅠ	梵字あり
189	地輪	中段	基壇状遺構ｂ	6.9	12.7	2.2	ＡⅡ	
190	地輪	中段	Ｄ群	9.8	13.5	4.2	Ａ	
191	地輪	下段	瓦溜上	10.7	16.7	6.4	Ａ	
192	地輪	下段	瓦溜上	9.7	17.5	6.4	Ａ	
193	地輪	中段	Ｂ群	8.1	23.0	10.2	Ａ	
194	地輪	中段	Ａ群	17.0	23.5	17.3	ＢⅡ	
195	地輪	中段	Ｂ群	17.3	24.7	22.3	ＢⅡ	

＊①「法量」＝いずれも最大値。「高さ」はほぞを含む。

＊②「材質」＝Ａ；結晶質石灰岩（ＡⅠ；細粒，ＡⅡ；粗粒），Ｂ；黒雲母花崗岩（ＢⅠ；細粒，ＢⅡ；粗粒）。

（5）古銭

報告No.	銭種＊①	初鋳年	王朝	出土位置		法量（単位cm・g，括弧；現存値）		残存状況＊②	備考
				段	遺構・地点	外径	重さ		
196	開元通寶	621 年	唐	中段	基壇状遺構ａ・石積内	2.41	1.64	○	
197	聖宋元寶Ａ	1101 年	北宋	中段	基壇状遺構ａ・石積内	2.36	2.32	◎	
198	永楽通寶か	1408 年	明	中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.40	1.78	○	
199	洪武通寶	1368 年	明	中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.18	3.79	◎	
200	熙寧元寶Ｂ	1068 年	北宋	中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.32	2.16	◎	
201				中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.28	2.50	◎	銭銘あり。
202	明道元寶Ｂか	1032 年	北宋	中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.30	2.88	◎	
203	永楽通寶	1408 年	明	中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.41	2.88	◎	
204				中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.25	1.43	◎	銭銘あり。
205	元符通寶Ａか	1098 年	北宋	中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.33	2.91	◎	
206				中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.33	1.95	◎	銭銘あり。
207				中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.34	2.12	◎	銭銘あり。
208	元豊通寶Ｂか	1078 年	北宋	中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.37	2.41	◎	
209				中段	基壇状遺構ａ・石積内（鍋 26 内一括）	2.27	1.80	◎	
210				中段	基壇状遺構ａ・石積内	(2.1)	0.61	2/3	無文銭か
211				中段	基壇状遺構ａ・石積内	(1.8)	0.50	2/3	無文銭か
212				中段	基壇状遺構ａ・石積内	(1.9)	0.67	2/3	無文銭か
213				中段	基壇状遺構ａ・石積内	2.10	0.83	○	無文銭か
214	熙寧元寶Ａか	1068 年	北宋	中段	基壇状遺構ａ・石積内	2.32	1.68	◎	
215				中段	基壇状遺構ａ・石積内	2.2	0.72	4/5	
216				中段	基壇状遺構ａ・石積内	2.2	0.68	1/2	
217				中段	基壇状遺構ａ・石積内	－	0.18	1/3	銭銘あり。
218				中段	基壇状遺構ａ・石積下面	－	0.83	1/2	
219				中段	基壇状遺構ａ・石積下面	－	0.38	1/3	
220				中段	基壇状遺構ａ・石積下面	－	0.57	1/2	
221				中段	基壇状遺構ａ・石積下面	(1.8)	0.63	○	
222	聖宋元寶Ａ	1101 年	北宋	中段	基壇状遺構ａ・石積下面	－	0.40	1/3	
223	皇宋通寶Ａ	1039 年	北宋	中段	基壇状遺構ａ・石積下面	2.38	4.12	◎	
224	天聖元寶Ａ	1023 年	北宋	中段	基壇状遺構ａ・石積下面	2.45	2.75	○	
225				中段	基壇状遺構ａ・石積下面	2.25	2.04	◎	
226				中段	基壇状遺構ａ・石積下面	－	0.72	1/2	銭銘あり。
227				中段	基壇状遺構ａ・石積下面	2.0	1.13	◎	
228				中段	基壇状遺構ａ・土坑内	2.1	1.62	◎	無文銭か
229				中段	基壇状遺構ａ・土坑内	2.15	1.95	◎	無文銭か
230				中段	基壇状遺構ａ・土坑内	2.23	1.54	◎	無文銭か

報告No.	銭種＊①	初鋳年	王朝	出土位置		法量（単位cm・g，括弧；現存値）		残存状況＊②	備考
				段	遺構・地点	外径	重さ		
231				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.1	1.37	3/4	無文銭か
232	洪武通寶	1368年	明	中段	基壇状遺構a・土坑内	-	0.73	1/2	
233				中段	基壇状遺構a・土坑内	1.85	0.79	◎	無文銭か
234				中段	基壇状遺構a・土坑内	(2.05)	1.02	7/8	無文銭か
235				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.1	1.27	◎	無文銭か
236	洪武通寶	1368年	明	中段	基壇状遺構a・土坑内	2.11	1.02	◎	
237				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.09	1.41	◎	銭銘あり。
238				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.1	1.34	◎	無文銭か
239				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.05	1.24	◎	無文銭か
240				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.1	0.72	◎	無文銭か
241	天禧通寶	1017年	北宋	中段	基壇状遺構a・土坑内	2.1	1.21	○	
242				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.2	0.70	2/3	
243				中段	基壇状遺構a・土坑内	(1.9)	0.68	○	無文銭か
244	洪武通寶	1368年	明	中段	基壇状遺構a・土坑内	2.13	1.14	7/8	
245	洪武通寶	1368年	明	中段	基壇状遺構a・土坑内	2.17	1.04	2/3	
246				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.2	0.89	2/3	銭銘（「元」「寶」）あり。
247	洪武通寶	1368年	明	中段	基壇状遺構a・土坑内	-	0.47	2/3	
248				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.1	0.89	○	無文銭か
249	洪武通寶	1368年	明	中段	基壇状遺構a・土坑内	2.13	1.32	○	
250				中段	基壇状遺構a・土坑内	—	0.45	1/3	
251				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.01	0.61	2/3	銭銘（「元」「寶」）あり。
252				中段	基壇状遺構a・土坑内	—	0.69	1/2	
253				中段	基壇状遺構a・土坑内	—	0.37	1/3	
254				中段	基壇状遺構a・土坑内	2.27	1.41	○	
255				中段	基壇状遺構a・土坑内擂鉢25下面	2.05	1.56	◎	
256				中段	基壇状遺構a・土坑内擂鉢25下面	2.1	1.05	◎	無文銭か
257				中段	基壇状遺構a・土坑内擂鉢25下面	—	0.52	2/3	無文銭か
258				中段	基壇状遺構a・土坑内擂鉢25下面	—	0.45	1/3	無文銭か
259	洪武通寶	1368年	明	中段	基壇状遺構a・土坑内擂鉢25下面	2.2	1.04	7/8	
260	宋通元寶	960年	北宋	中段	基壇状遺構c西辺	2.47	2.79	◎	
261	皇宋通寶B	1039年	北宋	中段	基壇状遺構c西辺	2.44	2.01	◎	
262	景徳元寶	1004年	北宋	中段	基壇状遺構e北辺	2.43	2.98	◎	
263	嘉祐通寶B	1056年	北宋	中段	D群	2.38	2.37	◎	
264	熙寧元寶A	1068年	北宋	中段	D群	2.36	2.52	◎	
265	熙寧元寶B	1068年	北宋	中段	南西半	2.39	2.01	◎	

報告No.	銭種＊①	初鋳年	王朝	出土位置		法量（単位cm・g，括弧；現存値）		残存状況＊②	備考
				段	遺構・地点	外径	重さ		
266	天禧通寶	1017年	北宋	中段	南西半	2.55	1.90	◎	
267	開元通寶	621年	唐	中段	南西半	2.38	1.94	◎	
268	元豊通寶A	1078年	北宋	中段	基壇状遺構a付近	2.38	2.40	○	
269	大観通寶A	1107年	北宋	中段	南西半	2.39	1.61	○	
270	治平元寶B	1064年	北宋	中段	南西半	2.41	1.76	◎	
271	熙寧元寶A	1068年	北宋	中段	南西半	2.41	1.00	1/2	
272	景徳元寶か	1004年	北宋	中段	南西半	2.21	2.52	◎	
273	熙寧元寶B	1068年	北宋	中段	南西半	2.34	2.21	◎	
274	祥符元寶A	1008年	北宋	中段		2.42	2.07	◎	
275	永楽通寶	1408年	明	中段		2.52	2.47	◎	
276	（鉄銭）			下段		2.29	1.92	○	
277	政和通寶A	1111年	北宋	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.40	2.09	○	
278	元祐通寶B	1086年	北宋	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.42	3.69	◎	
279	熙寧元寶A	1068年	北宋	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.38	1.54	◎	
280	政和通寶B	1111年	北宋	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.24	2.47	○	
281	元祐通寶B	1086年	北宋	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.42	3.11	◎	
282	開元通寶	621年	唐	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.47	2.49	◎	
283	嘉祐通寶B	1056年	北宋	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.35	3.49	◎	
284	元祐通寶A	1086年	北宋	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.49	3.11	◎	
285	聖宋元寶A	1101年	北宋	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.49	3.17	◎	
286	祥符元寶A	1008年	北宋	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.52	2.49	○	
287	淳熙元寶A	1174年	南宋	下段	基壇状遺構f中央石組南西辺（一括）	2.42	2.41	○	
288	宋通元寶	960年	北宋	下段		2.36	1.74	2/3	

＊①「銭種」＝A・Bは書体の違い。A；真書体，B；篆書体。

＊②「残存状況」＝◎；完形，○：完形だが欠損あり。数値は残存割合。

（6）鉄製品

報告No.	器種①	器種②	出土位置		法量（単位cm，括弧；現存値）				頭部形態	備考
			段	遺構・地点	長さ	頭部幅	身部幅	身部厚		
289	鉄製品	刀子	中段	基壇状遺構ａ・石積内	刃部長（6.4），刃部幅（1.8），刃部厚 0.15					
290	鉄製品	釘	中段	基壇状遺構ａ周辺	(9.4)	2.0	0.9	0.9	折頭形	
291	鉄製品	釘	中段	基壇状遺構ａ周辺	7.4	1.6	0.8	0.9	折頭形	
292	鉄製品	釘	中段	基壇状遺構ａ周辺	(4.6)	－	0.6	0.6	折頭形	
293	鉄製品	釘	中段	基壇状遺構ａ周辺	(3.7)	－	0.5	0.6	折頭形か	
294	鉄製品	釘	中段	基壇状遺構ａ・石積内	(4.4)	－	0.7	0.6		
295	鉄製品	釘	中段	基壇状遺構ａ・石積内	(2.6)	－	0.3	0.3		
296	鉄製品	釘	中段	基壇状遺構ａ・石積内	(4.3)	－	0.4	0.4		
297	鉄製品	釘	中段	南西半	5.1	(1.4)	0.9	0.9	折頭形	
298	鉄製品	釘	中段	基壇状遺構ｄ・ｅ付近	3.8	1.3	0.7	0.6	折頭形	
299	鉄製品	釘	中段	基壇状遺構ｂ付近	(4.1)	－	0.8	0.8		
300	鉄製品	釘	中段	基壇状遺構ｂ付近	(1.7)	－	0.9	0.9		
301	鉄製品	短刀	下段	基壇状遺構ｆ北隅	全長（16.6），刃部幅 2.4，茎部幅 1.9，刃部厚 0.4					目釘孔あり。
302	鉄製品	釘	下段	基壇状遺構ｆ周辺	8.9	1.6	1.0	1.0	折頭形か	
303	鉄製品	釘	下段	瓦溜	(10.1)	2.2	0.8	0.9	折頭形	
304	鉄製品	釘	下段	基壇状遺構ｆ周辺	(5.6)	(1.4)	0.7	0.7	折頭形か	
305	鉄製品	釘	下段	瓦溜	(3.8)	1.5	0.8	0.8	折頭形	
306	鉄製品	釘	下段	瓦溜	(4.3)	1.4	0.9	0.9	折頭形	
307	鉄製品	釘	下段	基壇状遺構ｆ周辺	(3.6)	0.9	0.5	0.5	折頭形	
308	鉄製品	釘	下段	基壇状遺構ｆ中央	(3.0)	0.9	0.6	0.7		

Ⅴ まとめ

大柳遺跡は中世の基壇状遺構や五輪塔群で構成される仏教関連遺跡である。丘陵南端部の南西側斜面を三段に築成しており，中・下段の平坦面で基壇状遺構６基，五輪塔部材群４基や石仏群を検出した。中段の基壇状遺構ａや下段の瓦溜を中心に，土師質土器（皿･擂鉢･鍋など），瓦，古銭，鉄釘などが出土した。

（１）**検出遺構の検討**（第２表）　方形・長方形の石組から成る基壇状遺構６基と石仏・五輪塔群が主体である。中段の基壇状遺構ａは瓦葺きの施設を有し，石積下にはまじない的な意味合いのある土坑を伴う。同じく基壇状遺構ｂでは柱の礎石と思われる角礫を検出し，中央石組を囲むように１～２重の外方石列が存在することから，庇をもつ施設を伴う可能性がある。下段の基壇状遺構ｆは中央の長方形石組が瓦葺きの施設を伴う可能性がある。

以下においては，基壇状遺構と瓦溜について，方位及び平面規模の面から比較検討したい。

・遺構の方位　これらの遺構の高所側（上方斜面側），すなわち北西側長辺の指し示す方位をみてみると，Ｎ25°Ｅ～Ｎ69°Ｅの北北西～北西～西北西 - 南南東～南東～東南東のわずか44°の範囲内に納まっている。これをもう少し詳しくみてみると，

①Ｎ25°Ｅ＝基壇状遺構ｄ・ｅ

②Ｎ33°Ｅ～Ｎ36°Ｅ＝基壇状遺構ｃ・ｆ南石列北西辺・ｆ北石列北西辺

③Ｎ46°Ｅ～Ｎ49°Ｅ＝基壇状遺構ｂ（中央石組・ａ石列・ｂ石列）・基壇状遺構ｆ中央石組・瓦溜

④Ｎ69°Ｅ＝基壇状遺構ａ

の４つのグループに分かれる。①と②，②と③はそれぞれ10°程度の差だが，③と④は20°ほどの違いがみられる。これらの遺構北西辺の方位の差は時期差と考えられ，基壇状遺構ｂ～ｆの５～７基と基壇状遺構ａとの間にある程度の時期差が存在する可能性を示唆している。このことは基壇状遺構ａの平面形がほぼ正方形であるのに対して，基壇状遺構ｂ～ｆの平面形はほぼ南西－北東方向に長い横長の長方形であるという違いにも通ずると思われる。

・遺構の規模　次に，基壇状遺構の規模を比較してみたい。基壇状遺構ａと基壇状遺構ｆの中央石組を除くと各遺構は南東辺を中心に規模の不明確な部分が存在するが，ここでは残存する箇所の大きさから各遺構の規模を比較する。まず，ほぼ全容が分かる基壇状遺構ａと基壇状遺構ｆの中央石組についてみてみる。基壇面積（長辺の長さ×短辺の長さ）は一辺の長さが1.78ｍ，1.81ｍの基壇状遺構ａは3.22㎡，長辺の長さが3.52～3.62ｍ，短辺の長さが2.36ｍの基壇状遺構ｆ中央石組は8.43㎡である。この他の基壇状遺構（ｂ～ｆ）は長辺・短辺の両方あるいはいずれかが完全には残っておらず，基壇の規模や面積の全容は不明である。基壇状遺構ｃは長辺の長さがやや不明確であるが，ほぼ5.66～5.74ｍ，短辺の長さ2.52～2.72ｍで約15㎡の基壇面積とみられる。基壇状遺構ｄは平面形が台形気味の不整長方形で，長辺の長さ3.9～4.3ｍ，

短辺の長さ 2.7 ～ 3.3 mの基壇面積12.3 ㎡，基壇状遺構ｂの中央石組は南東辺の石列がなく，南西辺の長さと北東辺が不完全だが，2.88 m× 1.55 ～ 2.2 mの規模で基壇面積（現存）は 5.25 ㎡である。また，Ｌ字形の基壇状遺構ｅは 2.6 m× 1.4 ～ 2.7 mの規模で，面積は 5.33 ㎡である。完存あるいはほぼ完存する基壇状遺構ａ及び基壇状遺構ｃ～ｆ（ｆは中央長方形石組のみ）を比較すると，基壇面積では 3.22 ～ 14.9 ㎡の開きがある。基壇状遺構の長辺の長さは 2.7 ～（5.74）mと差があるが，短辺の長さは 2.36 ～ 3.3 mと差が少ない。これは各基壇状遺構が立地する段（平坦面）の大きさ（平坦面の幅＝北西 - 南東方向）に制約を受けたものであるのは勿論だが，幅が似通った横長の長方形の基壇で構成されていることは，これらの基壇状遺構の性格・構造が類似していることを物語るとみられる。

（２）**出土遺物の検討**　出土遺物による遺跡の年代の検討では，①土師質土器（皿・擂鉢・鍋）の検討，②軒丸瓦・軒平瓦の瓦当を主体とした検討，③五輪塔部材の法量・形態的特徴の検討，④古銭の北宋銭・明銭及び無文銭的なＣ類古銭など組成面の検討，の大きく４つの方法が考えられる。

①土師質土器の検討

土師質土器（皿・擂鉢・鍋）は基壇状遺構ａ（石積内・土坑）からのみ出土した。

ａ．皿　いずれも平底から直線的に斜上方に体部が延びるもので，大半が底部回転糸切り離しである。器高／口径＝0.18 ～ 0.24（平均0.22）の数値から土師質土器・皿の低平度が，そして口径／底径＝1.41 ～ 1.71（平均1.56）の数値からは同じく皿の底部から口縁にかけての体部の開き具合をみることができる。口径の 1/4 ～ 1/5 の器高と底径の 1.5 ～ 1.6 倍の口径をもつ皿は，底部から 51.5°（平均値）の角度で口縁に向って直線的に体部が延びる（平均値の口径 11.6 ㎝，器高 2.5 ㎝，底径 7.5 ㎝）。

土師質土器・皿の編年は福山市・草戸千軒町遺跡の出土資料によるもの[(1)]があり，これによると本遺跡の皿はほぼ草戸Ⅲ～Ⅳ期に含まれる。低平度からはⅢ期だが，側面観からはむしろⅣ期前半あたりに近い。よって，土師質土器・皿からは 15 世紀代という時期が考えられる。

ｂ．擂鉢　丸底の擂鉢で，灰色の胎土は瓦質に近い。類例は草戸千軒町遺跡ＳＤ 585[(2)]，ＳＤ 760[(3)]，ＳＥ 1670[(4)]，ＳＸ 2811[(5)]，安芸高田市・郡山大通院谷遺跡ＳＤ 002[(6)]，ＳＶ 405[(7)]，ＳＶ 421[(8)]，ＳＸ 309[(9)]，ＳＸ 321[(10)] などから出土している。草戸千軒町遺跡例はＳＥ 1670 が草戸Ⅳ期前半，他はいずれもⅣ期後半で 15 世紀後半～ 16 世紀初頭とされ，郡山大通院谷遺跡例は 15 世紀前半～ 16 世紀末の幅広い時期のなかで捉えられている。これらの類例はいずれも瓦質土器と報告されている。なお，大柳遺跡に近い旧甲山町内の川尻時森谷の毘沙門堂脇などからも類似した丸底の擂鉢[(11)]が出土している。

ｃ．鍋　緩やかな丸底にくの字に屈曲する口縁がつく瓦質の鍋と平底気味の底部から体部が外上方に直線的に延びるやや大型の土師質の鍋とがある。前者の類例は草戸千軒町遺跡ＳＤ 4455・

4456[12]，ＳＫ4730・4731[13]などから出土しており，草戸Ⅳ期後半の時期が与えられている。後者の類例は明確なものがない。

②軒丸瓦・軒平瓦の瓦当を主体とした検討

ａ．軒丸瓦　瓦当径10cmほどの小型品と瓦当径14cmの大型品があり，前者の瓦当文様は16弁の菊花文で外区の圏線・連珠文は伴わない。後者の瓦当文様は左巻の尾の長い三巴文で，圏線を介して外区に30個ほどの連珠文が配されている。製作技法・調整はほぼ共通している。瓦当裏の上部からやや下がった位置に丸瓦の端部を貼り付けており，外れた丸瓦前端部には斜格子状の刻みが残る。側面観は瓦当上端が尖り，丸瓦部にかけて急傾斜で下る。凸面は単位間が稜をなす縦方向の強いナデ，凹面は布目痕＋コビキＡである。

ｂ．軒平瓦　瓦当文様が連珠文の小型品と連巴文の大型品に分かれる。連珠文軒平瓦は全長20cmほど，瓦当面上弦幅15cm程度で，連巴文は長さ25cm，瓦当面上弦幅17～20cmほどである。前者は瓦当に珠文13個を連ね，上部に１条の圏線を引く。後者は直径２cmほどの左巻三巴文を５～６個並べ，上部には１条の圏線を介して珠文16個が並ぶ。また，瓦当面からみて横方向の湾曲の度合いが連珠文軒平瓦に比べると連巴文軒平瓦はやや弱いようである。そのほか，瓦当部の平瓦部への貼り付け技法はいずれも瓦当貼り付け技法であり，凸面に残る型つくりの痕跡や凹面に横方向の細かい仕上げナデが主体的にみられるなど，製作技法の面ではほぼ同じである。

ｃ．軒丸瓦・軒平瓦の時期の検討　軒瓦は小型品（菊花文軒丸瓦＋連珠文軒平瓦），大型品（三巴文軒丸瓦＋連巴文軒平瓦）のセット関係をその法量・形態などの検討や出土位置・出土状況から捉えることが可能である。小型品は下段の瓦溜から主体的に出土し，大型品は中段西半の基壇状遺構ａを中心に出土している。しかし，製作技法や調整などが小型品と大型品ではほぼ等しいことから両者はほぼ同時期のものと考えられる。小型品・大型品のそれぞれの軒丸瓦・軒平瓦のセットはこれらの瓦が葺かれる建物の規模や構造上の違いに基づくのではないかと思われる。このことは軒瓦以外の丸瓦・平瓦にもいうことができる。丸瓦・平瓦ともその法量から小型品と大型品に分けることができるが，丸瓦の小型品は一部を除いて下段・瓦溜から出土しており，大型品はいずれも中段の出土で，ほぼ基壇状遺構ａの周囲からの出土である。また，平瓦は小型品はすべて下段の瓦溜からの出土で，大型品は中段・基壇状遺構ａからの出土が多い。このように，瓦の小型品のセット（軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦）は下段の瓦溜から大半が出土しており，大型品のセットは中段の基壇状遺構ａ周囲からの出土が主体を占めるといえる。瓦の小型品は小規模で上屋の軽い建物などに葺かれ，大型品は規模の大きく上屋が比較的重厚な建物に葺かれた可能性が高い。このことから，基壇状遺構ｆには比較的小規模で簡素な建物・構造物の存在が想定され，基壇状遺構ａにはやや重厚な上屋の建物や構造物が伴っていた可能性が考えられる。

これらの瓦の時期については，軒瓦の瓦当文様，特に軒丸瓦（菊花文），軒平瓦（連珠文），軒平瓦（連巴文）を検討することで考えてみたい。なお，軒丸瓦（三巴文）については，古代末期以降中・近世を通じてみられる瓦当文様であり，時期決定の指標にはなりがたいので除外する。

山崎信二氏の研究によれば，軒丸瓦（菊花文）は中世Ⅲ期（1260～1300年），軒平瓦（連珠文）は中世Ⅰ・Ⅱ期（1180～1260年），軒平瓦（連巴文）は中世Ⅱ期（1210～1260年）の例が多い。いずれも大和・京都・和泉・播磨など畿内地域を中心としたものであるが，軒平瓦（連珠文）に和歌山県の中世Ⅷ期（1490～1575年）の例があるのを除いて，13・14世紀代にほぼ納まっている[14]。また，永井邦仁氏の研究でも愛知県内で出土例の多い軒平瓦（連珠文）は13・14世紀代にほぼ納まるとされている[15]。

このように大柳遺跡出土の瓦は，少なくとも軒丸瓦（菊花文），軒平瓦（連珠文），同（連巴文）はほぼ鎌倉・南北朝時代（中世前期）の13・14世紀代を中心とした時期とみられるようである。そのほか瓦の調整・成形面での時期決定はむつかしいが，軒平瓦瓦当裏の調整について，凸面からの縦方向の強いナデ（つよい縦方向のケズリ）主体の軒平瓦（連珠文）が横方向のナデ主体の軒平瓦（連巴文）に時期的にやや先行する可能性もあるが，両者は畿内例では中世Ⅰ期（1180～1210年）以降併存する期間が長く，全国的に縦方向の強いナデ（ケズリ）が横方向のナデによって消し去られるようになるのは中世Ⅴ期後半（14世紀後半）以降だとされている[16]。ただ，いずれにしろ軒平瓦（連珠文）と軒平瓦（連巴文）は瓦当と平瓦部の接合方法や型つくりなどその他の調整・成形面では酷似しており，大きな時期差を考えることは難しい。このことは軒丸瓦（菊花文）と軒丸瓦（三巴文），丸瓦・平瓦の小型品と大型品の間でもいえることであり，本遺跡出土の瓦はほぼ同一の調整・成形面の特徴を有し，ほぼ同一の製作技法によって造られたとみられることから，そこに大きな時期差を見出すことは困難である。

③五輪塔部材の法量・形態的特徴の検討

五輪塔は空風輪・火輪・水輪・地輪の４種の部材から成るが，本遺跡ではこれらの部材が原位置・原状を保って出土したものはない。各部材が７～19点出土しているが，組み合わせは不明である。ただ，石材的には乳白色の結晶質石灰岩製の部材が42％，黒雲母花崗岩製の部材が58％を占めている。各五輪塔部材はこの石材の違いにより形態的な特徴や法量が違う。

いずれの部材も結晶質石灰岩製のもの（以下Ａ類）が黒雲母花崗岩製の部材（以下Ｂ類）に比べると小型である。形態的には，

（１）空風輪＝Ａ類は上方突起が高く大きい。空輪は丸みが弱く，風輪は椀形である。空輪と風輪の境の括れが弱い。風輪上端面の外方への傾斜が強く，風輪下端のほぞは高く大きい。これに対して，Ｂ類の空風輪は，空輪の丸みがやや強く，椀形の風輪との境の括れはＡ類に比べるとやや強い。風輪上端面の傾斜は弱く水平に近い。下端面のほぞはやや低い。

（２）火輪＝Ａ類の火輪は低平で，軒の上下面が水平で反りはみられない。上面にはほぞ穴があるが，下面は平坦でほぞ穴は存在しない。これに対して，Ｂ類の火輪は軒幅に対する高さの度合いが大きい。軒上面の反りが大きく，軒下面にも反りがみられるものが過半を占める。上下面ともにほぞ穴が存在する。

（３）水輪＝Ａ類は肩が張り，下面側に窄まる壺形の側面観で，上面観は通常の円形のものと横

長の隅丸長方形や不整楕円形のものが目立つ。上下面両方にほぞをもつものはなく，下面のみにほぞをもつか上下面共にほぞが存在しないかである。これに対して，Ｂ類は通常の整美な扁球状の側面観に正円形の上面観で，ほぞは上下面両方にみられる。
（地輪については，法量の違い以外に形態面でのＡ・Ｂ類の顕著な差異はみられないので，省く。）
五輪塔の年代については，編年が確立していない現状では明確にしえないが，石材別の形態的特徴の差異はおき，ここでは通常の五輪塔の特徴をもつと考えられる黒雲母花崗岩製の五輪塔を主体に考えてみると，火輪の軒上面の反りが強い，軒下面に反りがみられる，屋根斜面が直線的ではなく，たるみがあるなどの形態的特徴からはごくおおまかに中世後期に入るように思われる。

④古銭の組成面の検討（第３表）

北宋銭を主体に唐銭・南宋銭・明銭と銭種不明銭がある。大半を占める北宋銭は初鋳960年の宋通元寶から初鋳1111年の政和通寶までの16種34枚である。銭種不明銭は，①銭銘はあるが，文字の欠失などにより銭種を特定できないもの（Ａ－２類），②銭銘の存否は不明だが，輪・郭などがあるもの（Ｂ類），そして③輪・郭も銭銘もとどめていないもの（Ｃ類），の３通りに分けられる。①②は通常の銭貨である可能性が考えられるが，③のＣ類は無文銭である可能性が高い。Ｃ類の古銭は計19枚を確認することができ，外径1.85～2.23㎝（平均2.09㎝），重さ0.72～1.95ｇ（平均1.28ｇ）の法量を示す。銭種を特定できたＡ－１類（洪武通寶以外）の外径（平均）2.36㎝，重さ（平均）2.54ｇに比べると，外径で0.27㎝小さく，重さで1.26ｇ軽い。これらのことから，輪や郭がなく，外径の小さいＣ類の古銭が無文銭である可能性は高い[17]。無文銭は主に堺で16世紀中頃～後半頃に生産されたとされている[18]。法量の平均値はＡ－１類が最も数値が高いが，銭銘が不明確で銭種を特定できないＡ－２類の外径（平均）2.21㎝，重さ（平均）1.88ｇ，銭銘の存否は不明で輪・郭の存在するＢ類の外径（平均）2.18㎝，重さ（平均）1.63ｇであり，いずれもＡ－１類に比べるとその数値は低い。この外径の短小さや薄さ（言い換えれば軽さ）は，背面における輪や郭の不在，銅成分86％程度という純銅銭性，そして銭銘の不鮮明さなどとともに，唐銭・北宋銭そして明銭の洪武通寶を母銭として日本の京都で13世紀後半に鋳造されはじめ，14世紀初頭～後半以降に全国に流布する模鋳銭を識別する指標とされている[19]。外径の小さい洪武通寶・天禧通寶以外のＡ－１類は法量的には通常の中国銭と同じである。銭銘の不鮮明さや成分については明確にし難いものの，背面における輪・郭の存在はみられることから，模鋳銭の可能性は少ないかと思われる。ただ，大柳遺跡出土の古銭Ａ－１類（唐・北宋・南宋・明銭）20種は，銭種順位[20]の第１～33位（第８・16・18・19・21・22・24～27・30～32位を除く）の範囲に入り，堺・京都・鎌倉の都市遺跡で出土した模鋳銭の鋳型の点数の第６・10位以外のベストテンが存在している[21]のである。

（３）**遺跡の性格と時期**　以上みてきたように，大柳遺跡は中・下段に展開する６基の基段状遺構と石仏・五輪塔群で構成される。基壇状遺構群の性格については明確ではないが，Ａ～Ｄ群と

して検出した五輪塔部材群や石仏などが本来的に安置されていた供養施設を構成していた可能性が高い。特に，基壇状遺構ａ・ｆでは祭祀（まじない）行為の痕跡がみられる。基壇状遺構ａでは石積上面・内部や石積下の土坑内で擂鉢・鍋といった大型の土師質・瓦質の容器内や周囲を中心に重なった状態の土師質土器の皿や北宋銭を主体とする古銭がまとまって出土している。この出土状況は，三次市・山崎遺跡ＳＫ９[22]のあり方と似ている。山崎遺跡例では和鏡と呪符を含む墨書のある円札２枚を伴っており，中世末期の呪術行為に伴うものと考えられている。下段の基壇状遺構ｆの中央石組南西辺中央の一角で，北宋銭を主体とする古銭11枚が一括して出土しており，やはり祭祀行為に伴うものである可能性が考えられる。これら基壇状遺構ａ・ｆにみられる祭祀行為の内容が如何なるものであるかは明らかにすることはできないが，大柳遺跡が高野山領大田荘に位置することを考えれば，そこに真言密教の色濃い影響を見出すことは十分可能であろう。ただ，これらの祭祀行為と遺跡の主体的性格としての供養施設がどのように関連するのかは定かではない。

遺跡の時期としては，出土した土師質土器・皿からは15世紀代，擂鉢からは15世紀後半～16世紀初頭頃，鍋からは15世紀末～16世紀初頭頃，そして無文銭の可能性がある古銭Ｃ類の存在からは16世紀後半が考えられることから，概ね15世紀代を中心に16世紀代にかかる時期と捉えておきたい。ただ，基壇状遺構ａの周囲や瓦溜から主に出土した瓦群は13～14世紀代を中心とする鎌倉・南北朝時代のものである可能性が高く，瓦以外の出土遺物から考えられる遺跡の主体的な時期との間に齟齬をきたすことになる。瓦群の指し示す13・14世紀の中世前期に遡る遺構は調査区内では見出せていないが，存在した可能性までも否定することはできない。ただ現状では，近くに存在した中世前期の建物を解体し，その瓦を遺跡に搬入して再利用したと考える方がより妥当性があると思われる。瓦の搬入元やそのように至った経緯・背景については現状では明らかにすることはできないが，本遺跡の時期と考えられる15～16世紀には高野山による大田荘の支配は形骸化しており[23]，毛利氏をはじめとする周辺諸勢力による侵略が本格化していたとみられることから，このような当地域の勢力図の大きな変化がその背景にあったと考えられる。

註

（１）広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「第Ⅲ章遺物　１土器類　Ｂ土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ　中世瀬戸内の集落遺跡』 1996年，162～181頁。

（２）広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「第Ⅳ章遺物　１土製品類　（１）土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ　北部地域南半部の調査』 1994年，125～129頁（127頁・Fig.4-12・95）。

（３）広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「第Ⅳ章遺物　１土製品類　（１）土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ　南部地域南半部の調査』 1995年，61～64頁（63頁・Fig.4-5・24，25）。

（４）広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「第Ⅴ章遺物　１土製品類　（１）土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ　北部地域北半部の調査』 1993年，122～125頁（124頁・Fig.5-36・282）。

（５）広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「第Ⅳ章遺物　１土製品類　（１）土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ　北部地域南半部の調査』 1994年，149～150頁（149頁・Fig.4-42・327）。

（６）財団法人　吉田町地域振興事業団『郡山大通院谷遺跡（中世編）』 2002年，64・68・69頁（第49図103）。

(7) 財団法人　吉田町地域振興事業団『郡山大通院谷遺跡（中世編）』 2002年，98・104・110・111頁（第77図284）。
(8) 財団法人　吉田町地域振興事業団『郡山大通院谷遺跡（中世編）』 2002年，107・110・111頁（第77図287）。
(9) 財団法人　吉田町地域振興事業団『郡山大通院谷遺跡（中世編）』 2002年，124・127・152・153頁（第106図440）。
(10) 財団法人　吉田町地域振興事業団『郡山大通院谷遺跡（中世編）』 2002年，128・132・155・156頁（第108図471）。
(11) 甲山町史編纂委員会編『甲山町史』資料編Ⅰ　甲山町　2003年，482～483頁。
(12) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「第Ⅳ章遺物　1土製品類　(1) 土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ　南部地域南半部の調査』 1995年，70～75頁（72頁・Fig.4-15・129）。
(13) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所「第Ⅳ章遺物　1土製品類　(1) 土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ　南部地域南半部の調査』 1995年，79～82頁（80頁・Fig.4-26・217）。
(14) 山崎信二『中世瓦の研究』 奈良国立文化財研究所　2000年
(15) 永井邦仁「愛知県における中世瓦の展開とその拡散」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』第15号　2014年，63～74頁。
(16) 山崎信二「ⅢB　製作技法や形態的変遷からみた瓦の前後関係　③顎部瓦当裏のタテケズリとヨコナデ」『中世瓦の研究』 奈良国立文化財研究所　2000年，32頁。
(17) 嶋谷和彦「堺の模鋳銭と成分分析」東北中世考古学会編『中世の出土模鋳銭』 高志書院　2001年，147～149頁。
(18) 嶋谷和彦「中世日本の銭生産」『AERA　Mook　考古学がわかる。』 朝日新聞社　1997年，122～125頁。
(19) 嶋谷和彦「模鋳銭の生産と普及」萩原三雄・小野正敏編『戦国時代の考古学』 高志書院　2003年，532～533頁。
(20) 鈴木公雄『出土銭貨の研究』 東京大学出版会　1999年，80頁・表7「出土備蓄銭銭種総順位」。
(21) 註(18)に同じ。
(22) 財団法人　広島県埋蔵文化財調査センター『山崎遺跡』 1994年
(23) 高野山領荘園としての大田荘の名がみられる最後の文献史料は，大田荘年貢の一部支出の記録である寛正4（1463）年2月17日付けの「大田荘年貢勘録状」（『高野山金剛峯寺文書』）である（蔵橋純海夫・黒木優登編『甲山町史』資料編Ⅰ　甲山町　2003年，210～211頁）。

a　大柳遺跡遠景
（空中写真，
南から）

b　調査後全景
（空中写真，
南東から）

c　調査前近景
（南西から）

図版 2

a　石仏 137
（南西から）

b　石仏 138
（南から）

c　石仏 139（左），140
（南から）

a　南調査区石仏群
（南から）

b　同上（南西から）

c　同上（南東から）

a　基壇状遺構 a
（南東から）

b　同上（南から）

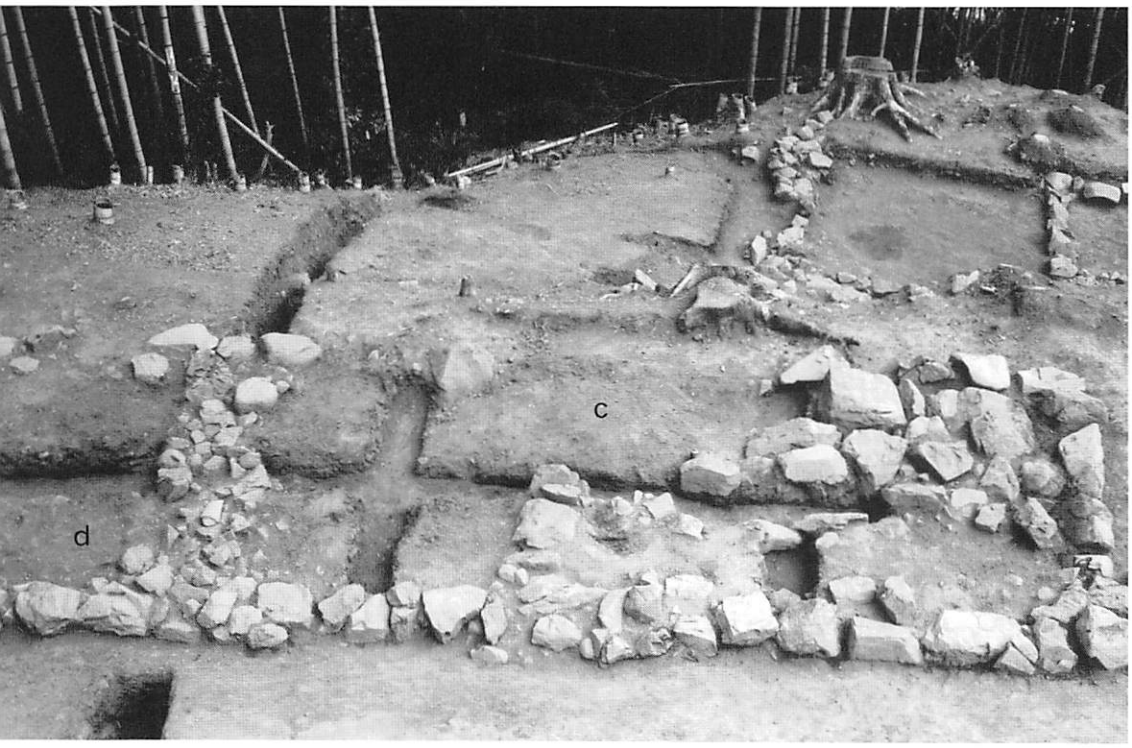
c　同上（西から）

a　基壇状遺構 a
遺物出土状況
（西から）

b　同上（南から）

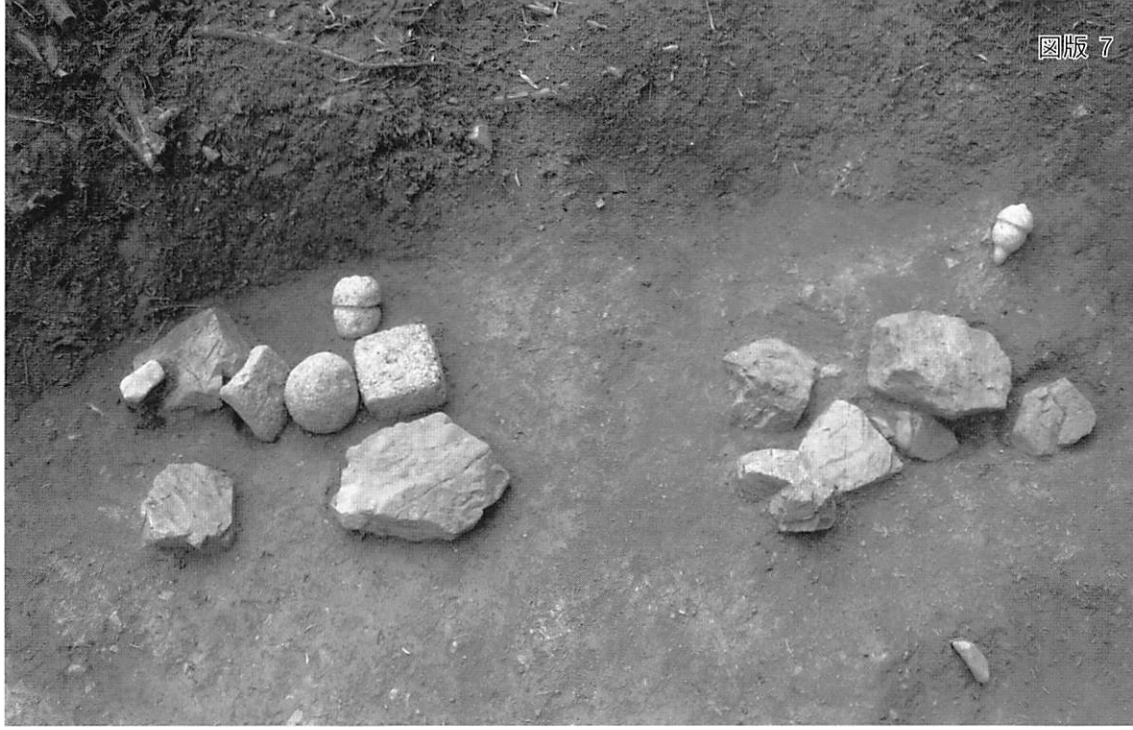
c　基壇状遺構 a 土坑内
皿・擂鉢出土状況
（西から）

a　基壇状遺構ｂ
（北西から）



b　基壇状遺構ｃ
（北西から）

c　基壇状遺構ｄ・ｅ
（北西から）



a　五輪塔部材Ａ群
（南東から）

b　五輪塔部材Ｂ群
（南東から）

c　五輪塔部材Ｄ群
（北東から）

a　下段瓦溜検出状況
（北西から）

b　同上（北西から）

c　瓦溜・通路
（北東から）

a　瓦溜（東から）

b　同上（南東から）

c　基壇状遺構 f 古銭
出土状況（南東から）

a　基壇状遺構 f
（北西から）

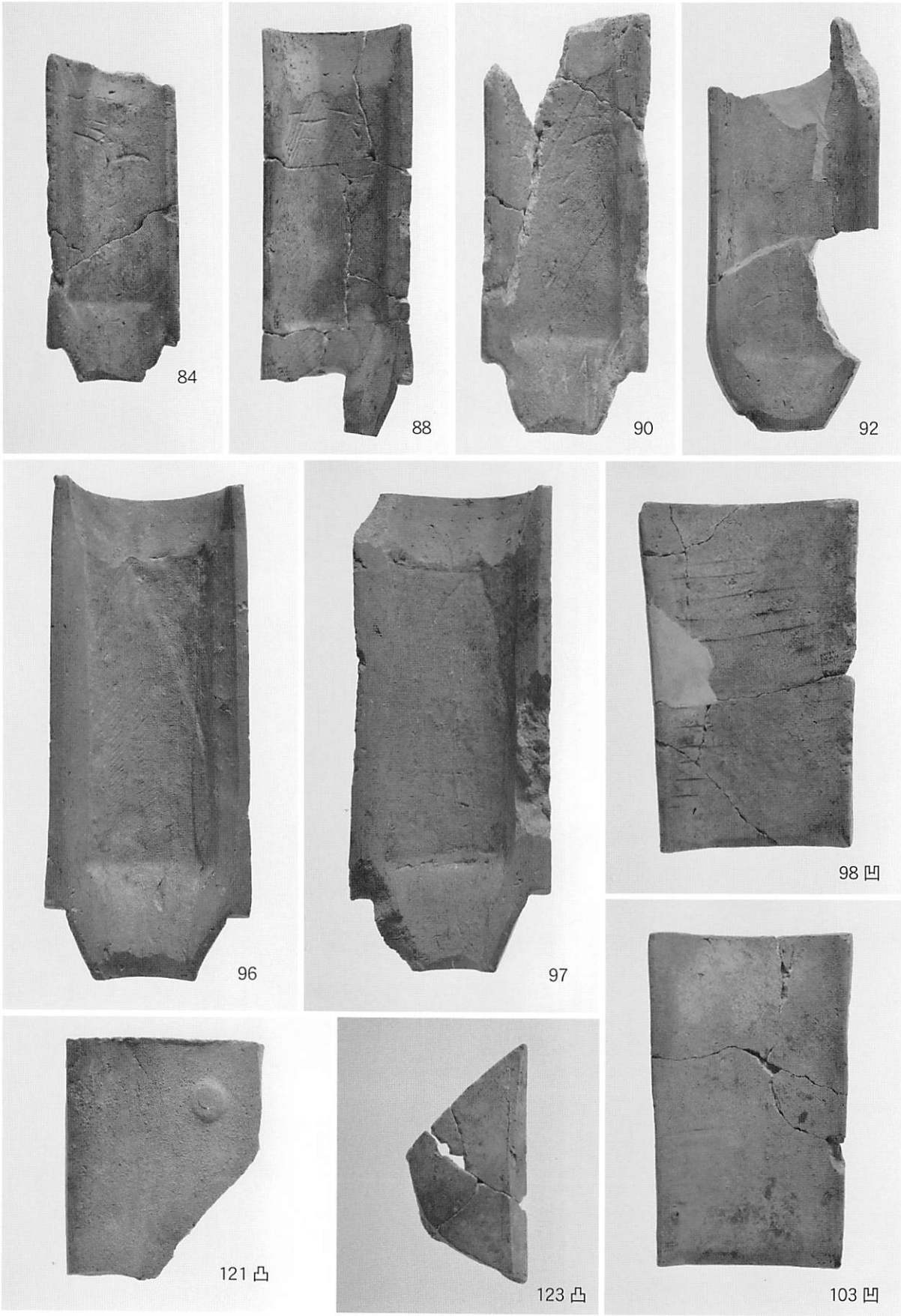
b　同上（北から）

c　基壇状遺構 f
中央長方形石組
（東から）

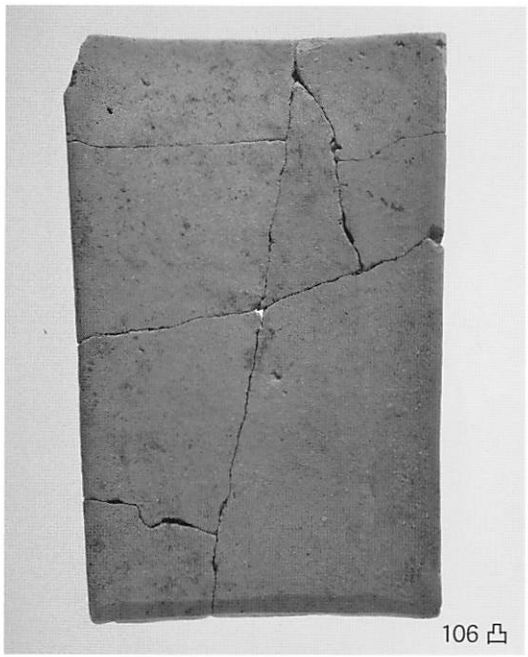
出土遺物 1　土器

出土遺物 2　瓦①

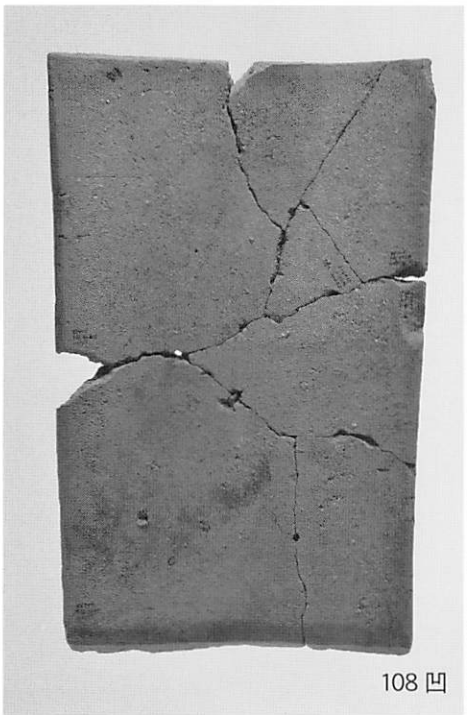
出土遺物３　瓦②

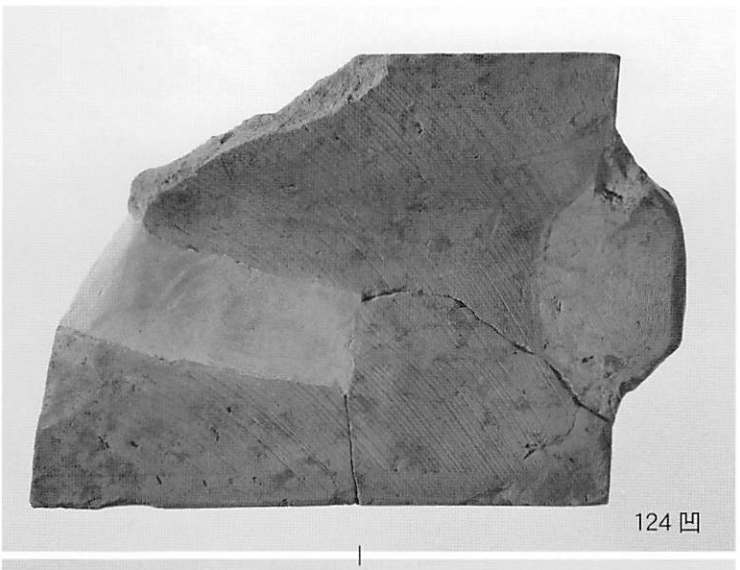


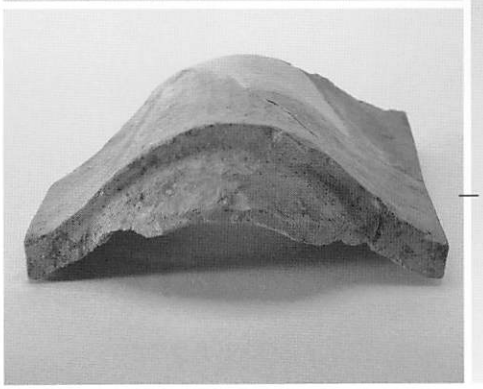
出土遺物４　瓦③

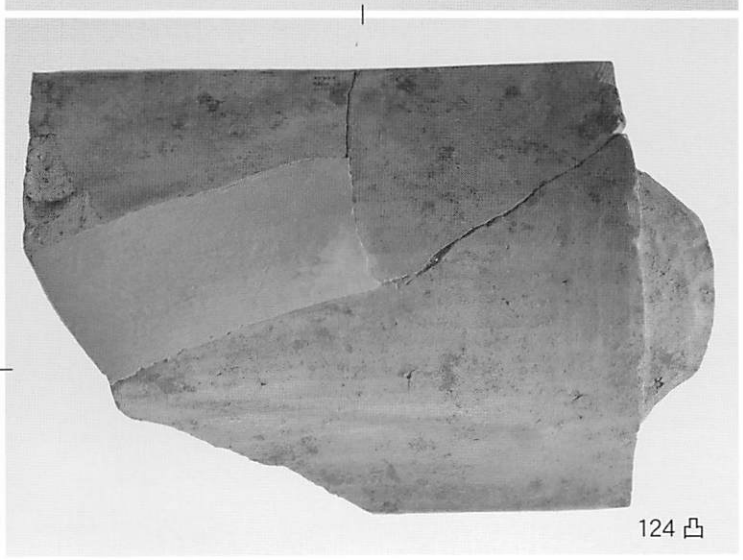

106 凸

107 凹

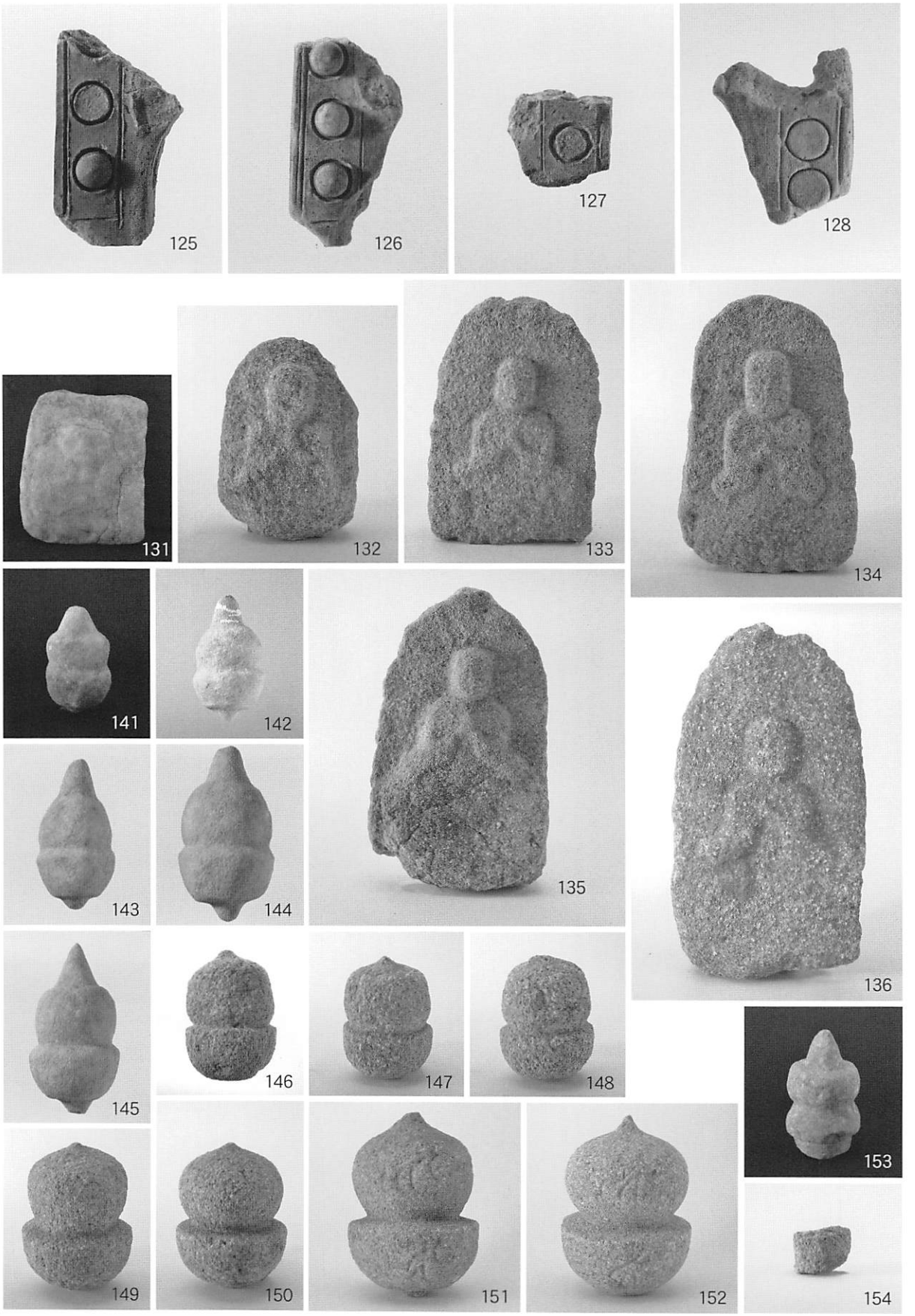

108 凹


124 凹

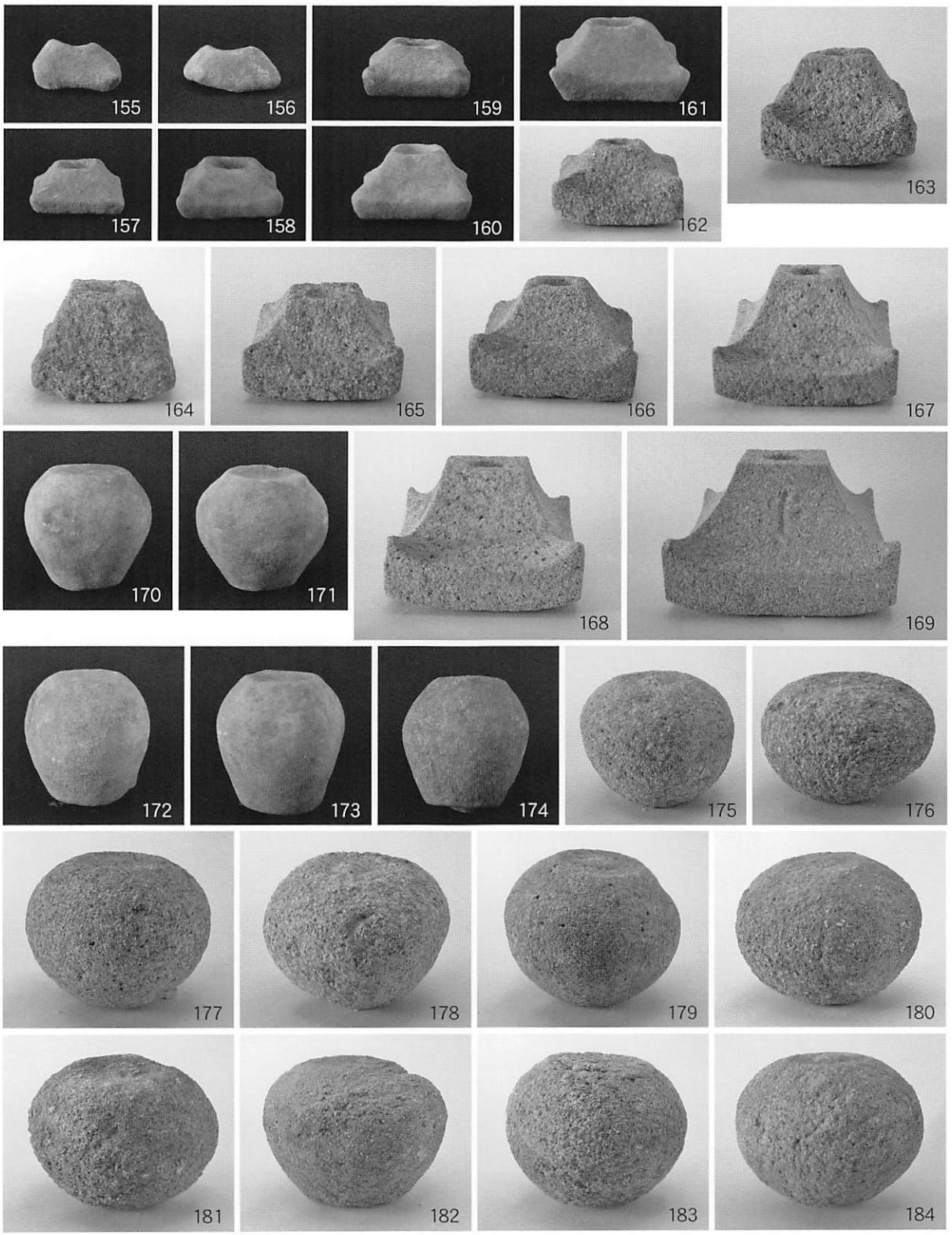



124 凸

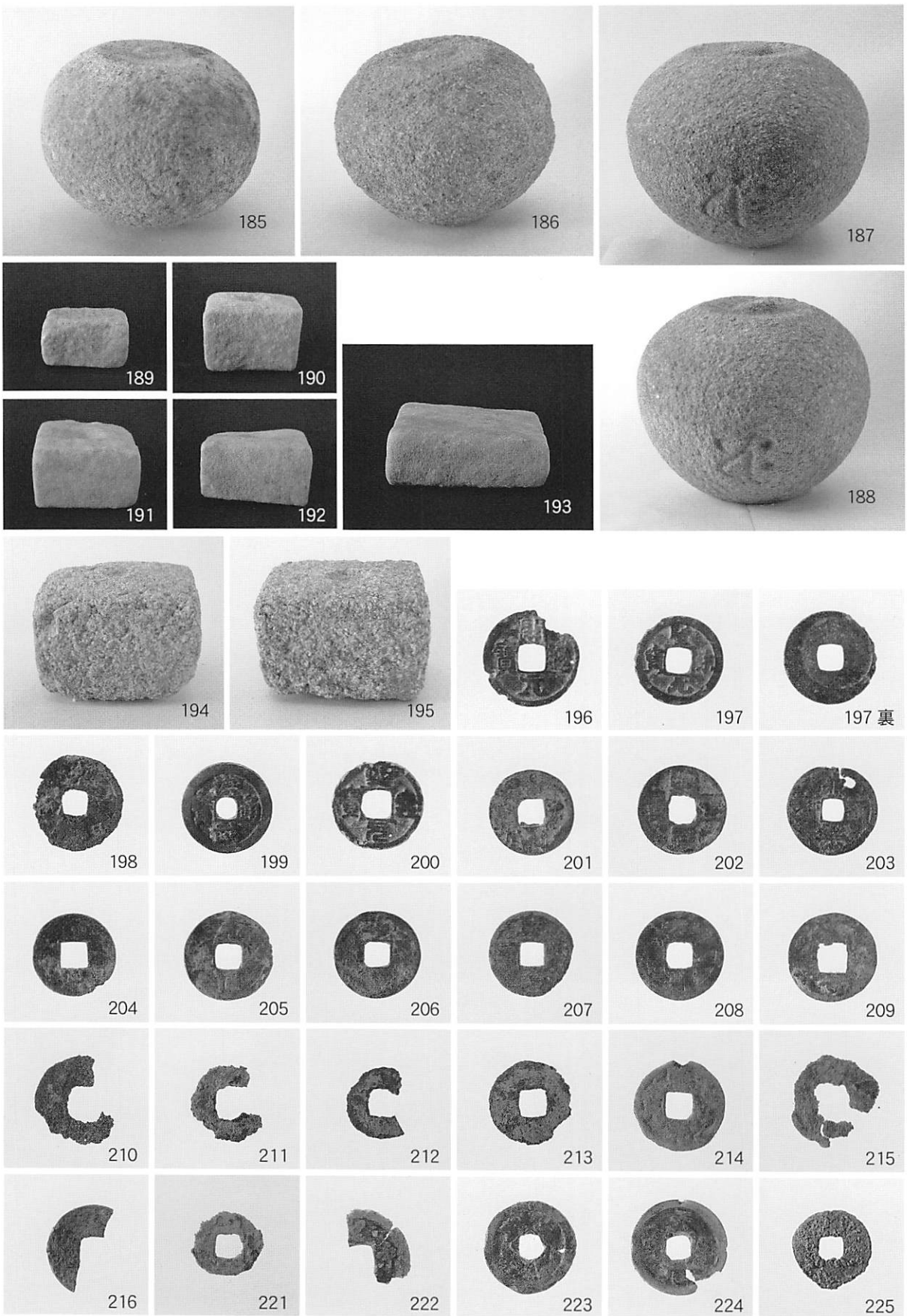
出土遺物 5　瓦④



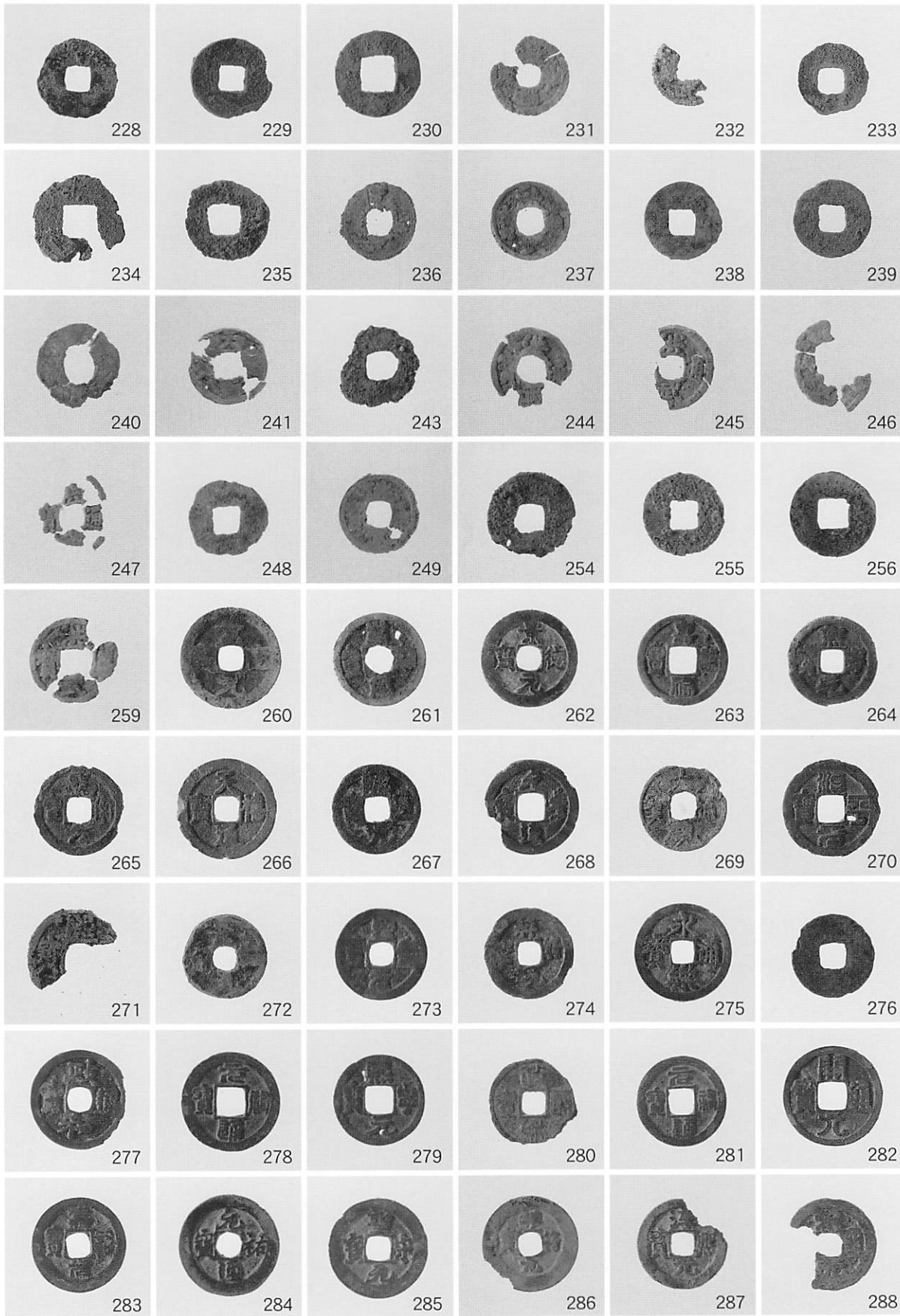
出土遺物6　瓦⑤，石仏・五輪塔部材①（空風輪）



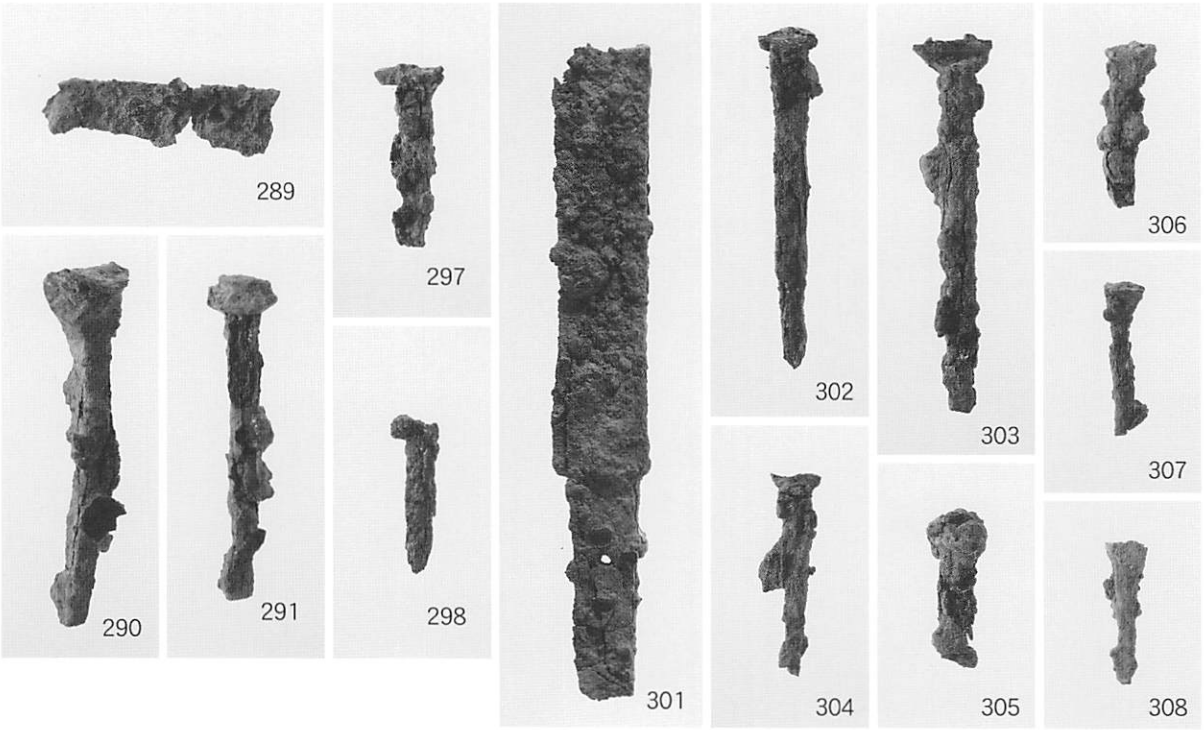
出土遺物７　五輪塔部材②（火輪・水輪）



出土遺物 8　五輪塔部材③（水輪・地輪），古銭①


228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
243
244
245
246
247
248
249
254
255
256
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288

出土遺物 9　古銭②



出土遺物 10　鉄製品

報告書抄録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく
書名	中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（43）
副書名	大柳遺跡
シリーズ名	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第71集
編著者名	梅本健治
編集機関	公益財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目8番49号　TEL082-295-5751
発行年月日	西暦2015年3月20日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
おおやなぎ 大柳遺跡	ひろしまけんせら 広島県世羅郡 世羅町大字川尻 字大柳山1141-2	34462	34461-149	34° 35′ 44″	133° 4′ 53″	20110509 ～ 20110826	504	記録保存調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大柳遺跡	仏教関連遺跡	中世	基壇状遺構6，瓦溜1，五輪塔部材群4	土師質土器（皿・擂鉢・鍋），瓦質土器（鍋），陶器（水滴），瓦，石仏，五輪塔，古銭（北宋・明ほか），鉄製品（短刀・刀子・鉄釘）	中世の瓦葺きを含む施設の基壇の検出。石仏や五輪塔をともなう供養施設群。

要約

高野山領大田荘東半の桑原方に含まれる中世後期の仏教関連遺跡で，丘陵先端部に造りだされた２つの平坦面に五輪塔や石仏を納めた供養施設とみられる６基の基壇群が存在する。供養施設のなかには瓦葺きのものがみられる。基壇状遺構aからは土師質土器・皿や擂鉢・鍋などの土器類とともに北宋銭を主体とする古銭が多く出土した。古銭のなかには無文銭と思われるものもある。出土遺物から中世後期の遺跡とみられ，大田荘が形骸化したあと，周辺諸勢力の草刈り場と化した当地域の政治や社会，宗教・信仰の様相を窺うために恰好の資料を提供した。

公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第71集

中国横断自動車道尾道松江線建設に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告（43）

大柳遺跡

発行日　平成27（2015）年3月20日
編　集　公益財団法人 広島県教育事業団事務局 埋蔵文化財調査室
〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目8番49号
TEL（082）295-5751　FAX（082）291-3951
発　行　公益財団法人 広島県教育事業団
印刷所　朝日精版印刷 株式会社